



遞信受驗準備書

正編

日本遞信教育會

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 1 2 3 4

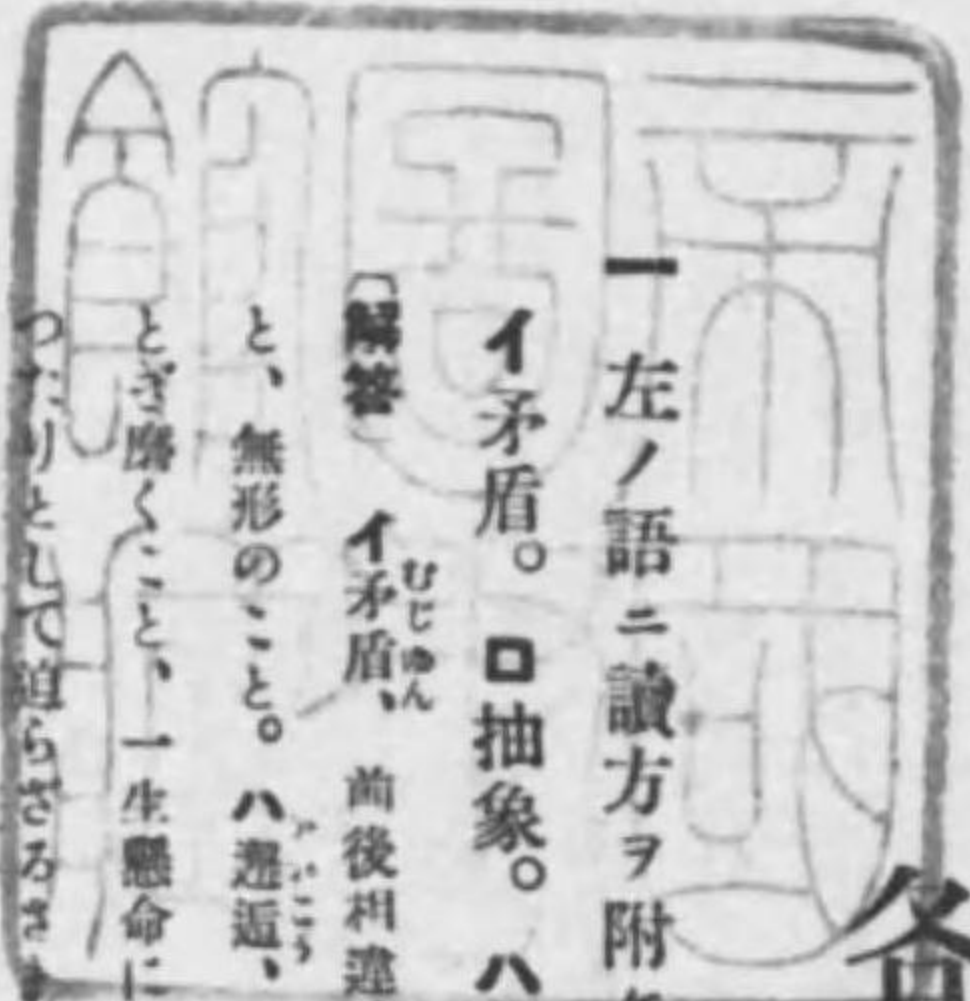
始





# 遞信國語講座

## 各試験問題解答(一)



一 左ノ語ニ讀方ヲ附ケ解釋セヨ。

イ矛盾。ロ抽象。ハ邂逅。ニ淬厲。ホ從容。

〔解答〕 イ矛盾、前後相違すること。ロ抽象、形體のないこと、無形のこと。ハ邂逅、豫想せずして出會ふこと。ニ淬厲、とき廣くこと。一生懸命に精を出す。ホ從容、動作振舞がゆとりとして進らざること。云ふ語。

二 左ノ語句ヲ解釋セヨ。

イ齒牙に掛くるに足らず。ロ間髪を容れず。ハ斯學泰斗。ニ群雄割據。ホ消費節約。

〔解答〕 イなんだ、かんだととりあげていふ程のこともない。ロ物事の極めて接連したこと、髪毛一本もさしいる、間もない。

こと。ハ語學なら語學博物なら博物とその學問に最も秀でて

れた大家。ニ多くの英雄が各自に地所を割して居る。ホ費用をむだにせずつつましくすること。

三 左ノ假名ヲ漢字ニ改メヨ。

イいいうあく。ロくわくちやう。ハさうじゆう。ニばいかい。ホつるべ。

〔解答〕 イ優渾。ロ擴張。ハ操縱。ニ媒介。ホ釣瓶。

四 左ノ語ニ讀方ヲ附ケ且解釋セヨ。

イ黜陟。ロ顛沛。ハ馥郁。ニ饒舌。ホ賑恤。ヘ辛辣。ト靈慧。チ駘蕩。リ鞏固。又羈縛。

〔解答〕 イ黜陟、位階勳等をしりぞけ又はのぼせること。ロ





頭沛。しばしの間。ハ板板。勞しき香の發するさまにいふ語。  
二、餘舌、多辯なること。ホ、賑、物をめぐみ與ふること。ヘ  
辛、からくきびしこと。ト、雲、雲のたなびきわたるさまに  
いふ語。チ、春の景色のどかなること。リ、果園、基礎な  
どのかたきこと。又、しるること。

五 左ノ假名ヲ漢字ニ改メヨ。

イ ふかん。ロ みいづ。ハ しぐれ。ニ らくえき。  
ホ うらばんる。

〔解答〕 イ 俯臥。ロ 御後成。ハ 時雨。ニ 結露。ホ 孟蘭盆會。

六 左ノ語句ヲ解釋セヨ。

イ 傍若無人。ロ 浩然の氣。ハ 徳を以て怨に報ゆ  
ニ 念には念を入れ。ホ 立つ鳥もあとを獨すな。

〔解答〕 イ 人を仰らず勝手に振舞ふこと。ロ ひろく雄大な心。  
ハ 徳があつても仕返しするやうなことをせず思徳をもつて施す  
こと。ニ いやが上にも念を入れて大事をとること。ホ 木鳥の飛  
び去るとき水を濁さずして立つ如く人も今まで居た所を去るに  
際してはあとを立派にして置くやうに意を用ひよと云ふこと。  
自分が居らなければ、傍はぬといふことはいけぬ。

七 左ノ語ノ讀方ノ意義ヲ記セ。

に鐵道業者から其の營業及乗降場の出入を承認  
されて居るに過ぎないで、鐵道自體の經營する  
ものでないことは、我國に於ける常態である。  
従つて赤帽の行爲に就いては、鐵道は責任を負  
はない。

〔解答〕 停車場で客の手荷物を持ち運ぶを普通赤帽と呼ば  
れる者は、特に鐵道業をしてゐる者から、其の職業を替み、乗  
降場への出入りを許されて居るに過ぎず、鐵道の方でそれをや  
つてゐるのでない事は我が國では普通の事とされてゐる。赤帽  
て赤帽のした事に就いては鐵道としてその責任を持たない。

十 左の語の讀方並に意義を記せ。

イ、淬礪。ロ、毀譽。ハ、明晰。ニ、博愛。  
ホ、供給。ヘ、酌量。ト、公共事業。チ、操守  
剛健。

〔解答〕 イ 淬礪、とぎみがくこと。ロ 毀譽、けなしたりほめた  
りする。ハ 明晰、明らかにほつきりして居ること。ニ 博愛、博  
く平等に愛すること。ホ 供給、そなへ出すこと。ヘ 酌量、お  
しはかること。ト 公共事業、多くの人の利益幸福を計るため  
にする事業。チ 操守剛健、操を守ることが堅くつよいこと。

イ 圓樂。ロ 魁魁。ハ 挽回。ニ 冤罪。ホ 慇懃。ヘ  
容儀端正。ト 躬行實踐。

〔解答〕 イ 圓樂、樂しきよりあひ、ロ 魁魁、精を出してつとめ  
ること。ハ 挽回、もとへひきもどすこと。ニ 冤罪、無實の罪、ホ  
慇懃、ていねい。ヘ 容儀端正、なりふりがたしきこと。ト 躬  
行實踐、自分から實際にふみ行ふこと。

八 左ノ片假名ノ部分ヲ漢字ニ直セ。

イ「ケンゼン」なる「ニクタイ」に「ケンゼン」なる  
精神「ヤド」る。ロ家「ロウ」なりと雖も「ヒザ」を  
「イ」るゝに「タ」る。ハ一旦の「サテツ」に「シツ  
パウ」すべからず。ニ櫻花は「シン」に我が日本  
人の「リサウ」であり「シダウシヤ」である。

〔解答〕 イ「健全」なる「肉體」に「健全」なる精神「宿」る。ロ家  
「陋」なりと雖も「膝」を容るゝに「足」る。ハ一旦の「墮」に「失  
望」すべからず。ニ櫻花は「眞」に我が日本人の「理想」であり「指  
導者」である。

九 左の文を通釋せよ。

停車場で客の手荷物を運搬する所謂赤帽は、特

十一 左の片假名の部分を適當なる漢字に直せ。

(イ) カントクをキビしふせらるればウラムユル  
ふせらるればアナドるは小人の常なり。  
(ロ) 艱クにタへて年月をスゴし、タへてユウモ  
ンの色なし。

(ハ) チに居て亂を忘れず。  
(ニ) キンジュウでさへオンを知る。  
〔解答〕 (イ) 監督を厳しふせらるれば恨み緩ふせらるれば侮る  
は小人の常なり。

(ロ) 艱苦に堪へて年月を過し、絶へて憂悶の色なし。  
(ハ) 治に居て亂を忘れず。  
(ニ) 禽獸でさへ恩を知る。

十二 左ノ文ヲ解釋セヨ。

我等は人間天賦の能力を善養し利用しその畢世  
の事業は以て我等が父母師長國家社會に負ふ所  
の鴻恩に酬い得て更に餘裕の綽々たるものあり  
後世子孫として永くその餘澤の受けしめ國家は  
我等を得て一段の進歩をなしたることを永へに



追憶せしむることを期すべし。

〔解答〕 われ／＼は人間の生れつきのはたらきをよく養ひ上手に有益に用ひその一生に成し遂げる仕事はわれ／＼が両親や教師や又は國家社會から受けたところの大きな恩に仕かへしすることが出来るばかりでなく將來子孫をしてながくその餘つた恩恵を受けさせて國家がわれ／＼のために一層の發達をなしたことをいつまでも想ひかへさせることが出来るに違ひない。

十三 左ノ各項ヲ解釋セヨ。

イその聰慧なる往々儕輩を壓す。

口たとひ己の欲せざることなりともその爲さざるべからざることなる以上甘んじてなさざるべからず。

〔解答〕 イその才智がすぐれて物事のわがりのよいことは時々同僚をおさへつけろ位である。

口たとへ自分の望まぬことであつてもそれが自分でせなければならぬことであるからにはこころよく進んでそれをせなければならぬ。

十四 左ノ文ノ片假名ヲ漢字ニ直セ。

すばるたの「ケウイクジョ」に「オ」ける「セウネ

ンセイネン」の「セイクワツ」は「モツバ」ら「レンケツシツソコツキニクタイ」の「キシヤウ」を「タレン」するを「モクテキ」としその「キソク」は「スコブ」る「ゲンカク」なりき。

〔解答〕 すばるたの「教育所」に「於」ける「少年青年」の「生活」は「専ら」「廉潔質素克己忍耐」の「氣象」を「鍛鍊」するを「目的」とし其の「規則」は頗る「嚴格」なりき。

十五 左ノ成語ニ假名ヲ振り解釋セヨ。

前哨、絶倫、要訣、従容、會釋、話柄。

〔解答〕 前哨、前にある見張りの兵。絶倫、人にまさりてすぐれたること。要訣、重要な究處。従容、舉動のゆつたりとしてせまらざるさま。會釋、挨拶。話柄、はなしのため。

十六 左ノ語ヲ用ヒタル文ヲ作レ、但シ文ノ數ハ制限セズ。

當然、偶然。

〔解答〕 仕事を完成すべきは當然のことである。この勝利は偶然の事である。

十七 左ノ文ヲ解釋セヨ。

嗚呼天下の廣き逝く者は日夜に之あり。而して

其の死の天下に知らるゝ者幾許ぞ。一旦死すれば國を擧げて之を悼惜す。時豈丈夫の本懐にあらずや。

〔解答〕 廣い世の中には死ぬる人は晝夜絶えずあるのである。しかしその死んだことを世の中に知られるものはその中のどれ丈であらうか。實に僅かなものである。一度死ぬれば國民こそつて其の死をいたみ惜むといふことは實に男子たるもの、本望ではなからうか。

十八 左ノ各項ヲ解釋セヨ。

イ覆車の轍を踏まじと心に省る所ありき。

口噴々傳稱すること久うして衰へず以て千古に不朽なるべし。

〔解答〕 イ前に失敗したのを考へて再び失敗を繰りかへすまいと我が心に反省する所があつた。

口口から口へと少しの間も賞め傳へることがやまないでいつまでもその名は朽ちないだらう。

十九 左ノ成語ニ假名ヲツケ意義ヲ書ケ。

剽那。三伏。粗漏。舳舻。操縱。輕快。淘汰。

掠奪。

〔解答〕 剽那、一寸の時間、極しばらくの時間。三伏、暑さの最も盛しい氣候。粗漏、おろそかにして手落のあること。舳舻、舟のへさきとも。操縱、あやつり動かすこと。輕快、かるはすみなること。淘汰、不用のものを除くこと。

二〇 次の文中側線ある假名を漢字に改めよ。

「モツバ」ら力を内治に用ひて、財政を「セイリ」し、「セイド」を改正し、法典を「ヘンサン」し、教育を「シャウレイ」し、文藝を「ホゴ」し、「キニューキクワン」を「サウセツ」し「ウンユ」交通の便を開く等、國政の改善に「コウケン」せし所舉げて數ふべからず。

〔解答〕 「専ら」力を内治に用ひて、財政を「整理」し、「制度」を改正し、法典を「編纂」し、教育を「奨励」し、文藝を「保護」し、「金融機關」を創設し、「運輸」交通の便を開く等、國政の改善に「獻せし所、舉げて數ふべからず。



二 一次の文中側線ある漢字に假名を附し且つ全文を解釋せよ。

一、「敦厚」質素の美風を養はんことを期し、奢侈を戒め、困厄を救ひ、孤獨を「慰撫」し長老を尊敬し、又善行美蹟を「調査」して、村民「集合」の席上に「公表」し、風紀取締員を各處に配置して、一般風紀の監視を「分擔」せしむ。

〔解答〕 一、人情あつくかざりのない美しい風俗を養ふことなちかひ、分に過ぎたおこりをいまいめて、生活等に苦しむ者を救つたり、ひとりさびしいものをなぐさめ、或は老年者を敬び敬ひ、又よい行ひや功蹟の見るべきものをしらべて、村の人々が集つた場所へ發表し、更に風俗を取締る人を各方面にくばつておいて、一般の風俗に氣をつけてみまもることを分けてうけもたす。

〔厚〕 慰撫。調査。集合。公表。分擔。

二 二左の文の本筋をたどつて出来るだけ短くせよ。  
辛うじて焼け残つた下谷茅町の横山大觀畫伯は

單衣一枚の尻端折姿で長靴をはき、これがまゝ一代の巨匠かと思はれぬ勇しい姿で避難民の救護に奮闘した。

〔解答〕 横山大觀畫伯は輕装して避難民を救護した。

二 三 左の夫々二つの文の相違を述べよ。

イ、その多少を知るべきなり。  
その多少を知るなり。

ロ、感慨深からざるを得なかつた。  
感慨深くなかつた。

〔解答〕 イ、前者はその多少を知ることが出来るのである。後者はその多少を知るのである。  
ロ、前者は感慨を深くせまいとしても自然と感慨が深くなる。後者は感慨が別に深くもなかつたと云ふ意である。前者は意味が反對である。

二 四 左ノ文章ノ漢字ニ讀方ノ假名ヲ附シ全文ヲ解釋スベシ。  
快活の人は顔容常に微笑を含み、眼は正面に人

二 五 左ノ語句ノ讀方ト意味ヲ記スベシ。

イ 四海兄弟。ロ 粉骨碎身。ハ 風聲鶴唳。ニ 寒心ニ堪へズ。俯仰天地ニ愧ぢズ。

〔解答〕 イ 四海兄弟、天下の人々はすべて同じ人類であるから親睦の隔てのないこと。ロ 粉骨碎身、力のあらん限り骨を折ること。ハ 風聲鶴唳、怖氣つきて少しのことにも感じ驚くこと。ニ 寒心ニ堪へズ、

二 六 左の文章を解釋せよ。

一郷の爲に功あるものは死して一郷の爲に惜しまれ一郡の爲に盡くせるものは一郡の爲に哀しまる。若し夫れ其の事業國家全體の進歩を助成し其忠誠よく國民に認めらるゝものに至りては其の取る所何の道たるを問はず其の人の存否は直接間接に國家の進運に關すること甚だ大なるものなり。

〔解答〕 一村の爲に功勞のある人は死んでから其の村の爲に人々から惜しがられ、又一郡の爲に盡力したものは其郡の爲に惜しいことであると云はれる、而して若しも其の事業が國家全體

を見、身體は直正にして歩調は整ひ、言語は明晰にして、語尾に力あり。起居進退すべて切目正しく、舉動を曖昧にすることなし。心中に精神充實し、爲すあらんとするの氣四體に溢れ、言行を妄りにせず、如何にも頼もしき人物に見ゆるものなり。

〔解答〕 快活の人は顔容常に微笑を含み、眼は正面に人を見、身體は直正にして歩調は整ひ、言語は明晰にして、語尾に力あり起居進退すべて切目正しく、舉動を曖昧にすることなし。心中に精神充實し、爲すあらんとするの氣四體に溢れ、言行を妄りにせず、如何にも頼もしき人物に見ゆるものなり。

活潑な人はいつでも笑顔をして居て眼はまともに人を見、身體はまっすぐに正しくしてあしなみはそろび、言葉ははつきりしてあきらかたで言葉じりに力がある。立居振舞がすべてにきまり正しく様子をうしろぐらくするやうなことはない。心の中に氣力がみちて何事かを爲しとげやうとする意氣が體中に満ちあまつて言葉や行ひをささげがましくせず、何となくたよりになるらしい人柄に見えるものである。



の進歩を助け其の眞心がよく國民に認められるものであつたらば其事柄の如何に拘はらず其の人の生存してゐるとぬいとは直接にも間接にも國家の將來進歩發達すべき運命に關係することが甚だ大きいものである。

二七左 字句の意義を記せ。

イ、一簞の食一瓢の飲。ロ、兄たり難く弟たり難し。ハ、斬然頭角を見はす。ニ、綽々として餘祐あり。

〔解答〕 イ、少しの食物、少しの飲物。ロ、五角で何れが優り何れが劣ると云ふ事は出来ない。ハ、一段と他の人々より優つてゐること。ニ、ゆとりが充分なること。

二八 次ノ語ヲ漢字ニ直モ。

1、しうせん 2、いんさつ 3、ぬりかへ  
4、ちゆうもん 5、でんせつ 6、せいとん  
7、じゆくれん 8、きゝめ 9、じやう物 10、すゐい。

〔解答〕 1. 修繕 2. 印刷 3. 塗替 4. 註文 5. 傳説 6. 整頓 7. 熱線 8. 利日 9. 滋養物 10. 隨意。

二九 左ノ漢字ニ假名ヲ附シ且ツ解釋セヨ。

イ 犧牲的精神。ロ 造化の妙。ハ 冥都。ニ 寂寞。ホ 傳播。

〔解答〕 イ 犧牲的精神、身を殺してまでも他のために盡す心。ロ 造化の妙、宇宙萬物を形づくる神技の巧みなること。ハ 冥都、都をさだめおくこと。ニ 寂寞、さびしいこと。ホ 傳播、傳はりひろまること。

三〇 次ノ句ヲ解釋セヨ。

イ 人口に膾炙す。ロ 英國皇儲。ハ 萬木凋落。ニ 大喝一聲。ホ 冥途に旅立つ。

〔解答〕 イ 昔く人々の口の端に上ること。ロ 英國皇太子。ハ 凡ての木が枯れしむ。ニ 大聲にてしかりとばす。ホ 死ぬること。

三一 左ノ語ニ讀方ヲ附ケ且解釋セヨ。

イ 價値。ロ 内裏。ハ 巨利。ニ 嫡子。ホ 納涼。ハ 摸擬。ト 落魄。チ 麾下。リ 剩へ。又 熟慮。

〔解答〕 イ 價値、れうち。ロ 内裏、天皇のおいでになる宮殿。ハ 巨利、大きい寺院。ニ 嫡子、家督を相續する子。ホ 納涼、すゝみ、ハ 摸擬、眞似すること。ト 落魄、おちぶれること。チ 麾

下、旗下。リ 剩へ、これのみならず。又 熟慮、よく考へること。

三二 左ノ語句ヲ解釋セヨ。

イ ぬかづく。ロ 忘れがたみ。ハ 下弦の月。ニ 端武者どもに目な懸けそ。

〔解答〕 イ ぬかづく、頭を地につけて拜禮す。ロ 忘れがたみ、父、死後母の胎内にのこる子。ロ 下弦の月、陰曆二十二日頃の月。ニ 端武者どもに目な懸けそ、雜兵どもに目なくれるな。

三三 左ノ假名ヲ漢字ニ改メヨ。

イ ドリヨク。ロ キシツヒン。ハ ジユランシヤビ  
ツ ニイツカダンラン。ホ ユダグンタイチキ。

〔解答〕 イ 努力。ロ 遺失品。ハ 縱覽書經。ニ 一家團樂。ホ 油斷大敵。

三四 左ノ語ニ讀方ヲ附ケ且解釋セヨ。

イ 薰陶。ロ 摸倣。ハ 斟酌。ニ 推薦。ホ 左遷。ハ 矯正。ト 悽愴。チ 畏服。リ 暴露。又 瞥見。

〔解答〕 イ 薰陶、徳を以て人を感化すること。ロ 摸倣、まねならふこと。ハ 斟酌、ほどよくとりはからふこと。ニ 推薦、人をすすめてあげること。ホ 左遷、高き官職より卑き官職におとす

三五 左ノ語句ヲ解釋セヨ。

イ 一騎當千。ロ 有無相通す。ハ 造詣深し。ホ 天真爛漫。

〔解答〕 イ 一騎當千、一騎の力よく千人にあたる程の。ロ 有無相通す、有るものと無いものとうめあはせ合つてよくすること。ハ 造詣深し、學問又は技藝に熟達してゐる。ニ 天真爛漫、つみみかざりなきこと。

三六 左ノ假名ヲ漢字ニ改メヨ。

イ バツテキ。ロ チツソク。ハ フウキビンラン。  
ニ ゲウカウ(思ひがけないしあはせ)。ホ シャウ  
ガイブツ。

〔解答〕 イ 拔擢。ロ 窒息。ハ 風紀紊亂。ニ 德伴。ホ 障礙物。

三七 左ノ片假名ニテ記セル語ヲ漢字ニテアラハセ。

1 國民のアンネイをイヂす。2 愛子をギセイと



イ組識。□辨償。ハ濟世。ニ統括。ホ薫陶。

四〇 左ノ文章ノ意義ヲ記セヨ。

イ世界有数の奇觀なりと謂ふも豈不可ならんや。

□誰か俯仰懷古の情を禁せんや。

ハ百年の大亂を定め人民塗炭の苦を救はんが爲なり。

ニ燒野の雉、夜の鶴、さては乳虎の怒舐犢の愛

ホ聰明叡智を道德の極致とせり。

〔解答〕 イ世界に数の少ないめづらしい觀物であると云ふてわ

るいことがあらうかさう云つてもよい。

□何人でも仰ぎ又俯して昔を想ふ心を押へることが出来やうか

出来ぬ。

ハ永い間の亂世を治めて人民をひどい苦しみから救ふ爲めであ

る。

ニ燒野の雉に夜の鶴とは親の子を思ふ愛情の切なるを云ふ。雉

子は自分の巢のある野原が燒けても子の側から離れず、鶴は子

を守つて夜も寝ない。乳虎の怒とは子を育てるに極めて嚴格な

らぬ。

□雲は離れたり合つたり、或は一ところに集つたり、散らばつ

たりして一向定まらない。雲が起るとそれはどこから来たかわ

からない、それが散らばるとどこに往くのか判らない、しばらく

その形を違へ一割一割に其の色をかへる。

四二 解 釋。

(一)似て非なるもの少からず、智と狡、勇と暴

儉と吝、禮と諂、固執と拘泥等皆然り。

(二)事物をたゞ一向にのみ思ひ做さず努めて樂

地を見出す習慣を養ひうれば如何ほど窮苦不快

なる中にありても人は自ら勇氣を得て苦中の苦

に堪へ忍びやがて人上の人となり得ることあるべし。

せるサンタンたるヒゲキあり。3キテンがキク  
4 黒色はインウツのクワンネンをジヤクキす。  
5 敵を近海にゲイゲキするケイクワクを定む。  
6 フリヨの禍にアひても毫もラウバイせず。  
〔解答〕 1. 國民の安寧を維持す。2. 愛子を犠牲とせる慘憺たる  
悲劇あり。3. 氣轉が利く。4. 黒色は陰鬱の觀念を惹起す。5. 敵  
を近海に迎撃する計畫を定む。6. 不慮の禍に遭ひても毫も狼狽  
せず。

三八 左の片假名の部分を適當なる漢字に直せ。

イウツソクたるジユモク丘の上に立つ。□禍を

ミハツにフセグ。ハシユンブウ千里山青くウラ

かすむ。ニ無用のゼイタクをなす。ホタイゼン

ジヤクたり。

三九 左の誤りを訂正せよ。

イ組識。□辨償。ハ濟世。ニ統括。ホ薫陶。

のに喰へる。虎が子を育てるときは打つたり噬んだりすること  
が平常よりも一層はげしい。砥積の愛とは親牛が子牛を砥めま  
わしていつくしみ育てること。

全文の意味は親は子を愛して時にはその身をも犠牲にするが更  
に一方では嚴格な教養を行ひしかも其の一面にはおさへきれな  
いほど愛情があると云ふ意。

ホがしこく智識のあるのを人間のふみ行ふ道の終局の目的であ  
るとしてある。

四一 左ノ文ノ大意ヲ書ケ。

イ我が鐵道従業員たらむとする者は義務の觀念

強く職責を重んじ忠實業に服するのみならず活

動を無上の快樂とし安逸を最大の苦痛として能

く艱苦と戦ひ公共の爲めには私情を去り私利を

抛ち自彊息まざるの覺悟あるを要す。

□雲は離合集散常なく其の起るや來る所を知ら

ず。其の散するや往く所を知らず。時々其の容

を改め刻々其の色を變ず。

〔解答〕 イ鐵道従事員とならうとする者は己れのなすべきつと



【解答】 (一)よく似て居るが實は全くちがつて居るものが少なくない、かしいことと、づるいこと、勇氣と亂暴、つしまやかなことと、物をしみすること、禮儀とへつらふこと、かたくなことともの事にかゝりなづむこと等は皆さうである。

(二)物事をたゞ一途に思ひつめず、つとめて安樂な場所を見出すならばしなふことが出来ればどれほどくるしみや不愉快な中にあつても人は自然と勇氣が出てくるしみの中のくるしみにこらへしので人間の凡情を超越した人となることが出来ることもあるであらう。

四三 左ノ成句ヲ解釋セヨ。

(一)殆ど言ふに足らず。(二)殊にゆかしきを覺ゆるにあらずや。(三)片言なほ天下の法とすべし。

【解答】 (一)云ふ迄もないほどのことである。(二)とりわけて何となく慕はしさを感ずるではないか。(三)一寸した言葉でも亦國のおきてとする、ことも出来る。

四四 左ノ熟語ニ假名ヲ附シ意義ヲ記セ。

措置。頒布。贅言。文學。先天的。寓話。

【解答】 措置、とりはからひ。頒布、ひろくわかつこと。贅言、

興を催ふさしむるは、車馬絡繹たる街路にあらすして、丘陵の上、郊野の間に寂しき影を留めたる敗址殘壘なりとす。

【解答】 今の羅馬市は元の羅馬の邊隅にして、そのかみ大廈高樓の櫛比せしあたり、今はたゞ荒廢寂寥の巷たるのみ。羅馬に遊ぶものをして深き感興を催ふさしむるは、車馬絡繹たる街路にあらすして、丘陵の上、郊野の間に寂しき影を留めたる敗址殘壘なりとす。

現在の羅馬市は昔の羅馬のかたほとりであつて、昔大きな建物や高い家が櫛の齒のやうに立ちならんで居た邊は今ではたゞ荒れはてゝものさびしい所になつて居る。羅馬を見物する人に深いおもしろみをおさしめるのは車や馬がつらなりつゝいたまぢではなくつて岡の上やひろい野原の中にもものさびしいありさまを残して居るところの城のいしすゑやとりでの跡である。

四七 左の文章中括弧を付せる假名を漢字に改めよ。

「じようき」の「ばうちやう」、「くうきのあつりまく」は「しせん」の「まへ」に「はうち」するとき

無用なる言葉。文學、文章、詩歌等に關する學問。先天的、此の世に生れ出ぬさきから備はつてゐること。寓話、事實を假りに設け意をほのめかす話。

四五 左ノ片假名ヲ漢字ニ直セ。

チヨチクはシンヨウを得るのキノなりジツゲフカにヒツヨウなるはシホンにあらすしてチヨチクなりムシロ、チヨチクを作るはコツキセツセイの力なり。

【解答】 貯蓄は信用を得るの基礎なり實業家に必要なるは資本にあらずして貯蓄なり寧ろ、貯蓄を作るは克己節制の力なり。

四六 左の文章中の漢字に讀假名を附し而して全文の意味を解釋せよ。

今の羅馬市は元の羅馬の邊隅にして、そのかみ大廈高樓の櫛比せしあたり、今はたゞ荒廢寂寥の巷たるのみ。羅馬に遊ぶものをして深き感興を催ふさしむるは、車馬絡繹たる街路にあらすして、巷たるのみ羅馬に遊ぶものをして深き感

は「じんせい」に「えきをあたふ」ることなきもこれを「てうせつ」するときはその「こうよう」の「わだい」なる「はかるべからざるの「くわん」あり。

【解答】 「蒸氣」の「膨脹」、「空氣」の「壓力」は「自然」の儘に「散置」するとき「人生」に「益」を「興」ふることもなきもこれを「調節」するときはその「効用」の「偉大」なる「測」るべからざるの「觀」あり。

四八 次の文中括弧ある假名を漢字に直せ。

凡そ果物の中で、柿位人の心を動かすものはあるまい。「ウス」い黄味を帯びた「スキトウ」るやうな新芽は、袖や「パウシ」や「ハウキ」のふるゝ度毎に、ぼろり／＼と缺ける其の中に「モロ」い首の長い、白い花が咲く、やがて實が見えて、それが、「マメツブ」ほどになると、毎日「ハ」くやうに地に落ちる。それから「クツキ」の大きになり「ケイラン」の大きになる。



〔解答〕 凡そ果物の中で、梅位人の心を動かすものはあるまい  
「薄」い黄味を帯びた「透徹」るやうな新芽は、袖や「帽子」や「帯」  
の「觸」る、度毎に、ほろり／＼と缺ける。其の中に「脆」い、首  
の長い、白い花が咲く。やがて實が見えて、それが「豆粒」ほど  
になると、毎日「梅」くやうに地に落ちる。それから「蕪枯」の大  
さになり「蕪卵」の大きくなる。

#### 四九 次ノ文章ヲ解釋セヨ。

貯蓄は勤儉の美風を起し、力行の精神を盛ならしむれど、奢侈は人をして浮誇ならしめ、薄志弱行に陥らしむ、かの二宮尊徳が夙く勤儉貯蓄を勸奨して之を畢生の事業としたるが如きは、今日のわが國民の基礎を造るに與りて貢獻したる所甚だ大なりといふべし。

〔解答〕 貯蓄は勤儉の美しい風習をおこし、つとめ行ふこと、の精神をさかんにするけれどもおこることは人をおちつきのないものにし、志を輕薄にし活動力をにぶらして終ふ、あの二宮尊徳がはやくから勤儉貯蓄をすゝめはげまして之を一生の仕事としたやうなことは、現在のわが國民のもとゝをつくるのに役立つたことは非常に大きなものであるといふことが出来る。

#### 五〇 イ左ノ語ニ假名ヲツケ其ノ上解釋ナサイ。

- 一、批准交換。二、蹉跌。三、御稜威。
- 四、義捐金。五、入魂。

#### 左ノ句ヲ解釋ナサイ。

- 一、筆勢非凡にして丹精の妙いふべからず。二、畢生の知勇を振ふ。三、議論區々として容易に決すべくもあらず。四、春秋に富む。五、人口に膾炙す。

〔解答〕 イ一、批准交換、批准とは當事國の全權委員が合議して定めた條約の案文を其の國の主權者が承認すること、批准交換とは批准を経た條約を當事國が互に交換すること。これによつて條約は効力を生ずる。二、蹉跌、つまづき。三、御稜威、天皇の御威光。四、義捐金、五、入魂、懸念にすること。

ロ一、筆つきが平凡でなく赤や青の色の配合が何とも云へぬほどよい。二、一生一代の智慧と勇氣を出す。三、議論がまろ／＼でたやすくきまりさうでもない。四、まだ齡が若い。五、人々に云ひはやされてゐる。

#### 五一 左ノ片假名ノ部ヲ漢字ニ直シテオ書キナサイ。

妖精 ばけもの  
庭の芝生 庭の芝生の上。  
快速の調 速くて心持のよいしらべ。  
怒濤岸を嘯み いかつた波が岸をかむ。  
つぶさに こまかくもれない。  
變幻の妙 すぐあらはれてすぐ消えるその巧妙さ。

#### 五三 左ノ語ニ誤アラバ正セ。

- (イ) 記憶。(ロ) 辨舌。(ハ) 除行。
- (ニ) 險約。(ホ) 影嚮。(ヘ) 重復。

#### 五四 左ノ語句ニ假名ヲ附セヨ。

- イ、淬礪の誠。ロ、山茶花。ハ、煤けた障子。
- ニ、石花菜。ホ、榮螺。

#### 五五 左ノ假名ヲ漢字ニ改メヨ。

- イ、タンジャウムキユウ。ロ、コクタイのセイ
- クワ。ハ、アイニクなテンキ。ニ、ユキダルマ

- 一、身體を「タンレン」し精神を「シユウヤウ」する。
- 二、蟹の「クワンツメ」。
- 三、社會の「アンネイチツジョ」を保つ。
- 四、「テイサイ」を具へる。
- 五、荒地を「カイタク」する。
- 六、貧民を「キウサイ」する。
- 七、事件を「テウサ」す。
- 八、山櫻は我が「コクスキ」植物である。

〔解答〕 一、身體を「鍛練」し精神を「修養」する。二、蟹の「鎌」三、社會の「安寧秩序」を保つ。四、「體裁」を具へる。五、荒地を「開拓」する。六、貧民を「救済」する。七、事件を「調査」す。八、山櫻は我が「國粹」植物である。

#### 五二 左ノ全文ニ振假名ヲ附シ且括弧ノ部分ヲ詳解セヨ。

次いで來る奇怪な舞踏曲は其の物凄さ「妖精」の夜出で、「庭の芝生」に狂ふ如く最後の「快速の調」は飛ぶが如く閃くが如く奔流巖に激し「怒濤岸を嘯」み「つぶさに變幻の妙」を極めた。

〔解答〕 次いで來る奇怪な舞踏曲は其の物凄さ「妖精」の夜出で、「庭の芝生」に狂ふ如く最後の「快速の調」は飛ぶが如く閃くが如く奔流巖に激し「怒濤岸を嘯」み「つぶさに變幻の妙」を極めた。



ホキカン(残念)。へ、ロウシフ(いやしいならはし)。

〔解答〕 イ、天壤無窮。ロ、國體の精華。ハ、生憎な天氣。ニ、雪連勝。ホ、遺憾。へ、陋習。

五六 左ヲ解釋セヨ。

イ、憂き事のなほこの上につもれかしかぎりある身の力ためさん。

ロ、とこしへに民安かれと祈るなるわが世を守れ伊勢の大神。

〔解答〕 イ、つらいこと来るならばもつと此上つらいことがさなればよい、自分は限りのある此からだの力なためしてみやう。

ロ、私はいつまでも人民が安樂であるやうに祈るのであるが、伊勢の大神もどうか私の治める此世を守つて下さい。

五七 左ノ讀方並ニ意義ヲ記セ。

イ、貪欲。ロ、冗員。ハ精緻。ニ、微發。ホ、薫育。へ、推薦。ト、奇峭。チ、蘇生。

〔解答〕 イ、貪欲、非常に慾深いこと。ロ、冗員、不用の人

數。ハ、精緻、極めてめんみつなること。ニ、微發、非常の場合に人民から金品や馬などを徵集すること。ホ、薫育、徳を以て人を導くこと。へ、推薦、人をすゝめおげること。ト、奇峭、山の形のけはしいさまに云ふ。チ、蘇生、一度息の絶へたる後再び息をふきかへすこと。

五八 左ノ文中漢字ニ振假名ヲ附シ全文ヲ解釋セヨ。

頭腦明確にして、判断力に富み、事の利害得失を識別し機に臨み、變に應じて、斷行して惑はざるを果斷と謂ふ。機會は汽車の如し、今來るかと思へば忽ち去つて其の跡を見ず。優柔不斷徒に恐れ、徒に惑ひ、狐疑し、躊躇し、思ひ切つて斷行する能はざるやうにては、折角好機會に遇ふもその機會を捉ふることも能はざるなり。

〔解答〕 頭腦明確にして判断力に富み、事の利害得失を識別し機に臨み、變に應じて、斷行して惑はざるを果斷と謂ふ。機會は汽車の如し、今來るかと思へば、忽ち去つて其の跡を見ず。優柔不斷、徒に恐れ、徒に惑ひ、狐疑し、躊躇し、思ひ切

つて斷行する能はざるやうにては、折角好機會に遇ふもその機會を捉ふることも能はざるなり。

あたまがはつきりして確かで物事を考へきめる力が強く、事の利と不利をみわけ機會に應じ、不時の出來事にしたがつて思ひ切つて事を仕末して迷はないのを果斷と云ふ。機會と云ふものは汽車のやうである、今來るかと思つてゐるとすぐに去つて終つて其の跡も見えない。柔弱で氣力がなく決斷に乏しく、わけもなく恐れ、迷ひ、疑ひ深く進退にためらひ、思ひ切つて行ふことが出來ないやうでは、わざわざ好い時機に遇ふてもその時機を利用することが出來ないのである。

五九 左ノ文字ノ讀方ト意義トヲ記セ。

障礙。廉潔。服膺。旺盛。風潮。

〔解答〕 障、碍さまだけ。廉潔、慾がなく性行がいさぎよいこと。服膺、忘れずによく守ること。旺盛、さかんなこと。風潮、時勢のおもむき。

六〇 左ノ假名ヲ漢字ニ直セ。

ハソンホウクワイ。ヒガイクイキ。  
チュウシンカンシャ。シツジツガウケン。  
コクカコウリュウ。

〔解答〕 破損崩壊。被害區域。衷心感謝。實質剛健。國家興隆。

六一 左ノ文中片假名ノ部分ヲ漢字ニ直セ。

(イ)電信掛はミダリに電報のゴジをヘンコウすべからず。

(イ)電信掛はキミツ及親展の電報は勿論一般の電報と雖他にロウエイすべからず。

〔解答〕 (イ)電信掛は安りに電報の誤字を變更すべからず。(イ)電信掛は機密及親展の電報は勿論一般の電報と雖他に漏洩すべからず。

六二 左ノ文讀方及講義。

我等は人間天賦の能力を善養し利用し、其畢生の事業は以て我等が父母師團長國家社會に負ふ所の鴻恩に酬い得て、更に餘裕の綽々たるものあり。後世子孫をして永く其餘澤を受けしめ國家は我等を得て非常に進歩したることを永久に追憶感謝せしめんことを期すべし。我等が將來有爲の少壯諸子に切望する所のものは實に是に



外ならず。

〔解答〕 我等は人間で賦の能力を善愛し利用し、其畢生の事を以て我等が父母師長、家、社會に負ふ所の鴻恩酬い得て、更に餘利の縛々たるものあり。後世子孫をして永く其徳澤を受けしめ、國家は我等を得て非常に進歩したること永久に追憶感謝せしめんことを期すべし。我等が將來有爲の少壯諸子に切望する所のものは實に是に外ならず。

我々は人としてこの世に生れた時から備はつてある力を善い方に成長さす、それをよく使用しその一生の仕事は我々が父母先輩國家社會から與へられた大恩を返す事が出来て、その上に尙伊とりが充分であつて、後の世では子孫に何時までもその恩恵を受けさせ國家は我々の爲めに進歩を遂げたことを永く忘れず感謝させる事を心掛けなくてはならない。我々がこれからの有望な青年諸君に心から希望するものは全くこのことである。

六三 左ノ全文ヲ解釋セヨ。

丹念に磨くことである。磨きあげることである。そのうちには安らかなゆつたりとした息づかいで静かにその人の息づかいそのままに磨かれてくる。さうしていつまでもその調子で續けてゆ

かねばなるまい。焦燥つたり騒いだりわめいたりいやきがさしたりするうちはいかほどよい玉でも決してほんとうのよい光を出せる筈はない。

〔解答〕 玉を磨くには細心に注意して磨きあげべきである。そして斯様にして磨いてあるうちには、自然とおだやかなのんびりした息づかひで静かに、磨いて居る人の息づかひのそのまゝにすべらかに磨かれて来る。さうしていつまでもそのおだやかなのんびりした調子でつゞけてゆかればならないだらう。あせつたり、さわいだり、わめいたり又雑氣がさしたりしてあるうちはどふなによい玉でも決してほんとうのよい光を出せるわけはない。

六四 左ノ全文ヲ解釋セヨ。

ひねもすにくちをつぐみてうぐひすは谷にこもれどささかげにそらをうかがひすをいづるかまへやすらんかくて今春はとなれり。

〔解答〕 朝から夕まで口をとちて鶯は谷にとちこもつては居るが彼の葉影から空をのぞんで巢を出る準備をするであらうか

さうにして今は春はもうすぐ近くに來て居る。

六五 左ノ成語ニ振り假名ヲツケソノ意味ヲ記セ。

墨守。獻替。祖述。陵夷。別業。

〔解答〕 墨守、かたく守る。獻替、ものごとの可否に就て主君に申上げること。祖述、先人の道や學問を本として、それをおしひろめて説き述べること。陵夷、おとろへすたれること。別業、別莊。

六六 左ノ文中ノ片假名ノ部ニ適當ナル漢字ヲア

テヨ。

カウツウ、ウンユ、キクワンのハツタツするにシタガヒシヤウゲフのトリヒキはスコブるピンクワツとなりイウリヤウにしてレンカなるクワモツはヨウイにシチャウにコカクを求むるを得るに至れり。

〔解答〕 交通、運輸、機關の發達するに従ひ商業の取引は頗る敏活となり優良にして廉價なる貨物は容易に市場に顧客を求むることを得るに至れり。

六七 左の文を讀みて次の各問に簡單に答へよ。

一別以來御變りもこれ無く候や當地にてはとくに苗の植付も終り南部にてははや稻の花盛りの由に御座候御地は今尚冬の季節と存候。

- 1、發信者と受信者との身分。
2、發信地と受信地との關係。
3、發送の時節。
4、手紙の何れの部分か。

六八 左の假名を略字を用ゐて漢字に改めよ。

( ) 中は其意義なり

イ、ヘン(カハル) ロ、タク(サハ)
ハ、カク(オボユ) ニ、カ(カリニ)

〔解答〕 イ、變 ロ、沢 ハ、覺 ニ、假

六九 左の文を省略せられたる部分を補ひて後解

釋せよ。
年長じては敵も近づけ申すまじ幼き時に參りてこそ。



〔解答〕 年長じては敵も近づけ申すまじ幼き時に参りてこそ敵も討取るべし。(敵も討取るべし)を省略しあり)成長したならば敵も近づけまい幼い時に行つてこそ始めて敵を討取ることが出来やう。

七〇 左の熟語の讀方と意義を書け(讀方は右に意義は下に)

- 1、舐犢の愛 2、暴虎馮河 3、蹉跌 4、殿上人

〔解答〕 1、舐犢の愛 人の其の子を愛するに譬へて云ふ。  
2、暴虎馮河 手で虎をうち舟なくして河を渡る様な、無手法な勇氣血氣の勇にはやること。3、蹉跌失敗すること。4、殿上人昇殿を許された人。

七一 左の意味を持てる熟語を書け。

- 1、人生ノ果敢ナキニ喩フル語
- 2、彼此ト差別ヲ立ラズニ同様ニミテ論ズルコト
- 3、二ツノ物ガ互ニ助け合フコトニ喩フル語
- 4、深く心ニ銘ジテ忘ル、能ハザルハチニ喩フル

ル語

〔解答〕 1、朝露 2、玉石混淆 3、唇齒相連 4、會得の耻

七二 次ノ語句ヲ解釋セヨ。

- (イ) 舊法になづむ。
- (ロ) 非凡。
- (ハ) 猶豫。
- (ニ) 販路。
- (ホ) 好奇の目を注ぐ。
- (ヘ) 鼓舞。
- (ト) 今日之急務。

(チ) 途中の困難は言語の外であつた。

〔解答〕 (イ) 古い法律に従ふ。  
(ロ) 人並すぐれてゐる。  
(ハ) 疑ひ惑ふて決せざること、又時日を延すこと。  
(ニ) 商賣の賣れ道。  
(ホ) もの珍しげに目をつける。  
(ヘ) はげましいきほひづけること。  
(ト) 目下急いで爲すべきつとめ。

(チ) 其の中途の 難儀は言葉にも云ひ現はせない程であつた。  
七三 次ノ語ニ讀ミ假名ヲツケヨ。

- 鱸。柚。凱旋。幟。所以。直截。鮮か。輔弼。

七四 次ノ文中ノ片假名ヲ漢字ニ改メ左側ニ記セ。セイケツなるクウキをコキフしてキンニクを勞すれば身體ケンゼンなり。

〔解答〕 清潔なる空氣を呼吸して筋肉を勞すれば身體健全なり。

七五 次ノ漢字ニ假名ヲ附セヨ。(イ)紫陽花。(ロ)旋回中の激突。(ハ)君父の誓

は俱に天を戴かず(ニ)虚榮心を警む。  
〔解答〕 (イ)紫陽花。(ロ)旋回中の激突。(ハ)君父の誓は俱に天を戴かず。(ニ)虚榮心を警む。

七六 次ノ語ノ讀ミ方及意義ヲ書ケ。(イ)當推量。(ロ)糾彈。(ハ)紅旭。(ニ)詭向。

(ホ)微衷。(ヘ)遺棄。  
〔解答〕 (イ)當推量、何の根據もなくおしはかること。(ロ)

七七 左ノ假名ヲ漢字ニ改メヨ。  
(イ)なうすむ。(ロ)ぐわいたう。(ハ)ぎせい。  
(ニ)きやうけんくわつぱつ。(ホ)うぬばれ。

〔解答〕 (イ)關髓。(ロ)外套。(ハ)犧牲。(ニ)強健活潑。(ホ)自惚。

七八 左ノ各項ヲ解釋セヨ。(イ)今年何事を爲し、かをかへりみて慨然たらざるを得ず。

(ロ)その識見の一斑を察知することを得べきにあらずや。  
(ハ)空の景色の千變萬化窮りなきや瞬時も同一状態に止まることあらざるなり。

〔解答〕 (イ)今年何事をなしたかを思ひかへして心の望みを失はないわにはゆかない。  
(ロ)その智識や見解の一部分を察し知ることが出来るではない



か。

(ハ)空の景色のいろ／＼にかはつてはてしのないのは一寸の間もおなじありさまにとゞまることがないのである。

七九 左ノ成語ノ右側ニ假名ヲ振り解釋セヨ。

經綸。時鳥。弱冠。均霑。木鐸。杜絕。成算。裁可。耽讀。自得。

【解答】 經綸(國をなさめと、のふること)、時鳥(擊木鐸に屬する鳥)、弱冠(男子二十歳の別稱)、均霑(他と同一に利益を受くること)、木鐸(舌を木にて作りたる鈴、支那の上古に文事に関する教令を宣傳するとき鳴らしたるもの、轉じて世人を教導すること)、杜絶(ふさがりたゆること)、成算(成し遂ぐる見込)、耽讀(天皇が臣下の奏請などを許可したまふこと)、裁可(讀みふけること)、自得(自分自身が得ること)。

八〇 左ノ文ヲ解釋シ括弧内ノ漢字ニハ假名ヲツケナサイ。

イ、我が科學の發達を以て模倣なりと言ふものあれど、「模倣」すべきは模倣して可なり、何ぞ模倣を耻ぢて、現代科學の成果を「攝取」するに

於て殘す所あるべけんや。模倣なりとも「獨創」なりとも、學問は力なり。現代の一切の事は科學を基礎とす。科學を「等閑」に付するものは現代に於ける「劣敗者」なり。

ロ、「廉耻」ヲ重シ「貪汚」ノ所爲アルベカラズ。

【解答】 イ、我國の科學の發達を、それはまねであると言ふものがあるが、まねすべきものはまねをしてもよろしい、どうしてまねすることを耻ぢて現代の科學の成せる結果をおさめとるに餘す所あつてよからうか。まねであつても又我自らの新しい考へであつても學問は力なのである。現代の一切の事情は科學を立脚としてゐるのである。故に科學をなほざりにするものは現代に於ける劣敗者である。

ロ、心を清廉潔白にして耻を深く重んじ、むさばりいやしいおこなひがあつてはならない。

八一 左ノ平假名ヲ漢字ニ改メナサイ。

火藥其ノ他「ばくはつ」質「きけん」品ノ運送ヲ

イ、筋子ノ粕漬。ロ、氣息奄々。ハ、些細ナ事情。ニ、社會ノ木鐸。ホ、運命ノ寵兒。ヘ、容貌風采。

【解答】 イ、筋子(カツヲツケ)ノ粕漬(ヱノ子ヲ酒粕ヲ漬ケタモノ)。ロ、氣息(キキ)奄々(アヤヤ)。(呼吸ノ苦シクシテタヘナレト)。ハ、些細(シヤシヤ)ナ事情(ワザカナコトカラ)。ニ、社會(シヤカイ)ノ木鐸(ウツタリ)。ホ、運命(ウチノチ)ノ寵兒(ウツタリ)。ヘ、容貌(ウツタリ)風采(ウツタリ)。(カホカ)。

八四 左ノ語句ノ片假名ノ箇所ヲ漢字ニ改メヨ。

イ、「センデン」の時代。ロ、「カイサツグチ」に「ミツシユウ」せる「リヨカク」。ハ、「セキヒンアラ」うが如し。ニ、「サンカンヘキチ」にも皇恩アマネし。ホ、アイサツ。

【解答】 イ、宣傳の時代。ロ、改札口に密集せる旅客。ハ、亦貧洗うが如し。ニ、山間僻地にも皇恩普し。ホ、挨拶。

八五 全文を解釋すべし。

由來交通の整備は經國の大本である。殊に鐵道

「きよせつ」ス

手荷物ヲ「きそん」ス

機關車ニ「ねんれう」ヲ「たふさい」ス

【解答】 機發 危險 拒絶 毀損 燃料 搭載  
八二 軌近學術益々開ケ人智日ニ進ム然レドモ浮華放縱ノ習漸ク萌シ輕佻詭激ノ風モ亦生ズ今ニ及ビテ時弊ヲ革メズムバ或ハ前緒ヲ失墜セムコトヲ恐ル。

【解答】 軌近(はんざん)學術(がく)益々(ますます)開ケ(ひら)ケ人智(じんち)日(ひ)ニ進ム(すす)ム然レドモ(しかん)レドモ浮華(うけ)放縱(ほうじよう)ノ習(じゆ)漸ク(しだ)シ萌シ(も)シ輕佻(けいてい)詭激(けいげき)ノ風(かぜ)モ亦(また)生ズ(お)シ今(いま)ニ及(およ)ビテ(て)時弊(じへい)ヲ革(く)メズムバ(ば)或(ある)ハ前緒(ぜんじゆ)ヲ失墜(しつたい)セムコト(こと)ヲ恐(おそ)ル。

近來學問や技術がますます開けて来て、人の智識は日に進んで行きます。けれどもはなやかでうはつたな、ほしいまゝにふるまう風習が次學におこりはじめ、けいはくで言葉や行ひが豊富でなくはげしい氣風もまた生じます。故に今の間に此の時代の悪い風習を一掃しめなかつたならば、或は死んだ先輩が遺して置いた事業をうしなつて了ふやうなことはいかた案ずるのであります。

八三 左ノ語句ニ振假名ヲ附シ意味ヲ書ケ。



は其の骨幹を爲すものであつて、其の活動は恰も人體に於ける動脈の如き重責と威力とを有し民生興業に關する所頗大である。故に鐵道網の疎密は當に一國の消長、地方の隆替に繋るものである。

〔解答〕 由來交通機關なとのへそなふることは濟世經國の根本である。殊に鐵道は其骨組みをなすものであつて、鐵道の活動は丁度人間のからだに於て動脈が心臟から出る血をからだ中に輸送するやうな重い責任と權威とをもつてゐて、人民の生活や工餘などの興隆に關係するところが非常に大きいのである。それで鐵道の網の目ののらいのと、こまかいのはたしかに一國の盛衰、又は地方の盛んとなつたとされるにか、はるものである。

八六「」の部分の讀方並に意義を問ふ。

「潑刺」たる活氣を以て「黽勉」事に當り、「冗用」を省き、「遊惰」を戒め、「放漫」を制し、「儉安」「姑息」の弊風を一掃して「勇往邁進」の氣を「鼓舞」し、忠實に、眞面目に、「敢爲」に、懇切に

各自其の本分を守り、義務、「職責」を重んじ、全力を「傾注」して國家の進運を翼賛すべきなり。

〔解答〕 潑刺(勢ひよきこと)黽勉(一生懸命につとむること)冗用(むだな用事)遊惰(あそびおこたる)放漫(ほしさま)儉安(ほれなしみ)姑息(一時のまにあはせ)勇往邁進(いさみに勇んでドン／＼進む)鼓舞(ふるひおこす)敢爲(困難をもとせざること)懇切(れんごりにしんせつ)職責(職務上の責任)傾注(けいちゅう)をかたむけそ、邁進(すすむ處の運命)。

八七片假名を漢字に改めよ。

イ、「シサイ」に「ギンミ」すべし。  
ロ、社會を「ペンタツ」し、「クンタウ」す。  
ハ、「ロウシフ」を「ダハ」す。  
ニ、青年は宜しく「ケツキ」すべし。  
ホ、「センエツ」ながら君に「クゲン」を呈す。  
〔解答〕 イ、仔細に吟味すべし。ロ、社會を鞭撻し、鞭撻す。ハ、陋習を打破す。コ、青年は宜しく感起すべし。ホ、超越な

八八左に假名を附し下に意義を記せ。

イ、鯨波。ロ、招聘。ハ、濫觴。ニ、鞅掌。ホ、措置。  
〔解答〕 イ、鯨波、ときの聲を云ふ。ロ、招聘、禮を厚くして人を招くこと。ハ、濫觴、昔、陽子江に盃を流した故事に起りもの、起りはじめ。ニ、鞅掌、事務をつかさどること。ホ、措置、とりはからふこと。

八九全文を解釋せよ。

世道人心ノ頽廢今日ノ如キニ當リ斯ル災厄ノ突如トシテ起レルヲ見ル、恰モ一大痛棒ヲ下シテ覺醒ヲ促サントスル天意ノ顯現タルヲ感ゼズンバアラズ、寔ニ志ヲ新ニシテ轉禍爲福ノ機縁ヲナスベキノ時ナリ。

〔解答〕 世間の道徳や人の心のすたれたること今日如きに當つて斯様なわざはひの突然に起つたのを見たのは、丁度一つの大きなていたき棒を下して、目ざめることなうながさうとする天の意志のあらはれたるを感ぜずにはゐられないのである。ま

ことに今は志を新らしくして、禍を轉じて福と爲すのしほとなすべき時であるのである。

九〇左に假名を附し下に意義を記せ。

イ、儉安。ロ、蹉跎。ハ、休戚。ニ、惶惶。ホ、炯眠。  
〔解答〕 イ、儉安、將來を考へずしてただ目の安樂を求めてほれなしみすること。ロ、蹉跎、つまづきたふるること。ハ、休戚、よろこびとかなしみ。ニ、惶惶、甚だ恐ろしいこと。ホ、炯眠、するとき眼力。

九一片假名を漢字に改めよ。

イ、「ケイヒセツゲン」の折柄半紙一枚と雖も「ランヨウ」すべからず。  
ロ、男子は當に「ユウヒ」すべし、徒に「シフク」すべけんや。  
ハ、「スキホマンサン」として樹間を「セウヨウ」す。

〔解答〕 イ、經濟節減 濫用 ロ、雄飛 雌伏 ハ、酔歩踟躕 道途。



九二 読み假名を附せ。

イ、流罪。ロ、只管。ハ、鬩斗。ニ、覆郁。ホ、彌縫。

【解答】 イ、るざい。ロ、ひたすら。ハ、のし。ニ、ふく、いく。ホ、びほう。

九三 假名を附し意味を書け。

荏苒。愆愆。均霑。酌量。掣肘。

【解答】 荏苒、歲月の次第に進むこと。愆、愆（人に事をす、めること）。均霑、（他と同一に利益を受けること）。酌量、おしはかること。掣肘、（人を牽制すること）。

九四 書取。

イ、カカクのタイレン。ロ、クワジヨウ。ハ、フウセツをルフス。ニ、ハタンをセウス。ホ、ホリウのシツ。

【解答】 イ、價格の低廉。ロ、過利。ハ、風説を流布す。ニ、破綻を生ず。ホ、蒲柳の質。

九五 左の全文を解釋せよ。

從來、その指導宜しきを得たるが爲に一致戮力

の美風を馴致し、歐洲戰亂の餘弊東漸人心安定を缺き、動もすれば詭激放縱に逸出せむとするの言動を敢てするものあるの今日、我現業員が毅然として時流に超越し健實なる精神を以て其の職責に盡瘁しつゝあるは、國家社會の爲慶賀に堪へざる所なり。

【解答】 從來現業員をおしへみちびくことが適當であつたがために昔の者が一致して力をあはせる美しいならはしを次第にならして來て歐羅巴戰爭のこの弊害が東の方へ次第に進み入つて人の心がおちつきを失つて、ともすれば中正を失つてはげしくなりほしいまゝにしまりがなくなつたりする方にはなれ出やうとする言葉や舉動を思い切つてするものゝある現今に於て我現業に従事する者が強く猛く時の風潮を飛び越えてつよい眞面目な心をもつて其の職務上の責任に力を盡しはげんで居るの

は、國家社會のためにより、こびにたへない次第である。

九六 假名を附し意味を書け。  
（イ）墨守。（ロ）邂逅。（ハ）食言。（ニ）臆斷（ホ）落魄。

【解答】 （イ）墨守、自分の意見をかく守ること。（ロ）邂逅、おもしずめぐりあふこと。（ハ）食言、約束を違ふること。（ニ）臆斷、獨り古めすること。（ホ）落魄、おちぶれること。

九七 假名を漢字に改めよ。

（イ）私はラットウテツビ不賛成であります。  
（ロ）フタイの徒をシソウしてパウキヨを計る。  
（ハ）彼はキベンを弄する傾向あり。  
（ニ）敢てゼイゲンを要せず。

【解答】 （イ）私は徹頭徹尾不賛成であります。  
（ロ）不逞の徒を使喚して暴舉を計る。  
（ハ）彼は詭辯を弄する傾向あり。  
（ニ）敢て贅言を要せず。

九八 側線ヲ施セル文字ノ讀方ヲ記セ。

イ、君の「故山」に「歸養」せしより久しく「聲咳」に接することを得ざりしかど余豈一日も君を忘れむや。圖らざりき一日「滄桑」の變にあひて爰に君と「旗鼓」の間に相見ゆるに至らむとは。ロ「未曾有」の天變地異に當り罹災民の救護は國民

的共同「援助」の下に迅速に進捗せり。

【解答】 イ、故山、コザン。歸養、キヤウ。聲咳、ケイガイ。滄桑、サウサウ。旗鼓、キコ。未曾有、ミンウ。罹災、リサイ。救護、キウゴ。援助、エンシヨ。進捗、シンシヨウ。

九九 意義ヲ簡明ニ記セ。

故山に歸養す。  
聲咳に接す。  
滄桑の變。  
未曾有。  
進捗。

【解答】 故山に歸養す、（故郷に歸つて保養すること）。聲咳に接す、（聲咳は笑ひ且つ語ること。聲咳に接すは面會を得ること）。滄桑の變、（世の中がうつりかはりの甚しいこと）。未曾有、（未だ會つて有らざること）。進捗、（すすみはかどること）。

一〇〇 適當ナル漢字ヲ記セ。  
大樹が「かれる」。池水が「かれる」。



外遊をおくる。名産をおくる。所在をたづねる。知己をたづねる。

職務をとる。薪木をとる。官途につく。大阪につく。

〔解答〕 大樹が「枯れる」。池水が「潤れる」。外遊を「送る」。名産を「贈る」。所在を「尋れる」。知己を「訪れる」。職務を「執る」。薪木を「採る」。官途に「就く」。大阪に「著く」。

一〇一 過般文部省臨時國語調査會ヨリ發表セラレタル常用略字ノ内五字を記セ。

〔例〕 一、雄辨。二、治僚。三、澎漲。四、循環。五、誤ナシ。六、惚測。七、緘密。八、抱懷。九、堪忍。十、轉撒器。

一〇二 左ノ語句ノ右方ニ讀方ヲ、其ノ下ニ意義ヲ記入スベシ。

一、扶掖獎勵。  
二、物價調節。  
三、毀譽褒貶を度外視す。

四、奢侈安逸。一  
五、冗費。

一、扶掖獎勵、扶助しみちびきす、め勵ますこと。二、物價調節、物の價を適當にと、のへること。三、毀譽褒貶を度外視す、他人からのほめられたりけなされたりすることを氣にとめないこと。四、奢侈安逸、おごりなまけること。五、冗費、むだな費用。

一〇三 左ノ文字ニ誤リアラバ正セ。

一、雄辨、ユウベン、演説ノ達者ナコト。  
二、治僚、チレウ、醫者ノ手當ヲ受ケルコト。  
三、澎漲、ボウチヨウ、大キクナルコト。  
四、循環、ジュンクワン、メグリマハルコト。  
五、混淆、コンコウ、トリマゼルコト。  
六、億側、オクソク、ヨキホドニオシハカルコト。  
七、微密、チミツ、目ツミテコマカシイコト。  
八、拘懷、ホウクワイ、ムネニモツテキルコト。  
九、勤忍、カンニン、シノビコラヘルコト。

一〇四 左ノ句ヲ解釋シナサイ。

〔イ〕常軌を逸す。〔ロ〕臆測をたくましくす。  
〔ハ〕聲望一時に加はる。〔ニ〕思ふ様あれば語るまじ。〔ホ〕甚だ心許なし。

〔解答〕 〔イ〕常道をふみはずしてゐること。〔ロ〕よい加減のあて推量をする。〔ハ〕名聲と人望が一時に集る。〔ニ〕考へることがあるから語ることをしてしない。〔ホ〕ひどくきづかはし心配である。

一〇五 左ノ語句ニ假名ヲ付ケツノ上解釋シナサイ。

〔イ〕父母に事ふ。〔ロ〕鍍金。〔ハ〕内帑。〔ニ〕伽藍。〔ホ〕下知する。〔ヘ〕供御。〔ト〕時日を違ふ。〔チ〕輔弼。〔リ〕異口同音。〔又〕一人。

〔解答〕 〔イ〕父母に事ふ。父母に孝養をつくす。〔ロ〕鍍金、あ

る金屬の上に他の金屬をかけること。〔ハ〕内帑、天皇の御手許金。〔ニ〕伽藍、僧侶の修業する所、又寺の建物。〔ホ〕下知する、指圖合をする。〔ヘ〕供御、天皇の御膳。〔ト〕時日を違ふ、時日なとりちがへる。〔チ〕輔弼、主上を御助けすること。〔リ〕異口同音、多くの人が同じ説をなすこと。〔又〕一人、一層。

一〇六 左記甲乙ノ各文章ヲ比較シ乙ニ附セル括弧内ニ之ト意味相ズル甲ノ文章ノ番號ヲ記入セヨ。

甲1、なせばなる なさねばならず なるわさを  
ならずとすつる人のはかなさ。  
2、明日ありと思ふ心の仇櫻夜牛に嵐の吹かぬ  
ものかは。  
3、立て初むる志だにたゆまずば龍のあぎとの  
玉もとるべし。

乙( )思ひ立つ日が吉日。  
( )精神一到何事か成らざらん。  
( )能はざるに非ず爲さざるなり。

〔解答〕 (2) 思ひ立つ日が吉日。

十、轉撒器、テンテツキ、クルマ道ヲカヘル道具。

〔解答〕 一、雄辨。二、治僚。三、澎漲。四、循環。五、誤ナシ。六、惚測。七、緘密。八、抱懷。九、堪忍。十、轉撒器。

一〇四 左ノ句ヲ解釋シナサイ。

〔イ〕常軌を逸す。〔ロ〕臆測をたくましくす。  
〔ハ〕聲望一時に加はる。〔ニ〕思ふ様あれば語るまじ。〔ホ〕甚だ心許なし。

〔解答〕 〔イ〕常道をふみはずしてゐること。〔ロ〕よい加減のあて推量をする。〔ハ〕名聲と人望が一時に集る。〔ニ〕考へることがあるから語ることをしてしない。〔ホ〕ひどくきづかはし心配である。

一〇五 左ノ語句ニ假名ヲ付ケツノ上解釋シナサイ。

〔イ〕父母に事ふ。〔ロ〕鍍金。〔ハ〕内帑。〔ニ〕伽藍。〔ホ〕下知する。〔ヘ〕供御。〔ト〕時日を違ふ。〔チ〕輔弼。〔リ〕異口同音。〔又〕一人。

〔解答〕 〔イ〕父母に事ふ。父母に孝養をつくす。〔ロ〕鍍金、あ



(3) 精神一到何事か成らざらん。  
(1) 能はざるに非ず爲さざるなり。

一〇七 左ノ語ト反對ノ意味ヲ有スル語ヲ一ツツ、  
擧ゲヨ。

卑近。精密。淺薄。間接。内容。雌伏。

〔解答〕 高遠。粗獷。深厚。直接。外形。雄飛。

一〇八 解釋。

一夜徹宵して翌日弱る様なることにては到底世界的國民として列國の間に濶歩致候事はむつかしかるべしと存候今更めきたる申條ながら卑見述べ候餘は面晤を期し候。

〔解答〕 一晩夜あかして翌日弱るやうなことではどうくても廣く世界の一國民として數多國々の間に大股にて歩くことはむづかしいであらうと思はれます。今更事あたらしく云ふほどのことでもないが私の考へを申し述べました。そのあとは御面會した時に申し上げませう。

一〇九 次の語の右傍に片假名にて讀み方を附し然る後意義を解け。

堪 (いびる) し。

〔解答〕 (イ) 梅は散りて鶯の聲も老(い)たり。(ロ) 君の植(え)し草花咲く頃となれり。(ハ) 宇宙の洪大無邊なるを想(ひ)て莊嚴の感に堪(へ)ざるべし。

一一二 次の語句を解釋せよ。

(イ) 父母の健かに在すは子たる者の無上の幸福たるを思ひ和氣愉色を以て朝夕之に事ふべし。

(ロ) ほととぎすの聲は晝よりも夜聞くに哀深し落ちかゝる下弦の月、さてはほのくくと明けそむる東雲の空は風情更に多し。

(ハ) 塗炭の苦。仔細ありげに。

〔解答〕 (イ) 父母が健今で居ることは子としてこの上もない幸福であることと思ふてやさしい心もちでうれしそうな顔色をもつて朝夕父母につかへればならぬ。

(ロ) ほととぎすの聲は晝聞くよりも夜聞く方が趣味が多い。落ちかゝつた二十日すぎの月夜、又はほのかに白むあけがたの春空に聞けばおもむきが一層多いものである。

(ハ) 水火のくるしみひどい苦しみ。わけがあるらしく。

(イ) 功を一簣に虧く。(ロ) 嚆矢。(ハ) 東帶。

(ニ) 藩翰譜。(ホ) 泉路の首途。

〔解答〕 (イ) 功を一簣に虧く、今迄やつてきて成就したものを僅かの誤ちからとりかへしのつかぬことをする。(ロ) 嚆矢、しもの事のはじめ。(ハ) 東帶、昔時正式 裝束の稱、冠、袍、石帶等正式に具備して裝ふもの。(ニ) 藩翰譜、徳川時代の學者新井白石の著述せるもの、(ホ) 泉路の首途、泉路は死者のゆく路死にゆく、旅立と云ふ意。

一一〇 左の熟語を用ひて文語體の短文を作れ。

(但し一熟語一文のこと)

(イ) 風光。(ロ) 類聚。(ハ) 回天。(ニ) 諄々。

〔解答〕 (イ) 山紫に水清くして風光明朗の地なり。(ロ) 月叙傳を(ハ) 回天の偉等を企つ(ニ) 忠孝の道を諄々と説く。

一一一 左の諸文章中( )の所に正確なる平假名を入れよ。

(イ) 梅は散りて鶯の聲も老( )たり。

(ロ) 君の植( )し草花咲く頃となれり。

(ハ) 宇宙の洪大無邊なるを想( )て莊嚴の感に

一一三 左ノ文ヲ解釋セヨ。

イ、まだ改良の餘地がある。

ロ、敬虔の情を起させずにはゐなかつた。

ハ、全く其の選を異にするものと言つてよい。

〔解答〕 イ、これ以上改良せればならぬところがある。ロ、うやまひつゝしむ心を起させたいやでも起させずにはおかないと云ふ意。ハ、全く選擇したもの、内飛びぬけてよいと云つてもよろしい。

一一四 書取。

コンクワイのギヤウセイセイリにトモナふ、各省クワンセイカイセイアンは二十五日をモツてゼンブデソロツて、法制局にクワイソウされたから同局のシンギシウレウシダイジュンジ開議にジャウテイされるはずである。

〔解答〕 今回の行政整理に伴ふ、各省官制改正案は二十五日を以て全部出揃つて、法制局に題送されたから、同局の審議終了次第順次開議に上程される筈である。

一一五 左ノ字ノ意味ヲヨク考へ假名及ビ送假名







たり香つたりする事を云ふ、◎吸取る、◎取り込む、◎漏斗、◎液体をつぎ込む時に用ひる器、◎海綿、◎液体を吸込む性質が強く海に産す  
 ◎人の「の」は「が」の意、◎異なる點、◎異ふ事柄、◎さすがに「だけあつて」の意味で象は賢しいと人から言われてゐるだけあつて、◎  
 ければ、◎稀、◎たまに、◎教へられし「し」は「た」象はラツパを吹いたり、◎の藝をする、◎復習、◎おさらい、◎と云ふ、◎と云  
 ふことです、◎さうです、◎されど、◎しかし、◎稀なる例、◎たまにあるためし。

(文意) どんな良い先生でも獨學の心が無いものを、どうすることも出来ない。昔から勝れた人は皆獨學の人である、獨學と云ふのは、父母や先生が進めるのを待たず、自分で進み勉めて自分の目指す事を練習するのを云ふのである。教へ込まれるのを待たないで自分に觸れるものを吸ひ取るのである。漏斗に似ないで海綿に似たのが獨學である。

獨學は人間が下等動物と異ふ事柄の一つである、下等動物でもどれだけかは教へる事が出来るが獨學させる事は難かしい象は賢いと云われるだけあつて、たまには教へられた藝を獨學する事もある鸚鵡もまたたまには教へられた言葉をおさへすると云ふことです。しかし之等は稀にある例です。

獨學は教場にも家庭にも、途中にもなし得べきことなればこの志ある者の進歩は、月日を重ねて著しきに至る、體も心も手も足も目も耳も獨學次第にて驚くべき發達をなせばなり。

體育に熱心なる人の體格と並の人とを比べて其の甚だしきを見よ、或は音楽好きの耳の感じの秀でたる、細工好きの、手の器用なる、いづれも平生の心掛による「好きこそ物の上手なれ」とは獨學の效能

を云へるなり。

(語義) 教場にも「にても」は「でも」◎家庭、◎うち◎途中、◎みちなか、◎得べき、◎出来る、◎なれば「なれば」である「ば」は「から」の意味と「なら」の意味、と「行けば」を「行く」と云ふ様に三つの意味がある、こゝでは「から」の意、◎著し、◎目につく、◎至る、◎なる、◎體、◎からだ◎獨學次第にて、獨學の工合で、◎驚くべき發達をなせばなり、◎驚かればならぬ程發達をなせばなり、◎「は」は「から」です」の意で説明する時に用ひる、◎體育、◎身體をよくしようとする事、◎熱心、◎せいを出す◎「なる」は「な」の意、◎體格、◎からだのしくみ、◎並み普通、◎あたりまへ、◎差、◎ちがひ◎音楽好き、◎音楽を好く人、◎秀でたる、◎すぐれた事や、◎細工、◎小さい手わざ、◎器用、◎こまかい事に上手、◎平生、◎ふだん、◎好き、◎こそ、◎好きだと物が上手になると云ふ語、◎こそ、◎「は」強めて云ふ言葉、◎「そ」があれば「なり」と云ふ所は「なれ」と云ふ「なれ」と「た」の意、◎とはと「云ふのは」と「と思ふのは」の二意がある、こゝでは上の意、◎効能、◎きゝめ並通は効能と書くが効の古い字は效である、◎いへる、◎云つた。

(文意) 獨學は教場でも家庭でも、道中でも出来る事であるから、獨學の氣があるものゝ進みかたは月日が重なるにつれて目づく様になる、體も心も、手足も耳も目も、獨學次第で驚かねばならぬ程發達するからです體育に熱心な人の體格と普通の人の體格とを比べてその異の甚だしいのを見なさい或は音楽好きの人の耳の感じが勝れたのも手わざの上手なものも皆ふだんからの心掛けが異ふのである。好きだと物事が上手になると云ふ語があるのは獨學の効めを云つたのである。

外國には目づもりにて目方又は間尺をあつることを専門とする者あり、遠方より見たるばかりにて、其の壺には茶ならば幾何砂糖ならば幾何這入るべし、其の石は何貫何十目その丸太は何間何尺など云ふに



あたらざるは稀なりとぞ。雀は並の人の目には、どれもこれも同じ様に見ゆれども或る老人の鳥さしは一羽々々に見分けて、「今そこ一飛びしはきのふその枝に來りをりし雀なり、それそちらへおりしは去年巢立ちたるにて、今飛びし雀の甥なりなどいひけり、鳴く聲も喜怒哀樂、それ〴〵に區別ありとぞこれらは教へ得べきにあらず、又學び得べきことにてもなし、ひとり獨學の力のみこれをよくすべきなり。

(語義) 目づもり||實際平らな目で見たゞけで、◎間尺||幾間幾尺、◎あつる||云ひあてる、◎専門||そればかりな仕事にする  
◎稀れ||めづらしい、◎とぞ下に「いふ」と云ふ語を略した」と云ふことであるの意、◎並の人||普通の人、◎巢立つ||巢から出て獨立する、◎甥||自分の兄弟姉妹の子を目分で云ふ、◎喜怒哀樂||よろこびいかり、かなしみたのしみ、◎ひとり||たゞ、◎よくすべき||出來させられる。

(文章) 外國では目で見たゞけで、目方や何間何尺を云ひ當てることを仕事とする人がある、遠くから見たゞけで、其の壺には茶なればどれだけ、砂糖なればどれだけ這入つて居るだらふ。その石は何貫何十目其の丸太は何間何尺など言ひ當てると當らないのが稀らしいと云ふ事である、雀は、普通の人の目には皆同じに見えるが或る年取つたりとりさしは一羽〴〵に見わけて「今そこへ飛んだのはきのふその枝に來て居つた雀である、それからそこへ下りたのは去年巢から出たもので、今飛んだ雀の甥である」など云つた鳴き聲も喜び、いかりかなしみ、それぞれ異があると云ふことである。これらは

教へられるものではない、又學び得られる事でもない、たゞ獨學の力だけが之をよくさせるのである。獨學の力を以つてすれば、意志弱き者も剛毅となるべく記憶鈍き者も物覺へよくなるべく手先の不器用なる者も器用となり脚弱き者、腕力なき者何れも生れかわりたる如くなることあり、とりわけ心立の獨學こそ大切なれ、常に卑しき活、卑しき友に遠ざかり勝れたる人善き人の噂に親しみ、これを手本に自から學び習ふことを勉むる者は、年を経て其の手本に近寄ること必定なり。

(語義) 意志||心や思ひこみ、意志は心の力、◎剛毅||強くたけし、◎なるべく||なるでせう◎記憶鈍き||物覚えのわるい、◎腕力||腕の力と云ふ字であるが、腕の力ばかりでなく、身體の力と云ふ意にも用ひる、◎生れかわる||前とまるで違ふ、◎とりわけ||特別に、◎心立||精神の、◎大切なれ||こそとあるから下に「なれ」となる、「こそ」が無ければ「なれ」は「なり」となる卑しき、下品な、◎遠ざかる||近よらない、◎勝れ||まさる、◎噂||世と評判、◎手本に||手本として、◎年を経て||永年の間には、◎手本に近寄る||手本に似て來る、◎必定||必ずさうだ。

(文意) 獨學の力ですれば、心が弱い人も強くたけくなる。物覺えがわるい人もよくなる、手先きが不器用なものも器用となり脚の弱いものも腕の弱いものも皆生れ變つたやふになる事がある。特別に精神の獨學が大切である。いつも下品な言葉や、下品な友達に近寄らないで勝れた人やよい人の評判に親んで、これを手本として自分で學び勉めるものは、年月の經つにしたがつて其の手本に似て來る事はきつと間違ひはない。



### 第二章 那須與一宗高の扇的

與一宗高鏑を取つて番ひ、よつ引いてひやうとと放つ、小兵といふ條、十二束、三伏、弓は強し鏑は浦響く程に長鳴りして、あやまたず扇の要際一寸許り置いてひいふつとぞ射切つたる鏑は海に入りければ扇は空にぞ揚りける暫しは虚空に閃きけるが、春風に一揉二揉もまれて、海にさつとぞ散つたりける、夕日の輝きたるに、皆紅の扇の日出したるが白波の上に漂ひ浮きぬ沈みぬゆられければ、沖には平家舷を叩いて感じたり。陸にて源氏舷を叩いてどよめきけり。

(語義) ①鏑 鏑矢のこと矢の一種、即ち矢竹の先に木又は角の蕪を附けた物である。②よつ引いて ③よく引いての高便であつて力強く云ひ表した語。④ひやう ⑤矢が弦をはなれて飛ぶ音の形容語。⑥小兵 ⑦身體の小さいこと。⑧いふ條 ⑨云ひながらの意。⑩十二束、三伏 ⑪一握指四本の幅十二と更に指三本伏せ並べたけの矢の長さ。⑫ひいふつと ⑬扇の射切られた音の形容語。⑭舷 ⑮矢を入れる器。

(文意) 那須與一宗高は鏑矢を取つて弓の弦に掛け十分に引き絞つてひようと射てやつた。小さい身體とはいひながらも、十二束三伏の長い矢であつて弓は張りが強かつた。その鏑矢は海一帯に響き渡る程に長鳴りして、狙ひ外れず扇の要の側一寸許り置いてひいふとまつ切つた。そうしてその矢鏑は海に這入つたが扇は空に舞ひ揚がつた、暫くの間は空中にひらくとして居たが春風のために一度二

度吹き廻されて海中にさつと散つてあつた夕日の輝いてゐるうちに眞赤な扇の日輪を描いたものが白い波の上に漂つて、ふわりふわりと浮いたり、すうつと沈んだりして揺られてあつたから沖の方では平家の武士が舷を叩いて感心した。又陸の方では、源氏の武士が矢を入れる舷を叩いてその音が鳴り響く様子であつた。

(注意) この文は最も有名な那須與一の扇的の箇所でも軍記文の特色を表してゐる。

### 第三章 楠木正成につきて

建武中興の人物にては、縉紳家に藤原兼房頼鈴家に楠木正成、固より輿論に歸する所なり。もし其の人品をいへば、藤房は公卿輔弼の臣たり正成は將師禦侮の臣たり。其の材の大小は正成の材、藤房の及ぶ所にあらず。藤房龍馬の諫は、直言極諫朝廷を登働せり。誠に朝陽の風鳴といふべし。然れども正成恢復の巧とは並べ論じ難し其の上藤房は一諫の後國を去り世を遁れしが、正成は其の身國難に殉せしのみならず、忠義代々家に傳へ天下に著る。當時誰か正成に比する人あるべき。

(語義) 建武中興 ①後醍醐天皇の北條高時を誅滅し、王政を復興して建武と改元して、天下を統治せられた事を指す。②縉紳家 ③官位身分の貴い人公卿をさす。「縉」とはさしはさむ「紳」とは大帯、笏を大帯にさしはさむ人の義。④頼鈴家 ⑤兵法家を云ふ。「頼」とは弓袋「鈴」とは矛の柄の義。⑥輔弼 ⑦天皇を助けて政治を行ふと云ふ意味にして輔弼の臣とは即ち天皇を助けて政治を行ふ大臣の事なり。⑧



譽侮の区、敵人の衝き来る侮を挫きふせぐ武臣、◎龍馬の諫、監治判官佐々木高貞が龍馬と稱して駿馬を後醍醐天皇に獻じた時藤房、獨り凶事となし、政治に御心を盡されし事を諫めた事は、大平記卷十三、龍馬進奏の事の條に見えた、◎樂動、耳をそばたて、驚き、感動すること、◎朝陽の風鳴、世に稀なるすぐれた事をいふ。

(文章) 後醍醐天皇建武の盛運を復興された事に大功あつた偉人の中では公卿には藤原藤房兵法家には楠木正成を数へることは言ふまでもなく世人一般の議論の定つてゐる事である。もしその人の身分をいふならば藤房は公卿として、天皇を助けて政治を行つた大臣であり、正成は軍隊の指揮者として、敵人の侮を挫きふせいだ武臣であるその材能の優劣を云ふならば正成の材能は藤房の及ぶ所でない。かの藤房が、監治判官、龍馬の獻上の際、諫は憚る所なく正直に云ひ語を盡して諫めて列座の朝臣を驚して感動させた、誠に世に稀なるすぐれた事と云つても宜しいであらふさうではあるけれども、正成が皇運をとりかへした功とは並べて言ふことが出来ない。其の上に藤房は一度諫めた後は國元を去り世の中を逃れ去つたが正成は其の身家の禍難に従つて死んだばかりでない、忠義の道を代々その家に傳へて、世の人の間に知られてゐる、その時代に何人がその功を正成に較べる人があらふか、較べる人がないのである。

### 第四章 書を讀む樂

書を讀めば千歳の前に人にあひまみゆ。わが如き愚者と云へども古の聖賢に對してまのあたりその教をうくるが如し。その理高くして大いなること天の如く深くして廣きこと海の如し、學問の道の深く大いなること、天と海とのほかには譬ふべき物なし。このゆゑに、天下の樂みこれに似たるはなし。世の人この樂を知らず、大なる不幸なり。譬へば日本にゐて富士の嶽、吉野の花を見ざる人だに見せまくほし。況んや世の人にこの書を見せまくほしくこの道をしらせまくほし。人となりて書を讀まずしてこの道をしなくわざる人はきはめて不幸の人にして、人となれる樂なし。あはれむべし。

(語義) ◎まのあたり、目の當りの義、目前にの意、◎譬ふべきものなし、譬へることの出来る物がない「べき」は可能の意、◎富士の嶽、富士の山と同じ「たけ」は「高」の通音、◎見せまくほし、見せたく思ふの意、「まくほし」は「まし」の活用中にある希望その意の助動詞ほしは「欲し」の義から出た語である。

(文章) 書物を讀むと、凡そ千年ともいふ様な多数の年の前に人に向會する様な心地がする自分(作者自身)のやうな愚なものであつても昔の聖賢者に向つて目前にその尊い教へを受けるやうな心地がする、その書き記してある所の道理が高尙であつて範圍の廣いことは天の無限に高く廣いやうなもので、又その道理の深遠であつて範圍の廣いことは海の無限に深く廣い様なものである、學問の道の道理の深く範圍の廣いことは天と海とのほかに譬へる事の出来るものがない。このゆゑに世の中の樂はこれに似寄つた物がない。然るに世の中の人はこの書物を讀む樂を知らないこれは大きな不仕合である。例を擧げていふと日本の國に居つて富士の山や吉野の花を見ない人ですら、その人に見せたく思ふ。況して世の中の人にこの書物を見せたく思ふ、この書物に記してある聖賢の道を知らせたく思ふことである。それゆゑに、人となつて書物を讀まないで、この聖賢の道を知らない人は至つて不仕合な人で、人間と生れて來た樂がないのである。此等の人には可哀相なものと言つて宜しいのである。

### 第五章 旅行の樂

旅行して他郷に遊び、名勝の地、山水のうるはしき佳境にのぞめば、良心を感じおこし、鄙吝を洗ひすゝぐ助となる。是も亦吾が徳をすゝめ智をひろむるよすがなるべし。又いひしらぬ靈境にゆきて見なれ



ぬ山川のありさまを見て目をあそばしめ、その里人にあひて、その風土をとひあるひはおくまりたる山ふところに、岩根ふみてたづね入りもとより山水の癖ありて、青山夢に入ることしきりなる人は、心をとめて歸ることを忘れぬ。あるひは山遠く眼界廣き海へのながめは、萬戸侯の富にもまされり。

(語義) ①良心 ②本然の善心即ち人間固有の善心を云ふ、③よすが ④便りとなること即ち方便の意寄處の義から出た語、⑤靈境 ⑥神聖な土地又神社佛閣などのある土地を云ふ、⑦山ふところ ⑧山と山との間の懐のやふに圍まれた所、⑨萬戸侯 ⑩一萬戸の封邑を有する諸侯を云ふ。

(文意) 旅行をして他の地方に遊び、名高く風光のすぐれた土地や、山や水の有様の美しい好い所に行くと人間固有の善心を感じ起し卑しい心を洗ひ清める助けとなるものである、是もまた自分の道徳を進め智識を擴める方便であらふ又、言語で表し得ない様な神聖な土地に行つて見慣れない山や川の有様を見て人の目を樂ませその地方の人に會つて、其の處の土地柄を尋ね或は奥まつた山の間の處に、岩を踏んで尋ね入る事などをすると、元來深く山水を愛好する癖があつて青山の状態を度々夢に見るやうな人は心を留めて、歸る事を忘れてしまふ、或は山が遠く見渡しの廣い海邊の眺めは、一萬戸位の封邑を領して居る大名の富にも優つてをる事である。

(文意) この文即ち兼好法師の旅の文は精神修養上の意義深く、これを讀むもの、本文の如く誰か青山しきりに夢に入ることを感じないものであらふか。

## 遞信漢文講座

### 緒言

#### 一、漢文を學ぶ必要

漢文は漢字ばかりで書いた文章である。支那の文章、即ち外國の文章であるけれども、これを外國の文章なりとして疎にする事は出来ぬ。國文と等しく、十分に之を研究せねばならぬ。といふのは我々が今日使つてゐる文章には多分の漢文が交つてゐるので、漢文を知らないでは、十分に今日の文章を解釋する事が出来ぬからである。實際今日我々が國語國文として用ふる言語文章の、もとをたゞせば、漢語漢文から出たものが非常に多く、どこまでが國語國文であつて、どこ迄が漢語漢文であるかわからぬ程である。此意味から我々が書を読むにも、又文章を書くにも、漢文の研究は極めて必要である。

#### 二、漢字に就いて

近頃漢字全廢論だの羅馬字採用説だのを唱へる人がある。羅馬字採用説の如きは今に於ては寧ろ空想に近い、漢字全廢論者の説く處は一應の理窟は聞えてゐるが、しかし未だ實行には程遠い。試に漢字を一つも使つてはならぬとしたらどんなに不自由だらう。じゆうと書いたのでは、自由だか十だか判らな



さて漢文を講ずる前にこゝで一つ漢文の要素たる漢字について少しく説いて置かう。漢字には、一つ字にも種々の読み方がある少なくとも二つ以上は訖度ある。例ば例といふ字にもレイとよむ読み方と、タメシとかタトヘバとか讀む讀方と二つある。前者を音といひ、後者を訓といふ。訓は、日本の固有の言葉を漢字に宛てたのである。音にも、漢音・吳音・唐音等の區別がある。普通用ひる音は漢音である。次に漢字がどうして出来たかについてざつと説かう。漢字は其出来方によつて、象形文字・指示文字・會意文字・諧聲文字等に分つ事が出来る。(一)象形文字とは、其物の象を描いたもの、即ち繪を以て直に夫を字としたもので、日とか月とか龜とか鳥とかはこれである。字態が次第に變つて來て、今用ひてゐるものは餘程繪とは遠いものとなつてゐるが、もとを尋ねて見るとこれを會得される(二)指示文字とは數量とか方向とか形の無いものを、符牒を以て現はしたもので、一・二・三・とか上・下・左・右とかはこれである。(三)會意文字とは、二個の文字を組合はせて、其意味をとつたもので、日と月とを並べて、明とし三水即ち水が青いといふ意味から、清としたのなどが其例である。(四)諧聲文字とは象形文字若くは指示文字と、聲を現はす文字とを組合せて拵へたもので、同じ川でも流が急でカツカツと瀬音を立てるのは三水の偏に、可といふ字をとり合せて河とし、流が大きく緩かにゴーツ〜と鳴るものは江といふ字をとり合せて江とする等である。其他轉注假借などの法があるが、こゝには略する。

## 大日本帝國

大日本帝國在亞細亞洲東氣溫和土壤肥沃物產豐饒山水亦秀麗建國以來二千五百七十餘年皇統一系君仁臣忠國體之美冠絕宇內。

(讀方) 大日本帝國は亞細亞洲の東に在り。氣候溫和に土壤肥沃にして、物產豐饒に山水も亦秀麗なり、建國以來二千五百七十餘年皇統一系君仁に臣忠にして、國體の美なること宇内に冠絶せり。

(語譯) ○氣候〓じこう、○溫和〓おだやか、○土壤〓土地、○肥沃〓土地がこえて農作物のよく出来ること、○物產〓この土地から出たもの、産物、○豐饒〓ゆたか、○山水〓山や水のけしき、○秀麗〓すぐれてうるはしい、○建國以來〓國のたてはじめからこのかた、○皇統〓天子の御ちすぢ、○一系〓ひとすぢ、○君仁臣忠〓君はめぐみふかく臣は忠義にあつち、○國體〓くにがら、○冠絶宇内〓天下にすぐれてゐる。

(意譯) 大日本帝國は亞細亞洲の東にある、氣候おだやかで、土地がよくこえて、ゐて物産がゆたかで、山や水の景色も亦すぐれてうるはしい、國をたてはじめてからこのかた二千五百七十餘年の間天子の御血統がひとすぢであつて天皇は恵み深く亦臣民は忠義の心にあつく、そのくにがらの美しいことは天下にすぐれてゐる。



平氏篇

平氏出自桓武天皇。天皇夫人多治比莫宗生四子。長曰葛原親王。幼有才名。長而謙謹。好讀書史。觀古今成敗以自鑒。叙四品。任式部卿。子高見孫高望。高望賜姓平氏。拜上總介。子孫世々爲武臣。其旗用赤。

〔讀方〕 平氏は桓武天皇より出づ。天皇の夫人多治比莫宗。四子を生めり。長を葛原親王と曰ふ。幼より才名あり。長じて謙謹にして書史を讀むを好み、古今の成敗を觀て以て自ら鑒む。四品に叙せられ式部卿に任せらる。子を高見、孫を高望といふ。高望姓を平氏と賜ふ。上總介に拜す。子孫世々武臣と爲り其旗赤を用ふ。

〔語譯〕 天皇夫人我國にて中古の頃、妃の次に位して、天皇の御寢所に侍する女官にして、五位以上と相當す。○四子葛原、佐味、賀陽、大野の四親王。葛原は即ち長子なり。○親王もと皇子皇女は生れながらにして親王になりしも淳仁天皇より後は「親王」の宣下ありし御方をのみ親王と稱せり親王の子は「王」といひ三世の後、臣に列して姓を賜ふ。○謙謹「謙遜謹直」の略。○書史歴史のこ皇の御ちすちで君はめぐみふかく、人民は忠義に厚くその國からのうるはしいことは天下第一である。

である。○累遷ししきりに官位を進めらるゝ事。

と。○古今成敗古より其時代に至るまでの成功と失敗との事蹟。○鑒む手本とする意。○四品親王の位は之を「品」といふ、一品より四品迄あり。四品は即ち第四位なり。○叙せらる位を授けられること、○式部卿式部省の長官。○賜姓平氏平氏といふ姓を賜つた。○拜す命を拜するの意

○介國司(守)の次役。○武臣武事を以て仕へる臣下。

○平氏は桓武天皇から出でてゐる。そして高望の時に「平」なる姓を賜つた。世に武臣となつて、後日源氏の白旗と對すべき赤旗を用ひた。

高望四子。國香、良將、良兼、良久。並爲東國守。介、鎮守府將軍。國香子曰貞盛。材武善射。天慶中、以平將門功。叙從五位上。累遷從四位下。任鎮守府將軍。兼陸奥守。世呼平將軍。

〔讀方〕 高望に四子あり。國香、良將、良兼、良久といふ。並に東國の守、介、鎮守府の將軍と爲る。國香の子を貞盛と曰ふ。材武にして射を善くす。天慶中將門を平げし功を以て、從五位上に叙せられ、從四位下に累遷す。鎮守府將軍に任せられ陸奥守を兼ぬ。世、平將軍と呼べり。

〔語釋〕 ○鎮守府將軍東夷を鎮撫する重職。○材武善射材力武勇ありて、そして射ることが巧み



○平將門の亂は、既に諸君が日本歴史に於て研究せられたる如く、可成有名なるものである。抑も彼れは始め檢非違使たらんことを希望して居つたのであるが、それが容れられなかつたので、遂に亂を起し、貞盛を信濃に要撃して之を敗走せしめ、常陸介藤原維幾を不意討ちにして生け取つたのである此の勝戦に内心大いに誇つて居た、時しも武藏守興世王なる者が來り參じて「關東八州は土地が肥えて物産が豊かに而も其の上四方には險阻なる山岳があつて之を圍繞し、他の國々から攻め入るのに、中々困難なる地方である。由來一州を取るも誅せられ、八州を取るも亦誅せられる。其の誅せらるゝ點は何れも一である。さればどうせやるなら大きい事をやつたがいゝぢやないか、」と追縱旁々油を注ぎかけたので、將門大いに悦び、興世王を引き入れて自分の參謀長となし、關八州の大半を手に入れて例の僞宮を造り久武百官を置いて潛擬を極めたのである。これは貞盛が後日常陸掾に任せらるるに及んで藤原秀卿と力を併せ討滅したので其功によつて位階が進み遂に平將軍と呼ばるゝに至つたのである。茲で諸君は考へなければならぬ。即ち平氏からは將門の如き不忠の臣を出したのであるから洵に一族の大恥辱であらねばならぬのだが、然し之が平定も亦能く平氏それ自身の手で之を爲したのであるから結局功罪相半ばすと云つて云はれぬことはないが、此の事は本篇の最後に、山陽が「平氏評論」として論せられてあるから、詳細は其の節に譲ることにする。

貞盛四子。季維衡。最勇。與平致賴源賴信。藤原保昌。齊名稱四天王。維衡曾孫正

盛。有武幹。正盛生。忠盛。忠盛居伊賀。伊勢之間。爲人眇一目。大治中。山陽、南海盜起。忠盛逮捕有功。事白河、鳥羽二上皇。並有寵焉。

〔讀方〕 貞盛に四子あり。季を維衡といふ。最も勇あり。平致賴、源賴信、藤原保昌と名を齊しうし、四天王と稱せらる。維衡の曾孫を正盛といふ。武幹あり。正盛、忠盛を生めり、忠盛、伊賀伊勢の間に居る。人と爲り一目を眇す。大治中、山陽、南海に盜起る。忠盛逮捕して功あり、白河鳥羽の二上皇に事へ並に寵あり。

【語釋】 ○季末子のこと。○平致賴。○平太夫。○源賴信。鎮守府將軍。○藤原保昌。左京太夫致忠が子也。○齊名。同じ程の名聲あること。○四天王。佛經に、「東方は持國天、西方は廣目天、南方は增長天、北方は、多聞天の四天王ありて、四方を守護す」とある。之が轉じて武勇の勝れたる者等を以て之に比し稱するに所謂「四天王」を以てするに至つた。○維衡曾孫。貞盛。維衡。正度。正衡。正盛。忠盛との關係。○有武幹。武術に勝れてゐる。○眇一目。片目のこと。「眇」は和名を「スガメ」と云ふ片目が普通の人と異つてゐること。○大治。崇徳天皇時代の年號。○逮捕。召し取るの意。○並有寵。御二方に愛せられた。

○平氏が桓武天皇から出、其の後幾代かを經て、例の將門の一件があり、爾來此の章に出てゐる忠盛



までのことを諸君はよく系統的に頭を入れて居らねたい。これから忠盛に關する一挿話を述べて次に愈々清盛の事柄から一族滅亡にまで至るのである。

鳥羽上皇建得長壽院。以忠盛董役。役竣除但馬守。聽昇殿。舉朝憎之。謀以豐明節會。乘暗刺之。忠盛曰。朝即蒙詔。不朝爲怯。其辱宗一也。乃帶刀而入。家人平家貞與其子家長。衷甲從焉。吏訶止之。家貞對曰。主君有戒心。臣將與同。死。吏不得止。忠盛昇殿。就闇。拔刀。刀光外射。衆大畏。不敢發。及宴。召忠盛命舞。衆歌曰。伊勢瓶子醋甕。蓋國音瓶子通平氏。醋甕通眇也。忠盛愧之。不終宴退。呼主殿司。脫刀授之而出。

(讀方) 鳥羽上皇、得長壽院を建てたまひ、忠盛を以て役を董さしむ。役竣りて但馬守に叙せられ、昇殿を聽さる。舉朝之を憎み、豐明節會を以て、暗に乗じて之を刺さんことを謀る。忠盛曰く、「朝すれば即ち詔を蒙り朝せざれば怯と爲る其の宗を辱むるは一也」と。乃ち刀を帶して入る。家人、平家貞、其の子家長と甲を衷して従ふ。吏之を訶止す。家貞對へて曰く「主君戒心有り。臣將に與に死を同じうせんとす」と。吏止むることを得ず。忠盛、殿に昇り、闇に就き刀を抜く。刀光外射す。衆大いに

畏れ、敢て發せず。宴に及び、忠盛を召して舞を命ず。衆歌ひて曰く、伊勢の瓶子は醋甕なりと蓋し。國音瓶子は平氏に通じ、醋甕は眇に通ずる也。忠盛之を愧ち、宴を終へずして退き主殿司を呼び刀を脱し之に授けて出づ。

【語釋】 ○得長壽院 源平盛衰記に「鳥羽院の御願、三十三間の御堂を造進し一千一體の觀音に据る奉る」とあるより三十三間堂だともいふ説もあるが未だ詳かでない。○董役 工事を監督せしむる○役竣 工事落成して。○叙せらる 位を拜するをいふ。○聽昇殿 清涼殿に昇ることを許さる。○舉朝 朝臣等悉く。○豐明節會 天皇より酒宴を賜ふ儀式。十一月中の丑の日之を行ふ。○蒙詔 恥かしめらる。○詔は「恥」と同義。○怯 卑怯。○憶病。○辱宗 一家一門を辱しむ。○家人 家來。○衷甲 鎧を衣服の下に着ること。○訶止 叱り止むる。○戒心 用心と同義。○就闇 暗い處に行つて。○不敢發 手出しをし様としない。○伊勢瓶子 錯甕 伊勢にて出来る瓶子(ヘイシ)は錯甕(スガメ)である。即ち忠盛は伊賀、伊勢の間に居た。且つ瓶子と平子と音相通じ、錯甕と眇(スガメ)——忠盛は眇、即ち片目であるから——と音相通ずるによつて。斯く歌つて忠盛を辱かしめたのである。○愧 心中恥かしく思ふ。○主殿司 殿中で掃除など司る役人。

衆劾奏忠盛帶劍上殿。以兵自衛。請正典刑。上皇驚。召忠盛問之。對曰。臣之家。人聞道路之言。尾臣而來。不使臣知。唯陛下斷其罪。如其佩刀。請問之主殿司。主



殿司進之。木刀塗銀也。上皇。嘻曰忠盛用意良苦。以死衛君。則武人之習耳。遂無所問。

(讀方) 衆、忠盛劍を帯び、殿に上り、兵を以て自ら衛るを劾奏し、典刑を正さんと請ふ。上皇驚き忠盛を召し之を問ふ對へて曰く臣が家人道路の言を聞き、臣に尾して來り、臣をして知らしめず。唯陛下其の罪を斷せよ其の佩刀の如きは、請ふ之を主殿司に問ひたまへと。主殿司之を進む。木刀に銀を塗れるなり。上皇嘻ひて曰く「忠盛意を用ふること良に苦めたり。死を以て君を衛るは、即ち武人の習ひのみと。遂に問ふ所なかりき。」

【語譯】 ○劾奏||罪狀を申し上げること。○典刑||典は法律。刑は刑罰。故に典刑は法律に則つて其の罰を定むること。○道路之言||世間之評判(噂)のこと。○尾||跡からついて來る。○斷||裁判。即ちさばくこと。○佩刀||佩びてゐる刀。○嘻||感心してほめること。○良苦||まことに苦心した。○以死||生命を賭して。○無所問||別段に吟味しなかつた。

○忠盛が豊明の節會の上演、舞をなした一齣を、平家物語から抄録して諸君の參考に資する。尙ほ今後も時々かうした古文の抄録をなすつもりであるから、現代文とはまたかけはなれた古文獨特の妙味を充分に味はりたい。「忠盛又御前の召に舞はれるに、人々拍子をかへて」「伊勢瓶子は酢瓶なりけ

りとぞはやされける。掛卷も恭く此の人々は柏原天皇の御末とは申しながら、中比は都の住居もうとくしく地、下にのみ振舞なりて伊勢の國に住給ふかゝりしかば其の國の器によせて、伊勢平氏とぞはやされける。その上忠盛の目の、すがまれたりける故にこそ、かやうにはやされけるなれ。忠盛如何にすべき様もなくして、御遊も未だ終らざるさきに、御前を罷り出でらるゝとて、紫宸殿の御後に於て人々の見られける所にて、横へさゝれたりける腰の刀をば主殿司に預け置きてぞ出でられける……(下略)

忠盛累遷。以正四位下刑部卿卒於仁平中。忠盛有七子。曰清盛、經盛、教盛、家盛、賴盛、忠重、忠度。而清盛最極寵貴。

(讀方) 忠盛、累遷して、正四位下刑部卿を以て、仁平中に卒せり。忠盛七子あり。清盛、經盛、教盛、家盛、賴盛、忠重、忠度と曰ふ。而して清盛最も寵貴を極む。

【語譯】 ○刑部卿||刑部省の長官であつて、裁判監獄等の事を司どり、今の司法大臣に當る。○卒||五位以上の人の死をいふ。○仁平||近衛天皇時代の年號。○寵貴||恩寵、即ち信愛されたこと。○清盛が忠盛の子となつたについては一つのロマンスがある。それはかうだ、初め忠盛が白河上皇に仕へてをった頃に、上皇に寵幸せられ宮女に兵衛佐局といふものがあつたが、忠盛は之と密通して懷



姪させたのである。處が上皇は之を知つてをつたが、別に御咎めならず其のまゝ女官を忠盛に賜ひ  
 として「若し生れた子が女であるならば、朕が之を引きとり、男であつたならば、其方に取らすであ  
 らう」と仰せられた。やがて生れた子を見ると男の子であつたので、御約束通り忠盛が頂戴して、清  
 盛と命名したのである。後の平家の御大は實に此の男なのだ。

義朝視平氏聲望出己上也。心常嫉之。藤原通憲娶清盛女爲婦。亦與義朝有  
 隙。通憲參與大議。多所釐止。帝授位太子。是爲一條帝。而上皇仍聽政。政在於通  
 憲。上皇嬖人曰藤原信賴。水爲近衛大將。上皇欲聽之。通憲不可。因圖唐安祿山事  
 跡。上焉。以諷之。信賴慚恨。乃與義朝深相結納。陰謀作亂。藤原經宗。藤原成親。藤  
 惟方等。皆與其謀。謀既定。而畏清盛不敢發。

(讀方) 義朝平氏の聲望己が上に出づるを視るや、心常に之を嫉む。藤原通憲、清盛の女を娶りて婦  
 と爲す。亦義朝と隙あり、通憲、大議に參與し、釐正する所多し、帝位を太子に授く。是を二條帝とす  
 而して上皇仍政を聽く。政通憲に在り。上皇の嬖人を藤原信賴と曰ふ。近衛大將たらんことを求む。上  
 皇之を聽さんと欲す、通憲可かず因りて唐の安祿山の事跡を圖して上り、以て之を諷す。信賴慚恨し、

乃ち義朝と深く結納し、陰に亂を作さんことを謀る藤原經宗、藤原成親、藤原惟方等、皆其の謀に與  
 かる。謀既に定まる。而れども清盛を畏れて敢て發せず。

【語譯】 ○聲望聲譽人望の略。○嫉妬所謂をねむ。○婦子の妻。即ち嫁のこと。○有隙仲の惡  
 いこと。○參與かゝはりあづかる。關係する。○大議重大なる政治の評議。○釐正釐は治める  
 ことである従つて釐正は秩序を立て、治め、以て失なき様にする。○仍依然として○嬖人御  
 氣に入りの者。○藤原信賴中納言右近衛門督。○近衛大將平城天皇の大同二年に、近衛を以て左  
 近衛となし、中衛を以て右近衛となし、以て諸宿衛の禁軍を統領したものであるが、大將は即ち其の  
 長官である。○圖經卷物にすること。○安祿山事跡唐の安祿山は玄宗に仕へて非常に寵愛を受け  
 てをつた。玄宗は安祿山に罪あれども之を宥し、遂に營州の都督と爲した。然るに祿山は天寶十四年  
 に反して兵十五萬を率ひ、南進して京師を陥れ、爲に玄宗は蜀に走つたのである、祿山は僭號一年餘  
 にして誅に伏した、通憲は即ち此の古事を引用して上皇を誡めたのである。○諷それと明かに言は  
 ず他に他のことのようにして諫めること。○慚恨慚ちて無念に思ふこと。○結納互に結び納れる即  
 ち深く相結託すること。○經宗大納言。○成親權大納言。○惟方檢非違使。○與あづかる。  
 關係すること。

平治元年冬。清盛、重盛、率筑後守家貞五十人。詣熊野。行至切部。六波羅使者來



告曰。昨夜信賴、義朝與源賴政、源光基等率兵五百圍三條殿。火之。並火。少納言第、殺傷無算。遂幽上皇及主上於禁內。少納言亦遭害矣。衆愕然。清盛曰。爲之何如。宜到熊野計之乎。重盛曰。武臣赴天子之急。何猶豫爲。清盛曰。如無甲何。家貞曰。臣豫慮有是事矣。開其擔。出甲胄五十。器械弓箭稱之。衆乃結東北還。

〔讀方〕 平治元年冬清盛、重盛、筑後守家貞等五十人を率ゐる熊野に詣り、行きて切り部に至る。六波羅の使者來りて告げて曰く。昨夜信賴、義朝、源賴政、源光基等と兵五百を率ゐ、三條殿を圍みて之を火き並に少納言の弟を火く殺し算なし、遂に上皇及び主上を禁内に幽し、少納言も亦害に遭ふと。衆愕然たり。清盛曰く。之を爲すこと如何。宜しく熊野に到り之を計るべきかと。重盛曰く。武臣天子の急に赴く。何ぞ猶豫を爲さんと。清盛曰く。甲なきを如何せんと。家貞曰く。臣豫め是事あるを慮ると其の擔を開きて甲胄五十を出す。器械弓箭之に稱ふ。衆乃ち結束して北に還る。

〔語譯〕 ○平治二條帝の時の年號。○熊野紀伊國牟婁郡に在る社。祭神に速玉男神。事解男神。伊弉册神。○切部紀伊國日高郡に在り。○三條殿三條烏丸に在る上皇の御所。○火燒くと同音同義。○少納言第少納言通憲の邸宅。○殺傷無算殺されたり傷つけられたりしたものが數の知れぬ程多い。○幽押し込める。禁内御所の内。○遭害即ち殺されたこと。愕然不意の事に逢ふて驚く貌。○爲之何如此の處置をどうしやう。○急事變。○猶豫ためらふ。○擔になはせて來た櫃。○甲胄鎧兜などの武具。○器械こゝでは諸道具の意。○稱之相應の數だけあつて整つてゐる。○結束身仕度すること。

已而聞源氏公要阿部野。清盛曰。彼衆我寡。我且避之四國。以謀再舉。重盛曰。機不可失。失今不伐。彼將先我。我寡而敗。何恥之有。今日之事。有死而已。清盛曰。吾志決矣。率衆疾馳。未至阿部野。遇一騎。衆意源氏使也。騎至曰。臣自六波羅。六波羅之共迎。駕見在阿部野。請速歸。衆相喜慶。踴躍入京師。

〔讀方〕 已にして源氏の公、阿部野に要すと聞。清盛曰く。彼は衆、我は寡、我れ且之を四國に避けて以て再舉を謀らんと。重盛曰く。機失ふべからず。今を失ひて伐たずんば彼れ將に我先せん。我れ寡にして敗るゝとも何の恥か之れあらん。今日の事死あるのみと。清盛曰く。吾が志決せりと衆を率ゐて疾く馳す。未だ阿部野に至らざるに、一騎に遭ふ。衆意へらく。源氏の使ならんと。騎至りて曰く。臣は六波羅より至れり。六波羅の共、駕を迎へて見に阿部野に在り。請ふ速に歸れと。衆相慶し、踴躍して京師に入る。



【語譯】 ○要す||待ちうける。○阿部野||攝津の國に在り。○再舉||後日の旗上げ。○機||機會○迎駕||貴下を迎へて……と云ふ意。○見に||げんにと讀みて目のあたり即ち現在の意。○喜慶||喜び祝ふ。○踴躍||小をどりすること。喜びの極度に達せる形容。

當是時信賴自爲大臣大將義朝以下皆拜官信賴衣冠僭擬乘輿坐百官上聽斷庶改百官莫敢仰視獨左衛門督藤原光賴不屈因會議折信賴勗其弟惟方護二宮以待清盛清盛既還信賴聞之益諸門守兵清盛謀意其備乃致名簿於信賴以示無他清盛計拔帝乃與惟方通謀夜放火二條大宮守門兵舍守救之天皇乃與皇后同車蒙衣而伏出藻壁門惟方從門者誰何惟方曰宮人也門者獨於車中曰可矣既出重盛以騎三百迎謁于途奉入六波羅百官萃焉。

(讀方) 是の時に當り信賴自ら大臣大將と爲り、義朝以下皆官に拜す。信賴依冠乘輿に僭擬し百官の上<sup>じやう</sup>に坐し、庶政を聽斷す。百官敢て仰ぎ視るなし。獨り左衛門督藤原光賴屈せず會議により信賴を挫き其弟惟方を勗め、二宮を守り以て清盛を待しむ。清盛既に還る。信賴之を聞き、諸門の守兵を益す。清盛其備を怠らしめんと謀り乃ち名簿を信賴に致し以て他なきを示す。清盛帝を抜くを謀り、乃ち惟方と謀を通じ、夜火を二條の大宮に放つ守門の兵守を捨て、之を救ふ。天皇乃ち皇后と、車を同うし、衣を

蒙りて伏し、藻壁門より出づ。惟方從ふ。門者誰何す。惟方曰く宮人也と。門者車中を燭して曰く可なりと。既に出づ。重盛、騎三百を以て途に迎謁し、奉じて六波羅に入る。百官萃れり。

【語譯】 ○衣冠僭擬乘輿||服裝其の分を踰えて天子に真似ること。平治物語に「信賴卿は小袖に赤き大口冠に巾子紙入れて偏に天子の御振舞の如くなり」とあり。○庶政もろくの政治。○聽斷||とりさばく、處置すること。○左衛門督||「左衛門府の長官のこと。○不屈||心をまげて従はぬこと。○會議||「集會評議」の略。○因り||機會とし。○勗め||意見をして勵み勉めさす。○二宮||二條天皇と後白河上皇の御二方を指す。○名簿||名前を書き連ねしもの。即ち連名帳。○致す||差し出す。○無他||二心なし。○計拔帝||幽せられたる帝を取り出すことを計り。○救之||茲にては鎮火につとむるの意。○蒙衣かつぎといふ婦人の衣を頭よりかぶり。○藻壁門||皇居の西の門。○門者||門番。○誰何||「何の誰か」と問ひ訊すこと。○宮人||宮女。○燭して||ともしびを照らして。○可矣||よろしい。○迎謁||お迎ひ申して。○奉じ||御供して。○萃る||「集る」と同様。

已而上皇又逃於仁和寺而信賴等仍據大内帝召清盛命討賊且戒之曰宜伴退走誘賊出宮莫使宮闕罹兵燹也清盛對曰臣誅逆賊如指之掌勿以勞天心至若後命臣甚惑焉雖然不敢不盡心乃勅兵二千騎令重盛教盛賴盛將之分



兵赴大内。

六〇

〔讀方〕 已にして上皇又仁和寺に逃れたまふ。而して信賴等仍は大内に據る。帝清盛を召を、賊を討つを命じ、且つ之を戒めて曰く「宜しく偽りて退き走り、賊を誘ひて宮を出すべし。宮闕をして兵燹に罹らしむるなかれ。」と清盛對へて曰く「臣、逆賊を誅すること、之を掌に指すが如し。以て天心を勞したまふ勿れ。後命の若きに至りては、臣、甚だ感ひぬ。然りと雖も、敢て心を盡さずんばあらず」と。乃ち兵三千騎を勸し重盛・教盛・賴盛をして之を將たらしめ、兵を分けて大内に赴く。

〔語譯〕 ○仁和寺にんなじと讀む。京都の北にある寺。○大内は御所のこと。○伴るはいつはること。○宮闕は御所の意。宮は即ち宮闕は宮門合して御所。○兵燹は兵亂より起れる火災。○如指之掌はたとへば掌を指すが如く、物事のいと容易なること。○後命は即ち御所を兵火の災にかからしむるなどの御命令。○惑はこまる。迷ひ惑ふ意。○勸は整へ。

賊開承明建禮二門。閉陽明待賢郁芳三門。樹白旗二十餘旒守之。我兵望見色動。重盛勸衆曰。年爲平治。地爲平安。而我平氏也。天示吉兆。獲勝必矣。汝輩努力。乃分其兵爲二。留一于大宮巷。以其一薄待賢門。大呼挑戰。信賴怖墮馬。重盛排門而入。至大庭椋樹下。與源義平大戰。紫宸殿前七匝櫻橘樹。出至大宮巷。杖弓

以息。平家貞目之曰。可謂平將軍再生矣。

〔讀方〕 賊、承明・建禮の二門を開き、陽明待賢・郁芳の三門を閉ぢ、白旗二十餘旒を樹て、之を守れり。我が兵、望見して色動く。重盛是れを勵まして曰く「年は平治也、地は平安也。而して我は平氏也。天、吉兆を示せり。勝を獲んこと必せり矣、汝が輩、努力せよ」と。乃ち其の兵、二と爲し、一を大宮の巷に留め其の一を以て待賢門に薄り、大いに呼んで戰を挑む。信賴、怖れて馬より墮つ。重盛、門を排して入り、大庭の椋樹下に至り源義平と大いに、紫宸殿の前に戰ひ、櫻橘の樹を七匝し出で、大宮の巷に至り、弓を杖きて以て息ふ平家貞、之を目して曰く「平將軍、再生すと謂ふ可し」と。

〔語譯〕 ○陽明・待賢・郁芳三門は紫宸殿の東に在り。○旒は一とながれ。旗幾本といふときに旗幾旒といふ。○色動くは恐怖の念顔色にあらはること。○平安は所謂「平安京」にして今の「京都」。○吉兆はめでたき前表。○大宮巷は皇居の東なる南北の道路。○挑戰は戰はんと仕掛けること。○排しは押し開く。○大庭は南殿の庭。○椋樹は椋の木。○紫宸殿は大内裏の正殿。○七匝は七度めぐる。○櫻橘樹は所謂左近の櫻と右近の橘となり。○平將軍は貞盛のこと。○再生は生れがはり。○臆病者の信賴が馬から落ちた所を、「平治物語」に非常に面白く書いてあるから次に採萃する。

〔信賴御落馬の事〕 大内は皆源氏の勢なれば白旗二十餘旒打ち立てたり。大宮面には平家の赤旗三十餘旒差し掲げて、勇み進める三千餘騎、一度に陣を咄と作りければ、大内も驚き渡りて夥し。敵波に驚きて、只今までは由々しく見えられつる信賴、顔色變りて



草葉の如くにて、兩階を下られけるが、膝震えて下りかねたり人なみく、馬に乗らんと、引寄せたれども、ふとりせめたる大の男の、大體は著たり。馬は大なり。乗煩ふ上、主の心にも似も似ず、はやり切りたる逸物なれば、つと出でんとしけるを、舍人七八人寄りて馬を抱へたり。放たば天へも飛びぬべし。穆王八匹の天馬の、も、かくやと覺ゆるばかりにて乗りかね給ふ所を、侍二人つと寄りて、疾く召し候へとして押し上げたり。餘りにや押したりけん。弓手の方へ乗りこして、伏様にとつと落つ。急ぎ引越して見れば顔に砂ひしと付き、鼻血流れて見苦しかりけり。義朝此の體を見て、日頃は大将とて恐れ給ひけるが、はたと睨みて、あの信頼といふ不覺人は隠したりなとて、日部門を打出で、都芳門に向はれければ、信頼も鼻血押し拭ひ、兎角して馬に振乗せられ、待賢門へ向はれけるが物の用に進ふべしとも見えざりけり。

重盛更兵復入。義平呼曰。我源氏嫡子。公平氏嫡子。宜與決死也。重盛曰。諾哉。乃進。戰且退。與二卒景安・家泰。俱走義平及鎌田政家追之。至二條濠。重盛踰濠。政家射之。中肩及背。甲堅不入。射馬。馬倒而胄墮。政薄之。重盛扞以弓。取胄被之。景安至。搏仆政家。爲義平所殺。重盛怒欲親闘。家泰進與義平相搏。爲政家所殺。重盛得間走。

（讀方）重盛、兵を更へて復た入る。義平呼んで曰く、「我は源氏の嫡子、公は平氏の嫡子也。宜しく與に死を決すべしと。重盛曰く。諾せりと。乃ち進んで戦ひ、且つ退き、二卒景安、家泰と俱に走る。義平及び鎌田政家、之を追ひて二條の濠に至る。重盛濠を踰ゆ。政家之を射て、肩及び背に中つ。甲堅

うして入らず。馬を射る馬倒れて胄墮つ。政家之に薄る。重盛扞ぐに弓を以てし。胄を取りて之を被る。景安至り政家を搏ち仆し、義平の殺す所と爲る。重盛怒りて親ら闘はんと欲す。家泰進みて義平と相搏ち、政家の殺す所と爲る。重盛間を得て走れり。

【語譯】 ○更兵 〓 新手の兵を入れかへる。 ○嫡子 〓 總領息子。即ち長男。 （平治物語に「幸に義平、源氏の嫡子也。御邊も平家の嫡子也。敵には誰や倭はん。寄れや粗まん。いふまゝに……とあり。」） ○諾哉 〓 「もとより承知なり」との意。 ○薄近く寄せつめる。 ○扞 〓 「防ぐ」と同訓同義。 ○搏仆 〓 細み打ちして倒す。 ○間 〓 すさまじきこと。 （平治物語に「此の間に虎口を逃れて、六波羅助かり難き命也」とあり。）

當是時。賴盛等攻郁芳門。與義朝戰退走。義朝卒有善走者八町二耶。以鐵搭鈎其胄。賴盛拔刀截搭。二耶仰仆。賴盛走。源氏兵空宮而出。教賴乃以千騎橫入大内。閉諸門守之。義朝・義平無所獲而還。宮宮皆赤旗矣。進退失據。遂進攻六波羅。清盛乃上北臺。踞床指麾。賊兵沓至。官軍逡巡。賊乘勝而進。矢及内戶。清盛怒上馬。大敗馳出。親突敵陣。更兵交々進。賊遂大敗走。清盛乃入大内。收名簿笑曰。昨予今取。何速也。乃分兵追賊。



(讀方) 是の時に當り頼盛等郁芳門を攻め義朝と戦ひ退き走る義朝の卒に善く走る者八町二郎あり。鐵搭を以て、其冑を鉤す。頼盛刀を抜いて搭を截る。二郎仰ぎ仆る。頼盛走る。源氏の兵、宮を空ふして出づ。教盛即ち千騎を以て、横より大内に入り、諸門を閉ちて之を守る。義朝義平、獲る所なくして宮に還れば、宮は皆赤旗なり矣。進退據を失ひ、遂に進んで六波羅を攻む。清盛乃ち北臺に上り、床に踞して指毫す。賊兵沓至し官軍遼巡す。賊、勝に乗じて進み、矢、内戸に及ぶ。清盛怒りて、馬に上り大に呼びて馳せ出で、親ら敵陣を突き、兵を更へて交々進む。賊遂に大に敗走す。清盛乃ち大内に入り名簿を收め、笑ひて曰く「昨予へ、今取る何ぞ速かなるや」と。乃ち兵を分ちて賊を追ふ。

【語譯】 ○善走者 かけることの上手なる者。○鐵搭 鐵の熊手。○鉤 つかける。○截る 二つに立ち切る。○空宮 御所の中より兵士が残らず出たること。○進退失據 後にも先にも據り所(行く所)の無くなれること。○北臺 北の方の物見やぐら。(平治物語「清盛は、北の臺の西の妻戸に軍の下知して居る。」)○踞床 床儿に腰をかけて。○指揮 指圖すること。○沓至 かさなりあつて攻めよせてくる。○遼巡 ためらふ、しりごみ、あとじさり。○内戸 天子の御座所。○交々進 かはるがはる進む。○昨予今取 昨日與へて今日もう取り返す。

義朝奔關東。信賴至仁和寺。乞哀於上皇。上皇爲請之於帝。帝不許。重盛曰。即宥

之。彼何能爲。清盛曰。首惡不可不誅。且如帝命何。乃遣教賴引兵圍仁和寺。捕信賴及其黨源師仲、藤原成親等五十餘人。斬信賴于六條磧。重盛、教盛與成親有姻乞而宥之。帝賞清盛戰功。進其子弟官爵。尾張人長田忠致。誅義朝。獻其首。梟之獄門。頼盛將平宗清亦捕義朝少子頼朝至。將斬。宗清憫之。因池尼請宥。池尼頼盛母。於清盛爲繼母。清盛不聽。尼怒曰。刑部卿而在。汝安得侮我言乎。重盛與頼盛固請。乃減死一等。流于伊豆。義平變服入京師。狙擊清盛。清盛覺之。捕獲斬之。平氏姿振天下。

(讀方) 義朝關東に奔る。信賴仁和寺に至りて哀を上皇に乞ふ。上皇爲に之を帝に請ふ。帝許したまはず。重盛曰く、「即し之を計すとも、彼何ぞ能く爲さん」と。清盛曰く、「首惡誅せざるべからず。且帝の命なるを如何せん」と。乃ち教賴を遣し、兵を引いて仁和寺を圍み、信賴及び其の黨源師仲・藤原成親等五十餘人を捕えしめ信賴を六條磧に斬る。重盛・教盛・成親と姻有り、乞ふて之を宥す。帝、清盛の戦功を賞し、其の子弟の官爵を進めたまふ。尾張の人長田忠致、義朝を誅して其の首を獻す。之を獄門に梟す。頼盛の將平宗清も亦、義朝の少子頼朝を捕えて至る。將に斬らんとす。宗清之を憐み、池尼に因りて宥されんことを請ふ。池尼は頼盛の母にして、清盛に於ては繼母なり、清盛聽かず。尼怒りて曰く、



刑部卿にして在さば、汝安ぞ我が言を侮るを後ん乎と重盛頼盛と固く請ふ乃ち死一等を滅じ伊豆に流す。義平服を變じて京師に入り、清盛を狙撃せんとす清盛之を覺り、捕え獲て之を斬る。平氏の威天下に振えたり。

【語譯】 ○彼何能爲 || 彼れは何程の事を爲し得やう。平治物語「あれほどの不覺人、助け置かせ給へたりとも、何程の事候ふべき云々」○乞哀 || 哀れみ（こゝにては助命）を願ふこと。○首惡 || 惡事の發起人。謀叛の頭領。○磧 || 河原と同意義。○有姻 || 親戚の間柄。○憫 || ふびんに想ふ。○池尼 || 清盛の繼母。○刑 卿 || 忠請（即ち清盛の父）のこと。○狙撃 || 狙ひ撃つこと。○覺る || 見あらはす。

仁安元年。以清盛叙正二位。任内大臣。二年遂至從一位。陞太政大臣。賜隨身兵仗。聽輦車入宮。勅賜邑于播磨肥前。肥後。爲大功田。世襲。重盛叙從二位。任權大納言。聽帶劍昇殿。次子宗盛叙正二位。任參議。

（讀方） 仁安元年清盛を以て正二位に叙し内大臣に任せらる。二年、從一位に至り、太政大臣に陞る。隨身兵仗を賜ひ、輦車にて宮に入るを聽さる。勅して邑を播磨・肥前・肥後に賜ひて大功田と爲し世襲せしむ。重盛從二位に叙し、權大納言に任せられ帶劍昇殿を聽さる。次子宗盛從三位に叙し、參議に任せらる。

【語譯】 ○仁安 || 仁あんんと訓する。六條帝の時の年號なり。○内大臣 || 左大臣に亞ぎ、之等不參の時は代りて政務儀式を舉行す。○太政大臣 || 天下の萬機を總掌する官。天智帝の朝始めて此の官を置く。○隨身兵仗 || 武器を帯びたる者を護衛の爲め隨ふるを云ふ。平治物語「大將にあらねども兵仗を賜つて、隨身を召具して、執政の人の如し。輦車に乗りて宮中を出入す、偏に女御入内の儀式なり」○輦車 || 牛馬を用ひす手にて挽く車にて皇太子、親王、大臣、僧正等の勅許を蒙りたる者が待賢門より春花門の間を乗り通る車也。○大功田 || 功田は國家に功勞ありたる者に賜る田地にて大功田は子孫に傳ふるを得るなり。○世襲 || 代々子孫に相續するの意義。

三年二月憲仁受禪。甫五歲。是爲高倉帝。後白河上皇寵后滋子之出也。而后爲清盛妻時子妹。帝母之兄大納言平時忠謂衆曰。方今天下之人。非平族者。非人也。當是時。平族爲朝官者。六十餘人。其采邑跨三十餘州。朝政盡決。清盛既而清盛削髮。稱淨海。與別第于西八條。居焉。

（讀方） 三年二月、憲仁禪を受く、甫めて五歲なり是を高倉帝と爲す。後白河上皇の寵后滋子の出也而して后は清盛の妻時子の妹なり。帝の母の兄大納言平時忠衆に謂つて曰く方今平族に非ざれば人に非ざる也と。



是の時に當りて平族の朝官と爲る者六十餘人なり其采邑は三十餘州に跨り。朝政盡く清盛に決す。既にして清盛髪を削つて淨海と稱し別弟を西條に興し焉に居る。

【語譯】 ○采邑は支配して居る領地。盛衰記に「日本秋津島は僅かに六十六ヶ國、平家知行は三十餘ヶ國、既に半國に及べり、其上庭園五百餘所、田畠は幾らといふ數を知らず」○別弟は下屋敷。○削髪は出家すること。

選童三百服異服。散布京城内外。察誹謗者。輒處法。京師側目。上皇積不能平。嘉應元年。上皇削髮稱法皇。平氏益橫。

【讀方】 童三百を選び異服を服せしめ 京城の内外に散布し。誹謗する者を察して輒ち法に處す。京師目を側立つ。上皇積つて平かなる能はず。嘉應元年上皇削髮して法皇と稱す。平氏益々横也。

【語譯】 ○童は小供。○異服は普通と異なる服装。○散布はあちこちに配り置く。○誹謗は悪口すること。○處法は法律にあてて罪する。○側目は目をそばだつと訓す、おそれ憚りて真向に見ないこと。○積不能平は積る不平に堪えぬ也。○嘉應は高倉帝の時の年號。○横は專横と同義、我儘勝手なること。

承安元年、清盛進其女德子爲女御、遂立爲中宮。治承元年、重盛任左近衛大將、

尋拜内大臣。居小松第。弟宗盛爲右近衛大將。已而進正二位。朝臣舉妬平氏。

【讀譯】 承安元年清盛其の女の德子を進めて女御と爲し遂に立て、中宮と爲す治承元年重盛左近衛大將に任せらる。尋いで内大臣に拜し、小松の第に居る弟宗盛右近衛の大將と爲る已にして正二位に進む。朝臣舉つて平氏を妬む。

【語釋】 ○承安、治承共に高倉帝の時の年號。○女御はニヨゴと讀み皇后の宮中に入りし時先づ女御と稱し後皇后となるが例なりしなり。○小松は京都堀河の西八條の北に在りしと云ふ。○舉はこぞりて、皆。

藤原成親以權大納言爲法皇執事。重盛娶其妹。生子維盛。又娶其女爲子婦。成親子成經娶教盛女。然成親殊希爲大將。而不得居常憤憤。遂圖滅平氏。乃與西光謀。饗藏人源行綱。密語之曰。平氏專恣。子所目也。吾受院勅陰圖之。而未得將率焉。子源子胄也。盍爲我將。成殊功。取顯位。行綱諾之。

【讀方】 藤原成親は權大納言たるを以て法皇の執事と爲る。重盛其の妹を娶りて子維盛を生む又其の女を娶りて子の婦となす。成親の子成經は教盛の女を娶る。然るに、成親殊に大將と爲らん事を希ひて而て得ず居常憤々たり。遂に平氏を滅さん事を圖る、乃ち西光と謀る。藏人源行綱を饗す。密に之を語



りて曰はく「平氏の専恣は子の目する所なり。吾院勅を受けて陰に之を圖る。而れども未だ將率を得ず子は源氏の冑なり。盍ぞ我が將となり殊功を成して顯位を取らざる」と。行綱之を諾す。

【語譯】 ○法皇二こゝでは後白河法皇。○執事二院中の百事を掌る長官又別當ともいふ。○居常二つねに、平生。○憤憤二心の中に憤りのつゝの有様を云ふ。○圖る二計畫すること。○課二相談すること。○藏人二くらんど若はくらうどと讀む。費上に侍して機密の文書や訴訟の事を掌る官。○専恣二ほしいまま、我儘。○院勅二法皇のみことり。○陰ひそかにと訓す。○將卒二將帥に同じ。大將のこと率は帥に同じ。○冑二ちすち即ち後裔のこと。○盍二何ぞ……ざる」と訓じ何ぞと同義。○殊功二すぐれた功。○顯位二世に順れた高き位。

成親遂結檢非違使平康頼。式部大輔藤原章綱。前近江守源成雅等。又欲結法勝寺執行俊寛數飲之酒令姫人侍焉。因乘間説之。會其鹿谷別館計事。宴酣馬逸。坐者驚起。誤仆瓶子。成親曰。平氏仆矣。西光曰。盍梟其首。康頼進曰。梟首檢非違使之任也。取瓶懸之柱上。一坐大笑。盛親因建策曰。祇園祭日京師雜沓。乘此時縱火平氏第。疾攻之。可以逞矣。乃部署諸將所向。未發。

（讀方） 成親遂に檢非違使平康頼・式部大輔藤原章綱・前近江守源成雅等に結び又法勝寺の執行俊

寛に結ばんと欲し、數々之に酒を飲ましめ、姫人を侍せしむ因つて間に乘じて之に説き、其の鹿谷の別館に會して事を計る。宴酣にして馬逸す。座する者驚き立ち、誤りて瓶子を倒す。成親曰く「平氏倒れたり」と。西光曰く「盍ぞ其の首を梟せざる」と。康頼進みて曰く「首を梟するは檢非違使の任なり」と。瓶を取りて之を柱上に懸く。一坐大に笑ふ。成親因て策を建て、曰く、「祇園の祭日には京師雜沓す。此時に乗じて、火を平氏の第に縱ち、疾く之を攻め、以て逞くすべし」と。乃ち諸將の向ふ所を部署し未だ發せず。

【語譯】 ○檢非違使二非法違法を取締る役。○式部大輔二式部省の次官也。○執行二寺の長を云ふ。○姫人二貴人の侍女。腰元。○乘間二機會に因つて。○鹿谷二京都の東北にあり。○瓶子二徳利のこと。○平氏と音相通す。○梟二首を木の上にさらすこと。獄門。○雜沓二雜は聚まる也。沓は重なる也。故に雜沓は人ごみにて混雜するといふ。○逞二思ふ存分にやつけるの意。○部署二分部處置也。手分けすること。

行綱自度。事竟不成。不若自首。乃夜馳赴福原。面清盛告事曰。嚮日新大納言氏。俄要行綱于鹿谷。謀云々。聞法皇亦欲欲臨焉。因法印靜憲練之而止。事已至此。不敢不告。清盛大駭。直歸京師。悉召子弟宗族。就院中奏曰。有凶徒圖



滅<sub>二</sub>臣宗<sub>一</sub>臣且執而鞠之。然事必有源。是以敢奏。法皇失<sub>レ</sub>色。不知<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>答。

【讀方】 行綱自ら度るに「事竟に成らず。自首するに若かず」と。乃ち夜馳せて福原に赴き、清盛に面し事を告げて曰く「嚮の日新大納言氏俄かに行綱を鹿谷に要し、云々せんことを課る。聞く法皇も亦親ら臨みたまはんと欲す、法印靜憲の之を諫めしに因つて止みたまへりと。事已に此に至れり。敢て告げずんばあらず」と。清盛大に駭き直ちに京師に歸り、悉く子弟宗族を召し院中に就て奏して曰く「凶徒あり、臣が宗を滅さんことを圖る。臣、且に執へて之を鞠せんとす。然れども事必ず源あらん。是を以て敢て奏す」と。法皇色を失ひ答へたまふ所を知らず。

【語譯】 ○度る<sub>二</sub>かんがへはかる。みつもりをつける。○竟<sub>二</sub>つひに。しまひには。○自首<sub>二</sub>おのれの罪を自ら陳べ告ぐる。こと。○福原<sub>二</sub>攝津國神戸市に其の古跡あり。○云々<sub>二</sub>しかん。かやうく。○法印<sub>二</sub>僧の位の第一位であつて、僧の官の第一たる僧正に相當する。○靜憲<sub>二</sub>少納言信西子。○宗族<sub>二</sub>一門のこと。○凶徒<sub>二</sub>凶惡なともがら。○鞠<sub>二</sub>罪を推窮する。吟味すること。○法皇をして顔色なからしめた清盛の不敵な態度によつて、當時の清盛の羽振が察せられやう。

清盛使<sub>レ</sub>檢非違使阿部資成縛<sub>二</sub>西光<sub>一</sub>至。痛掠<sub>二</sub>治之<sub>一</sub>得<sub>レ</sub>實。命裂<sub>二</sub>其口<sub>一</sub>。又使人召<sub>二</sub>成親<sub>一</sub>。成親末<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>事覺<sub>一</sub>乃往。比<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>西八條<sub>一</sub>見<sub>二</sub>甲士釋騷<sub>一</sub>心驚。及<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>門<sub>一</sub>。平氏士難波

經遠妹尾兼康、耦進<sub>二</sub>揅之<sub>一</sub>。囚<sub>二</sub>於小室<sub>一</sub>。將<sub>二</sub>待昏殺之<sub>一</sub>。

【讀方】 清盛非御違使阿部資成をして、西光を縛して至らしめ、痛く掠治して實を得、命じて其の口を裂かしめ、又人をして成親を召さしむ成親未だ事の覺はれしを知らず。乃ち往く。西八條に及ぶ比、甲士の釋騷するを見て、心驚く。門に入るに及び平氏の士難波經遠、妹尾兼康、耦進して之を揅し、小室に囚へ將に昏を待つて之を殺さんとす。

【語譯】 ○掠治<sub>二</sub>鞭うちて罪をしらぶること。「掠」は「かすめ取る」といふ意味の時には、音「リヤク」であつて「むちうちつ」といふ意味のときは音「リヤウ」である。○覺<sub>二</sub>「あらはる」と訓じ、露顯すること。○往<sub>二</sub>「ゆく」と訓するが「行」く字とは意味が違ふ。即ち「往」は「來」の反對で「一定の場所に志してゆく」などの場合に「往」「復」「往」「還」等と運用する字であるが「行」の字は「止」の反對で「動いて居る」ことである。○甲士<sub>二</sub>よろひを着たる兵士。鎧武者。○釋騷<sub>二</sub>ひつきりなしに騒ぐこと。○耦進<sub>二</sub>二人相並びて進むこと。主に左右より進み出づるをいふ。○揅<sub>二</sub>手にて頭髮をつかむこと。○囚<sub>二</sub>とらへて逃亡せぬ様にしておくこと。

○成親は行綱が自首した爲めに事の露顯した事は少しも知らなかつた。だから、其の宅に使者が行つた時も「平公(清盛)が延暦寺僧徒の罪を宥したいと思ふて、吾をして後白河法皇に之を請はしめらる



「だけの用事であらう」と言つて出たのだつた。それが途中に於て、鎧武者等の騒いでゐる様を見て些か不安に陥り、門を入るに及び捕へられて始めて事の發覺したのを悟つたのであつた。門を入ると平氏の家臣の難波經遠、妹尾兼康の二人の者が、兩方から立ち並んで進んで來て、成親を手で引き摺み、小さな部屋に押し込め、そして日が暮れるのを待つて之を殺さうとした。

久之重盛至。衆迎而謂之曰、有大事公來何晚。重盛曰是私事。何言大事。入謂清盛曰聞欲殺大納言。願再思之。兒豈以姻戚云爾哉。彼爲名族。受君寵。未可以私怨殺也。往時少納言信西、與行死刑。發惡左府之墳。未二歲信西之墓亦爲藤原信賴所發。善惡之應、殃慶立至。願再思之。出見經遠。兼康讓其亡狀。因戒之曰慎勿使我公乘怒抵悔。乃歸。

（讀方）之を久しうして重盛至る。衆迎へて之に謂つて曰く「大事あり、公の來る何ぞ晚か」と。重盛曰く「是れ私事のみ。何をか大事と言ふ」と。入つて清盛に謂つて曰く「聞く、大納言を殺さんと欲すと。願はくば之を再思せよ。兒豈姻戚を以て爾云はんや。彼は名族たり、君の寵を受く。未だ私怨を以て殺すべからざる也。往時、少納言信西死刑を興行し、惡左府の墳を發けり。未だ二歲ならずして信

西の墓も亦藤原信賴の發く所と爲れり、善惡の應殃慶立ちどころに至る。願はくば之を再思せよ」と。出でて經遠兼康を見て其の亡狀を諷め因て之を戒めて曰く「慎みて我が公をして怒に乗じて悔に抵らしむる勿れ」と。乃ち歸る。

【語譯】 ○再思 思案をしかへる。○姻戚 縁者。重盛との重縁の間なることは既に述べた通りである。源平盛衰記に「重盛、彼の大納言の妹に相具し維盛又髣なり。旁々親しく成つて候へばかく申すとや思召さるらん。一切其の儀は侍らす。世の爲め家の爲に候を思ひて歎き申すなり」とある。○名族 名高い家柄。○私怨 私の怨「公怨」に對す。○往時 むかし。○少納言 此の言葉は前述してあるが職責を説明しておかなかつたから茲に説明しておく。小納言といふのは、内印（天皇御璽）官印（太政官印）を取扱ひ詔勅宣下の事を掌る官で藏人をおかるゝ前までは其の職權が重かつた。○信西 神 Сайと云ふ。藤原通憲の薙髮して後の名。○興行 一旦絶えておつたのを復興して行ふこと。嵯峨帝の時より久しく朝臣を死刑に處することがなかつたのを信西が之を復興せしめた。○發く 叩き振りかへす。○惡左府 藤原賴長のこと「左府」とは「左大臣」のこと。○墳 墓と同義。○善惡之應 善因善果、惡因惡果。即ち善き因あれば善き果あり、惡しき因あれば惡しき果ある應報のこと。○殃慶 殃は禍、慶は福。吉凶と云ふと同じ。○立至 早速來る。○讓め 事の次第を問ひ糺して責むること。○亡狀 亡は「無」と同じ。不埒なること。又無禮なることに解してもよい。



○抵悔||後悔するに至る。「抵る」は「至る」と同訓同義。

清盛怒不<sub>レ</sub>自禁令<sub>レ</sub>經遠兼康拷<sub>レ</sub>掠成親於<sub>レ</sub>是清盛乃被<sub>レ</sub>甲執<sub>レ</sub>長刀而出。召<sub>レ</sub>平貞能<sub>レ</sub>曰<sub>レ</sub>亟戒<sub>レ</sub>將士。今舉朝之人、嫉<sub>レ</sub>我圖<sub>レ</sub>我。蓋謂<sub>レ</sub>我官爵踰<sub>レ</sub>分耳。在昔田村丸微者也。以下平<sub>レ</sub>東夷功超拜<sub>レ</sub>大將。他多<sub>レ</sub>類<sub>レ</sub>此者豈獨淨海淨勤勞非<sub>レ</sub>一日也。保元之變、我宗族大半赴<sub>レ</sub>新院。且重仁親王者、我父所<sub>レ</sub>覆育也。而我思<sub>レ</sub>故院遺詔獨屬<sub>レ</sub>官軍終克<sub>レ</sub>平亂逆。平治之變、信賴義朝之猖獗、吾而自愛、事未<sub>レ</sub>可知。重命輕躬、夷<sub>レ</sub>滅凶黨。以至於收<sub>レ</sub>經宗、惟方等數<sub>レ</sub>冒<sub>レ</sub>大難、無<sub>レ</sub>非爲<sub>レ</sub>官家者。以此言之、官家恩宥、雖<sub>レ</sub>窮子孫可也。今乃輕信<sub>レ</sub>讒言欲<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>族滅。卽母<sub>レ</sub>告者豈不<sub>レ</sub>危殆。異日細人有<sub>レ</sub>再進言則下<sub>レ</sub>宣討<sub>レ</sub>我、目<sub>レ</sub>我爲<sub>レ</sub>賊。不可<sub>レ</sub>悔也。吾欲<sub>レ</sub>先發移<sub>レ</sub>之鳥羽宮、否者請<sub>レ</sub>幸<sub>レ</sub>於此耳。北面奴輩、或且<sub>レ</sub>扞<sub>レ</sub>我、亟戒<sub>レ</sub>將士。

(讀方) 清盛、怒りを自ら禁せず、經遠兼康をして成親を拷掠せしむ。是に於て清盛乃ち甲を被り長刀を執りて出で、平貞能を召して曰く「亟かに將士を戒めよ。今舉朝の人、我を嫉み我を圖る。蓋し我が官爵分に踰えしを謂へるのみ。在昔田村丸は微者なり東夷を平げし功を以て、超えて大將に拜す。

他此に類する者多し豈獨り淨海のみならんや。淨海の勤勞は一日に非ざる也。保元之變、我が宗族大半新院に赴けり。且つ重仁親王は、我が父の覆育したまふ所なり。而して我れ故院の遺詔を思ひて獨り官軍に屬し、終に亂逆を克平せり。平治之變、信賴義朝の猖獗なる、吾にして自愛せば事未だ知るべからず命を重んじ、躬を輕んじ凶黨を夷滅し以て經宗、惟方等を收むるに至れり、數々大難を冒せるは官家の爲めにするに非ざるものなし。此を以て之を言へば、官家の恩宥、子孫窮むと雖も、可なり、今乃ち輕々しく讒言を信じて族滅せんと欲す卽ち告ぐる者なくば豈危殆ならずや。異日細人再び言を進むることあらば、則ち宣を下して我を討ち、我を目して賊と爲さん。悔ゆべからざる也。吾れ先づ發して之れを鳥羽の宮に移さんと欲す、否らすんば此に幸したまはんことを請はんのみ、北面の奴輩、或は且に我を扞がんとす。亟に將士を戒めよ」と。

【語譯】 ○不自禁||自分で我慢し堪へ忍ぶことが出来ぬ、盛衰記に「入道かくしても猶腹に据え兼ねて」とあり。○拷掠||拷問と同義。○被る||着ること。○亟かに||すみやかに、取り急いで。○戒む||用意せしむる。○舉朝の人||朝廷に居る人が皆。○圖我||我を滅ぼさんと企る。○踰分||分限に越ゆる、即ち身分不相應のこと。○在昔||むかし「昔在」とも書く。○田村丸||阪上田村麿。○微者||身分卑しき者。○超拜||順序を飛び越して拜命する。○淨海||清盛の削髮したる後の法名。○新院||崇徳上皇。○重仁||崇徳帝の皇子。○覆育||はぐくみ育てる。○故院||鳥羽法皇。○亂逆||かほん。



反逆。○克平||勝ち平らぐる。○猖厥||宛ら猛獸の狂ひまはる如くわる強きこと。○自愛||自分の身を大切にする。○事未可知||事件の結果がどうなつたか分らぬ。○重命||勅命を重んず。○夷滅||根絶の意味即ち滅ぼしつくす。○凶黨||逆徒信賴義朝等を指す。○經宗惟方||二人は後白河法皇と二條天皇との御仲を悪くした人。○收む||召し捕ふる。○冒||向う見ずに進む。○官家||朝廷。王室の意。○恩宥||恩恵を以て罪を赦す。○窮子孫||子孫のあらん限りをつくす。○族滅||一族を滅ぼし絶やす意。○即||「若し」と同訓同義。○母||「無し」と同訓同義。○危殆||あやふし。○異日||他日。○細人||つまらぬ者。小人。○再進言||又何とか申し上げる。○下宣||院宣を下す。○自我||自分を指して。○不可悔||後悔しても及ばぬ。○鳥羽||京都の南にあり。○幸||御幸。○北面||法皇の武官。○扞||防ぐ。

有主馬盛國者、馳告重盛、重盛大驚、急命駕赴之、入第門。族人皆擐甲鞍馬、旗幟成列將起、重盛烏帽直衣而入、宗盛叩其袖曰、公何以不被甲、重盛睨曰、汝等何以被甲、敵人何在焉、吾爲大臣、大將自非有寇賊犯闕、即不宜被甲也。

(讀方) 主馬盛國といふ者あり。馳て重盛に告ぐ。重盛大に驚き急に駕を命じて之に赴き、第門に入る。族人皆甲を擐き馬に鞍おき、旗幟列を成し將に起たんとす。重盛烏帽直衣にして入る。宗盛其の袖

を叩へて曰く「公、何を以て甲を被らざる」と。重盛睨んで曰く「汝等何を以て甲を被る。敵人何くにあるか。吾れは大臣大將たり。寇賊闕を犯すことあるに非ざるよりは、即ち宜しく甲を被るべからざるなり」と。

【語譯】 主馬盛國||檢非遣使尉(判官)となつてゐた人。○命駕||乗物の仕度をさせる。○第門||第宅の門。○擐甲||鎧を着ること。○鞍馬||馬に鞍をおいて出陣の用意をすること。○旗幟成列||旗や幟を立てならべたる様をいふ。○烏帽||「ゑぼうし」ともいひ「ゑぼし」ともいふ。○直衣||なほし大臣以下參議以上の人の略服にて袍の如き形し、常に着る服である。○叩||「控」と通ずる字で引き止むること。○大臣大將||重盛は時に内大臣で左近衛大將を兼ねてゐた。○寇賊||あだ、かたき。○闕||宮門、又宮城にもいふ。

清盛望見之、遽起表、黑衣而出。數正襟、襟呿甲視。謂重盛曰、吾見西光狀、如成親等、乃其枝葉耳、聞羣小彙進、覬覦不已、而御以輕躁之君、何所不至。我欲且請幸一邊、以待事定。

(讀方) 清盛之を望見して遽かに起つて黑衣を表して出で數々襟を正す。襟呿き甲視ゆ。重盛に謂つて曰く「吾れ西光の狀を見るに、成親等の如きは乃ち其の枝葉のみ。聞羣小彙進し、覬覦已ます而し



て御するに輕躁の君を以てす、何の至らざる所あらん。我れ且く一邊の幸したまはんことを請ひ、以て事の定まるを待たんと欲す。

八〇

(語譯) ○望見||遠くより見ふ。○表黒衣||軍装の上に黒の僧衣をまとふて。○眩く||「開く」。○枝葉枝葉こゝでは法皇が根本にして成親等は其の枝葉のごときものであるとの意。○羣小||多くのつまらぬ小人共。○彙進||類を以て進む。○覬覦||下たる者上の間隙を伺ひ下たるもの、望むまじきものを得んとすること。○御||上にあつて引き廻す。○輕躁之君||輕はずみにして落ち着かぬ一即ち後白河法皇を指す。○何所不至||何を仕出かすか危険千萬である。○且||「しばらく」。當分。で先づ。○一邊||一方の邊地かたほとり。○事定||事の落着すること。

語未畢、重盛泣數行下。久之言曰、重盛熟視尊貌、知家門已屬衰運也。重盛聞之、世有四恩、皇恩爲最、抑我門雖辱、桓武葛原之胤、而降爲人臣、中微不顯、以平將軍之功、而不過國守刑部卿聽、內昇殿、萬入反、唇及至大人、乃陞太政大臣、以兒之不肖、且辱大臣大將宗族、駢植朝廷、田園半於天下、叨恩極矣。爲官家所疾、誰謂不宜、而運命未艾、讒人既獲、宜論罪所當、退陳事由、則公家豈有不霽威、何必草爲也。

## 作文講座

作文は畢竟するに文字に依つて或る思想を表現する一の技術に外ならないのであるから、あまりやかましい理屈よりは先づ第一に練習である。故に作文練習上特に注意すべき二二三の重要事項について述べ、後は直ちに諸君自らの習熟に俟つ事とする。

### 作文についての注意事項

表現の目的、或は題意をよく考へること。先づ表現しやうとする目的物又は出題の作文ならばその問題が何を求めてゐるかをよく考へて見當違ひを



せぬ様に注意しなければならぬ。

例へば「普通選舉」と云ふものに就て説明すべきを見當違ひをして「普選の長所と缺點」と云ふ方面を説いてしまつたり、又「交通」と云ふ問題を捉へていきなり「交通機關の完備を期すべし」と云ふ様な事を書いてしまふなどは、何れも表現すべき目的物或は問題の意味をよく考へないから起る間違ひで充分慎まねばならない事である。

眞理を正直に表現すること。與へられた題目をよく考へるとき、そこには必ず「平凡なる眞理」がある、例へば、夏は暑く、冬は寒く、晝は明るく夜は暗いと云ふ觀念である。この最も平凡なる眞理を捕へて、これに對する自己の思想を如何にして遺憾なく表現するかと云ふ事に努力することは作文上最も大切な事であり、又興味と効果の多いものである。

勿論平凡な眞理を表現せよと云つても之は決して型にはまつたおきまり文句を並べて置けと云ふ意味ではないが、殊更に變つた事を企て、人の意表

に出でやうとする様な事は多くの場合徒勞となり、遊戯となつてその文はまごまりのない、きざな文となつてしまふものであるから、苟も思想を作文の根本として思想表現を以て作文の第一義とする以上は眞理をどこまでも眞理として正直に表現すると云ふ事を忘れることは出来ないのである、眞理は何人にも、一樣の眞理は何人にも一樣の眞理であるが人には思想の深淺があり、同じ一樣な眞理でも之に對する人々の考へ方によつて一樣ではなく書く一人一人に異なる思想によつて種々に骨組まれ、肉づけられて、そこに千差萬別を生じて人の個性が出て來るものである。

個性の表出されたる思想の表現。作文の眞義はあくまでこゝにあらねばならない。

すら／＼とわだかまりなく書け。無理に氣取つた書き方をしたり、殊更に六ヶ敷い故事や熟語を引張り出して得意がつても、それは多くの場合失敗である、裸一貫、自分の力、自分の言葉でその言はんとする處を氣取らず



に何の蟠りもなくすら／＼と書いて置く方がどれ程いゝか分らない、偽らざる自己の凡てを投出して正直に書くのがよい、そして自分の力、自分の言葉の涵養を常に心懸けねばならない。

何よりも先づ筋の立つ様に書くと。何を書いてゐるのかさつぱり筋の立つてゐない文が一番いけない、よいも悪いも先づ筋の立つて後のごとである、筋の立たぬものに、うまいも、まづいもあるものではない、うまく書かうとするよりも、先づ何を書かうかと考へねばならない、自分が書かうとするところが、はつきり分つてゐない様では決して筋の立つた文の出来やう筈がない、作文は筆先よりも、頭の仕事であること云ふ事を忘れてはならぬ。

#### 如何にせば文が巧に書けるか

作文といふ事は、畢竟するに、其人の其題目について抱懐してゐる思想を、文字の力を假りて發表するわざであるといふに過ぎない。貧弱な思想が貧弱な文となつて表はるゝ事は固より當然の事である。而し思想を豊富にする事は必ずしも作文のみの勤めではない。凡百の學科、凡百の經驗、何一つとして吾人の思想を養ふものでない筈はない、地理でも歴史でも數學でも、乃至は往來で見掛ける人も犬も車も馬も、それが皆吾人の思想の一部を構成するものである事は、争ふべからざる事實である。既にそれ等凡てが吾人の思想を養ふものである以上、皆それが作文の原料を爲すものである。何も必ずしも作文の爲めの思想といふ如き特殊の思想がある譯ではない。斯く考ふる時、吾人の思想は、吾人が與へられる作文の題目に對して、吾人の境涯相當といふ見地から言へば、必ずしも貧弱なりと歎すべき程のものではないと言ひ得る筈である。それを條理立て組織立て、自己の其題目に對して喚起し得た思想を、なるべく誤りなく、なるべく徹底するやうに表現し得れば、それが取りも直さず一番うまい文字である。これ以外に決して別に文といふものがある譯ではない。學ぶ所、見る所、聞く所、その凡てによつて常に自己の思想を涵養するに努め、そして題目を與へられた時、其題目にふさはしい思想を頭の中に喚起し整理して、之を條理正しく、最も明かに讀者に傳へるやうに文字の上に發表しようとする事、それが爲めには日頃から思想表現の様式に熟し、思想表現の道具としての文字言語の使ひ方に習熟する事、それが文のうまくなるべき殆ど唯一の手段である。普通文を巧に書くにはどうするか。口語文ならば造作ないが、どうも普通文には困るといふものがあるが、これは如何にも一理ある事だ。何といつても口語文には親しみがあるし、普通文とは比較的



縁が違ひ。而し之を根本的に考へて見れば、普通文も口語文も、要するに國語の二つの文體といふだけの事であつて、其根柢に變りはない。普通文を綴るの困難は、決して英文を綴るの困難、漢文を綴るの困難といふ如きものではない。自分の経験する所からいへば、普通文のうまく書けたといふ事の第一の原因は、いやに四角張ることであり、いやによそ行きになるからである。普通文だからといつて、畢竟日本文の一體たるに過ぎない。何もさう四角張るには及ばぬ、よそ行きを氣取るにも及ばぬ。文語の約束に従つて言ひたい事を書けば、それが普通文である、口語の約束に従つて言ひたい事を書けば、それが口語文である。小學校の五六年からは讀本の大部分は勿論、地理でも歴史でも、理科でも、大抵な教科書は文語體で書かれてゐる。口語法は學ばなくても文語法は必ず習ふ。それがどうして作文となると、文語を以て綴るのにそんなに骨が折れるのか。思ふに其大原因は、各科各別に——地理は地理、歴史は歴史、文法は文法と——考へて學ぶ所にある。そこが根柢の誤である。文語の約束は案外簡單だ。少し注意すれば自然に分る。普通文が上手になる秘訣はあらゆる教科に於て示される所の普通文の形式に慣れる事である。殊更國文法の教ふる所を真によく理解する事である。孤立した知識は其効果が少ない、機械的の暗記は其活用が鈍い。

何を讀めばよいか 作文が巧くなる爲めには何を讀めばよいか。如上の所説に徹底すれば、殊更に作文用として何かを讀まねばならぬといふ譯のものではないといつても分らう。然し特に作文として與へられる題目を假設し、これに對して前人先輩の作つた文章を集めたもの、即ち世の所謂作文書類は、讀んで決して無益なものではない。然しいくらこれ等先人の文を讀んで見ても、それを機械的に暗誦模倣しようとする如き態度を以てする時、其効果は極めて薄く、時には非常な弊害に陥る事すらある。されば諸君は常にそれに依つて自己の思想を涵養し、自己の發表の工夫に資するといふ態度に出でなくてはならない。小説や翻譯物の可否など、斯う考へて來れば別に問題にはならぬ筈である。

それにしては諸君には讀むべき多くの教科書参考書があらう。常に其教科書参考書を理解記憶し、自己の真知識としようとして讀む人——考へ方的に讀む人に取つては、それ等凡てがやがて皆作文の爲めの讀書である。數學を解く頭も、文を作る頭も、頭に二色はない。この意味に於て、自分は作文の爲めの殊更なる讀書といふ事の必要をあまり多く認めぬものである。

長期を短期に切りつめて練習せよ 長い期間とか短い期間とかいふ事も程度問題ではあるが、要するに作文は思想の發表であるからして、せつせつと習練すればする程上手になる事は確かである。同じ思想でも、發表次第で相手によく分る事もあり、分りにくい事もあり、面白く通ずる事もあり、いやに感ずる事もある。毎時一題づつ、七時間やつた効果が、毎日一題づつ、一週間やつた効果に匹敵し、更にそれが毎週一題づつ、七時間やつた効果乃至毎月一題づつ、七ヶ月やつた効果に匹敵するとは考へられなからうけれど、兎に角或期間の緊張した練習は、確かにめきめきと作文力を上達させるだけの効果がある。殊更内容の思想即ち頭の充實してゐる人にして其然るを見るのである。この意味に於て、出来るだけ多く、色々な題目を假設して、文を作つて見るがよいと思ふ。それを如上の心掛でやれば、ひとりでそれが作文練習として役立つばかりでなくて、同時に既得知識即ち頭の整理ともなる譯である。作文の速成上達法 今書いた短期間の緊張練習といふ事は、或意味に於ての速成上達法といふ事にもなる。それ以外に別に速成上達法といふものを知らぬ。而し讀つて考へて見れば、速成上達法如何といふ如き質問は、作文といふものを特殊の藝術とでも認めての上の事である。少なくとも作文は、要するに其題目に對する思想の秩序立つた正しき表現を以て能事終れりとする。結局凡ての學科の答案とさして異なる所はない。作文なるが故に殊更に一種特異な内容がなくてはならぬといふ譯はない。作文なるが故に一種特別な修飾を要するといふ事もない。只一つ、他の諸學科の答案は内容思想の當否不正を主なる採點の標準とし、作文は内容思想の表現の當否巧拙を主なる採點の標準とするとい



ふだけの相違がある。従つて作文の爲めに特殊なる手段があるとすれば、それはやはり表現の手段である。表現法の上達は、やはり他の文の形式に留意する事、よく自ら表現練習を試みる事、結局上來説く所の外に出でない事になる。作文上達の眞諦は、思想の涵養にあり、理解的讀書にあり、頭の整理にあり、發表の練習にある。

作文なるが故に殊更に四角張る事、よそ行きがること、氣取る事、それ等凡ては作文の第二義に墮したものである。秩序正しく、明快に、力づよく、自己が其題目に對して表はさんとする思想を讀者に傳へ得れば、それが作文の上乗なるものである。

言語について 言語の中には、昔使はれてゐて今は滅亡して了つた古語があり、只一時の流行で其後全く絶えて了つた廢語があり、一地方のみに行はれて一般には通用しない方言があり、一般に卑しく下品な言葉と認められてゐる卑語がある。それ等は凡て、何か特別な必要のない限り、作文上には是非避けるべきものである。それから純粹の漢詩文でもなければ滅多に使はぬやうな漢語や、まだ餘り一般的になつてゐない外國語などを使ふのも、多くの場合よろしからざる事である。要は、現代の知識階級に一般に通用してゐる正しい言語を使ふのが作文として動かすべからざる原則である。その爲めには、凡ての教科書やその他の然るべき讀み物から、正しい言語を覚え、なるべく屢々それを活用して見て、その正しい使ひ方に熟するといふの外ない。徒らに語彙だけが豊富になつてゐて、それを確實に理解しないが爲めに、謂はゞ自分の刀で自分の頭を斬るやうな漢語の誤用は世の中にいくらもある。かなり名高い學者の作つた或辭書の卷頭の自序中に

星霜五年の月日を経て

といふ言葉を見掛けた事がある。これは「五年の日月を経て」とか「五年の星霜を経て」とか、「星霜を闊すること五」とかいふべきものである。諸君は吳々も注意して、徒らに小むつかしい言葉を澤山覺へ

込まうといふ如き愚がしい努力を止めて、常に言葉の理解を確實にするやう力める事、いざ作文となつた時には、然か涵養し得て體かにあふなくてはなす得るほんとの自己の語彙の範圍内で遣つておく様にする事、必ず此二事を念としなければならぬ。

文字について 吾々が用ひる文字は漢字と假名との二種である。それで吾々は、作文の要素としてこの二種の文字に習熟するの必要がある。假名の方は僅かに四十八字でこれは尋常一年の一學期位で覚えられて了ふが、漢字に至つては非常な數である。一般に典據的漢字典の如く目されてゐる康熙字典には實に四萬二千七百七十四字あるといふが、まづ現下の日本人が普通に使ふ漢字は凡そ四五千、一萬まではないといふ邊であらう。この四五千乃至一萬を覺えるだけでも仲々容易ならぬ仕事である上に音の上からは漢音吳音の別とか正俗とかいふ面倒があり、形の上からは正俗眞譌及び類字といふ事があり、意義の上にも類字の使ひ分けといふやうな面倒がある。そこへ行くと假名の方は頗る樂であるが、これにも亦假名遣といふものがあつて、相當の面倒はある。従つて諸君は、よしや完全は期し難い迄も、これ等に對する或程度の理解記憶はどうしても持たねばならぬ。

假名遣は發音と綴字との相違で、これには一々それ相當の理由はある事であるが、而し其一字々々について、これ／＼の理由で斯く綴るといふ風に覺えて掛る事は容易でない、結局これは斯う綴る約束だといふ風に覺えて置く外ないのである。例へば、主語の「は」の字であらして「人は」「犬は」「花は」「木は」等と綴る約束だといふ様に。所で、假名遣は大別して二とせられる。即ち一は國語を假名書きにする場合の國語假名遣、一は漢字の音を假名書きであらはす場合の字音假名遣である。作文を書くのには原則として馬鹿にむづかしい漢語はなるべく使はぬ事とし、そしてその漢語はなるべく漢字で書き表はしておく事とすれば、作文だけについて言へば字音假名遣の方は大して必要がないといふ事になる。實際この字音假名遣といふ奴ほど無駄骨の折れるものはない。例へば同じく「こ」と發



音する字でも、**校・行・幸**等日用漢字中約百字内外はカウ、**甲・治・渣**等約十五六字はカフ、**光・廣・宏**等約三十四五字はクワウ、**工・口・孔**等約六十字はコウといふ始末、その他**鶴・鶴・劫**はコフと綴る。同じく「工」の字を旁にしてゐながら**江・肛**等はカウで、**虹・証・紅**等はコウだといふやうな事になつてゐる實際遣り切れたものではない。所が前にいふ如き要領で、なるべく平凡な漢語をなるべく漢字で書き表はすといふ事を作文の大原則の一つとしておけば、こんな面倒なものに頭を痛めなくてもすむ事になる。國語假名遣の方は、これに比すれば遙かに楽だ。イと井とヒ、エとエ、オとワ、ジとヂ、ズとヅ、ハとワ、この六種の使ひ分けがその凡てであるから、この各六種に屬すと普通語の中で、どちらか少い方の一方だけしつかり覚えておく事に依つて、大體は間違なく綴る事が出来る。それは或時間内に無理に覚え込んで仕舞はうとしないでも、國語讀本などを學ぶ時、特別にその點に向つて注意を拂ふやうにし、又それを覚えるに都合よく出来てゐる表——假名遣一覽表を手許に備へておいて、何か一寸したものを書く時にも出来るだけ注意してその表と照し合はせ、當になるべく正確に書き綴る習慣を習ふやうにすれば、知らず識らずの内に正しい書き方に慣れて了ふものである。

漢字音の正俗眞偽及び漢吳の別といふ事も大分やかましい問題で、古正を尊ぶ側からいふと、牧畜はボクキウ、輸入はシュニフと讀むやうな事になる。斯うなると、言語の爲めの文字ではなくて、文字の爲めの言語といふ事になつて、主客全く顛倒して了ふ。さればというて、避暑をヘキシヨと讀んだり、忌憚をキゼンと讀んだりしても困る。結局一般通用語となつて了つてゐるものは、よしや古正でなくとも其一般通用に従つて讀んで置く、正しく讀んで一般に通用するものは勿論正しく讀む、そして漢籍などを讀むに當つてはなるべく嚴格に古正に従ふといふ位にして置く外仕方はあるまい。漢音吳音の別もその通りで、大體世の一般の適を標用準とするといふ外ないのである。但、發音上の事は、作文にはあまり直接の關係はない。作文と不可分離の關係にあるのは寧ろ字形字義の方である。

漢字の字形と意義は、漢語や國語を漢字で書き表はすに當つて、大いに問題となる事である。そして其問題の焦點は、いつも、字の正俗眞偽、字形の類似辨別、同訓異字の使ひ分けといふ三つに係つてゐる。これも古正を尊ぶ人の主張通りに進るとすれば、仲々以て容易ならぬ事ではあるが、作文上の實際問題としては、吾々はそれ程やかましく言ふ必要を認めない。勿論「試」の字の旁に禱を掛けたり、「境」といふ字の旁に「意」にしたりしては困るし、又「送る」と「贈る」、「選む」と「撰む」などは大體から見ても正しく使ひ分ける必要がある。而し「秘密」の「秘」は原義に遠いからどうしても「祕」と書かなくてはならぬとか、「告」の字は、原義上正確に「牛」「口」の二字を結び着けた形にしなれば間違だとかいふ風にやかましく論じ立てるには及ばぬ。吾人の作文について執るべきは社會的正でなければならぬ。即ち現代の社會に於て、文字ある階級の一般の人々に、正しいと認められ、分ると考へられ、そして何等の誤解も不安もなしに通用されてゐる字形を以て正なりと認めるといふ態度が一番至當であると思ふ。一體文字は言語を書き寫す爲めの符牒であるから、現代人が現代文を作製する場合の文字は、現代語の符牒として遺憾なきものである事を第一の原則とすべき筈である。例へば漢文では屢々「陳」の字が「陣」の義に用ひられて居り、「莫」の字が「暮」の義に用ひられてゐるけれども、それは吾々の現代語としてのデンやクレを表はす符牒としては其用を爲さぬものである。前にもいふた如く社會的に正と認められて通用してゐるものを正として、それをしつかり使ひこなせるやうに心掛けるがよいのである。形の類似でも同じ事で例へば「爪」と「瓜」、「末」と「末」などはどこ迄も區別して使ふ必要があるが、「少」と「少」、「友」と「友」などは、其一方が既に廢字である以上、別段殊更に區別する必要はないともいへる。従つて「少」を含んだ「歩」の字を「歩」と書いても差支なからうし、「友」を含んだ「拔」の字を「拔」と書いても大して差支はないといへよう。同訓異字もその通りで、前掲の「送」と「贈」、「選」と「撰」の類はなるべく使ひ分けるにしても、スナハチ



に對して「則」「即」「乃」「輒」「載」などを悉く使ひ分けようとしたり、コレに對して「是」「此」「之」「斯」等を残らず使ひ分けようとする如き苦心は、一般の現代作文としては寧ろ無駄な骨折だといへよう。同じく文字を使ふ上についてでも、そんな事よりも、もつと根柢的な、より大切な事柄がいくらかも吾々の前に横つてゐる筈である。

以上簡單乍ら作文上注意すべき諸點について述べた、これから以下各種の文例を擧げて參考に資することにしたから、充分熟讀頌味して會得せられたい。先づ文例は口語體より擧げることとする。

## 文 例

### 一、口語體 文 例

#### 故 郷

増田 熈

僕の故郷は琵琶湖の北の極にある。三方が山で塞がつてゐて、南の一方だけが湖に面してゐる。丁度袋の様な形になつてゐる。その奥にある、人家六十といふ寒村が僕の故郷である。右手の山一つ越すと美濃國で、左の山を越えると若狭國に出る。又、裏の山を抜けると越前の敦賀

に出る。七本槍の賤が岳は横手に聳えてゐる。この様に國境のはづれである爲に昔あつたといふ關所  
のあとが二つある。

全くの田舎ではあるが、酒屋もあれば豆腐屋もある。汽車も北陸線が通つてゐるし、又汽車でなくとも、湖には日に六回の船便がある。美しい小さな汽船が、朝な夕なに、島がくれに夢のやうに浮かんでゐるのは、晝にも眞似られないだらう。

四方が山に繞らされてゐるけれども、湖に面した方は立派な平野である。近江米と言ふ甘い米の出るのもこの平野からである。その外、麥、豆、麻等の産も少くない。殊に養蠶の盛んなことは縣下第一で、秋の收穫とこの時とは、全く猫の手でも借りたい程に忙がしい。そしてその生糸は集散地長濱に送られる。そこで濱縮緬として世間に出るのである。

又、山からよい杉が澤山に出る。これは筏に仕組まれて持ち出される。河へ釣に出かけると、河上から大きな筏が二町も三町も續いて流れて來るのに逢ふ。この様に山に出て働く人は寒くなると炭焼をする。唐紅の衣を着た山の所々、白く細く煙つてゐるのも、亦詩的趣味がある。

農作をしない人は漁業をする。湖水はさまざまの魚が豊富であるから、漁業の利も亦決して尠くない。土地の人の用ゐる漁獲法は二十種もあらう。その中で特有の法は魷漁法といふのがあつた。これは鯉、鮒等を得る法で、中中うまく出來てゐる。先づ竹箆を以て垣を作り、湖邊から斗狀に出して、水の深さ四尋以内の水面を劃するので、一度の中に入つた魚は再び出られないのである。長さは十間位のは稀で、普通百間あるが、大きいものになると、七八百間に建するものもある。その外網鮒といふ方法もある。地網も用ゐるが、これは夏から秋にかけて鮒とり用ゐる。一番澤山とれるのが鮒で、所謂源五郎鮒だ。亞いで鮒、小鮒等がとれる。

村は豊かで且平和である。風俗は優雅で且質素である。天下にこんな樂天地は尠からう。



## 幼時の追憶

徳富 蘆花

年月が経つと、覚えて居たいと思ふ事は忘れてしまつて、何でもない事ばかり思ひ出す。家の柱が無暗に大きくつて、部屋が薄暗かつたことや、裏の方が馬鹿に廣くて、倉が幾つもあったことや、其の一つの倉には、何時も米俵が山程積んであつた事や、一つの倉には、仁王様の風呂桶の様なのが一杯入つてゐて、其の倉の屋根から、恐しく大きな榎の樹がぬつと頭を出して、夏の頃になると、蟬の聲が宛ら雨の降るやうであつた事や、それから家には若い男女が二三十人も居て、盆の月夜に裏庭で白手拭を冠つて踊つたことや、夏の夜松明ともさして、男の肩に乗つて、小さな蠶を敵いて虫追に行つた事や、節分には大叔又が袴をはきすまして、煎豆を撒いて「福は内、鬼は外」と云つたことや、姥が僕を負つて、何處に行つても「内の坊様の御伶俐といつたら」と自慢したことや、こんなことはうる覚えに覚え居たが、其の頃の生活を順序立てて話せといはれたら、其は出来ぬ。

## 紙 鳶

故茅原華山

私は毎日風さへ吹けば二枚半の紙鳶を揚げた。その頃矢張紙鳶揚で戦争があつた。自分の紙鳶に他人の紙鳶を絡んで落したり、自分の紙鳶の糸で他人の紙鳶の糸を断つて落したりして互に挑戦し葛藤した。私は紙鳶の糸に二丁位のガンギ（ガンギとは小さな及物で自分の紙鳶の糸につけて置いて紙鳶でも優に街の餓鬼大將たる名を恥かしめなかつた。だから私は紙鳶の名手としても優に街の餓鬼大將たる名を恥かしめなかつた。また私は紙鳶揚げも上手であつた。糸の張り具合を看ること、尾の長短を具合すること、紙鳶の風當りを調和することなどにも私は巧みであつた他の小供などが揚げてどうしても揚らない紙鳶や、容易に地を離れぬ紙鳶などが、私の手にかゝるとすう／＼と揚つた——この點に於ては他の小供も竟に私に敬服し、私も亦自ら他の小供を支配してゐた。

私はまたよく紙鳶を夜揚げた。夜間街の彼方の地平線上に銀の鱗片を寄せ聚めたやうな雲が密集し次第に疎らとなつて半天に擴つてゐる時、他の半天では半月が煌々として晝のやうに照り渡つた。そんな夜などは私等は屋上に立つて紙鳶を揚げた。夜の風はそゞろ寒く吹き渡つて来る。綺麗な街の灯は揺れるやうに瞬いて、紙鳶は静かな夜の空気を震動して紙鳶につけた呻（鯨の骨で拵へたもので風に震動して呻り出す）はうん／＼と鳴つた。

夜が更けて行くと街の灯は次第に少なくなつて、婆娑とした月の姿も次第に高く天心を徘徊し、洞然として銅色の光芒を放つて来る。街の上を五位鷲がさびしい聲で鳴いて通り、鷹の翼を打ち交はして、月に照り出された鱗雲の下を飛んで行くのも見えた。私等はその頃まで屋上で紙鳶の糸を手にして夜の悦びに溢れてゐたのであつた。



人生を唯一の時間の連続、延長とのみ考ふる時、吾等は無限の寂寞を感じざるを得ない。かうなつた時、吾等の生活は唯幕を求め幕を追ひて、これまでと同様な時を送り迎へる、機械的な、無味枯淡な、單調な、沈滞した行事に外ならないのだ。

吾々は吾々が年を有することを喜ばねばならない、年の區切りあり年の變りありてこそ、吾等は常に清新の意氣を持つて活々とした生活が送れるのだ。新らしき年によつて褪せた色は新しく彩られ、吾等の生活は新しくせられ、改善せられ向上せられ行くのだ。

此の意味に於て吾等は新しき希望に燃え、新しき年を迎へる事は、それだけ人生の終局に近づくことだ、これは如何にも悲しい事に違ひない。然しこれを唯悲しいとして徒らに悲しむことは、決して吾等のとるべき道ではない、この事を思つて、新しき年を尙有意義に生まんとの信念を強くすることこそ吾等の欲するところなのである。そしてこの悲しみ、淋しみを抱きつゝ、新しき奮闘を祝福せんとする心にこそ、人間の雄々しさ尊さは在るのである。こゝに於て吾等は單に古來の風習慣例としてのみ徒らにお祝ひ氣分にひたつて、新しき年を迎へ、爲めに悔を後年に残すが如き事なきやう心すべきである。

## 入學試験準備の記

小林 重夫

能く切らんと欲すればよく研がねばならぬ。必ず通過せんと欲すればよく備へねばならぬ。然し中には金文字のクロス製のみを書棚にずらりと本屋の様に並べておき、献立のみに汲々として居るものがある。そして唯氣ばかりあせつて、一日千金の日を無爲に過してしまひ、破れてから齒がみする者がある。それであるから、早くから綿密な準備が肝要である。

私の受験準備時代とも云ふべきものは、三箇月に過ぎぬ。二箇月やつて居る中、通過は請合と自信がついたので、志望は二高より外に書かなかつた。

一體競争試験は總點數より取らるゝのであるから、各學課平均にやらねば損である。受験生はよく英語、數學のみを重要視するが、皆平均に、國漢、歴史、地理にも重きを置くべきである。勿論、學課に得意不得意のある者は、十分不得意の學課を補ふべきであるが、偏頗のやり方も、合格は保し難い。私は中學時代にも偏頗な勉強はせず、準備時代には、日課を定めて厳行した。

受験時代の三箇月は頗る長い様だが九十日に過ぎぬ。知らぬ中に七月になつてしまふから、日課を定めて、平等にやるべきである。日課も自ら考へて、腦をあまり疲勞せしめず、有益に一日を過せる様に作る。そして、六月頃に成ると暑くて思ふ様にやれぬから、四月五月の中に踏ん張るのがよい。私は六月から午後の暑い中に睡眠を取つて腦裏の休養を計つた。

## 春

徳富 蘆花

春が来た。垣根に消え残つた雪の間から青い草がそろ／＼芽を出す。遠方の山が追々と霞んで来る。まだうすら寒い空には雲雀が鳴いてゐる。庭の梅の雪とこぼるゝあたりには、物珍しくも鶯の初



音が響く。

その内にだん／＼暖くなる。櫻が咲く、桃が咲く、李が咲く、野にはすみれ、蒲公英、蓮華草、蘇が咲き乱れる。浮れて蝶が舞ひはじめ。意地の悪い蛇も穴を出る。空では雲雀がます／＼勢よく鳴きつれる。それに喚び出される様に、麥がつい／＼と伸びて穂が出る。子供がびいつと吹く麥笛に、春の日は長くなる。家の前の大樺が春の空を摩でて、淡褐色に煙りそめる。雑木林の梢が逸早く、樺はやゝ晩れて、芽を吐きそめる。色々の虫が生れる。水がぬるむ。田圃に蛙が泥聲をあげる。復活の生氣は天地に溢ち溢れるばかりである。

## 運動會

作者 不詳

四月二十五日は我學校の創立紀念日である。今年も例年の通り陸上運動會を行ふことになつた。早朝校庭に行くと、もう準備は悉く整うて、紅白紫黄の無數の彩旗が朝風にひらめいてゐる。開會の八時の鐘が鳴ると、五百の生徒は列を整へて、命令の下るのを待つてゐる。會場の周圍にははや觀衆が潮の如く押し寄せた。鳥打もある。中折もある。眼鏡もある。リボンもある。明るい初夏の太陽が、これらの人を一様に照らす。ヤード競争がすんで、今日の呼びものたる二、三年の團體運動にうつる頃は、廣くとつた來賓席も顔を以て埋められ、會場を十重二十重に包圍した觀衆は、競技の面白さに酔はされてゐた。競技が一つ終ると、拍手の音と歡呼の聲とは相和して校庭をゆるする。中にも面白かつたのは障礙物競走であつた。一方には綱の目に頭を突込んで騒いでゐるかを見ると、一方にはまた梯子の目をくぐりかねて、

蛙の様に両手を突いてゐるものもある。宙に横たへた丸太を越すのも、可なり困難なものやうに見えたが、四年のS君は、梢を傳ふ猿の如く、何の苦もなく越えてしまつた。かくて最後に行れた一年の綱引が終る頃には、日も大分西に傾いてゐた。一日の歡樂もこゝに全く盡きて、觀衆は蜘蛛の子を散らす如く、各その家路に急いだ。

## 郊外散歩

菅野雪城

雀の聲に目を覺して起きて見ると、この二三日降り續いた春雨は名残なく晴れ渡つて、ゐた。森蔭の百姓家からは、朝餉の煙が立ちのぼり、朝の風が冷やかに顔を吹く。誠に何ともいへないよい景色である。

僕は急に郊外を散歩して見たくなつて、朝飯が済むとすぐ家を飛び出した。

雨に洗はれた春の空は綺麗に晴れて、一片の雲も見えぬ。ちよろちよろ流れてゐる小川に架けた土橋を渡つて野路を辿る。菜の花はまだ咲かないが、蝶蝶が二つ三つ飛んで居て、浪の様に青青とした麥畑の中から雲雀が飛び出した。驚いてその方を眺めると、聲ばかり明らかに聞えるが、姿はすぐ見えなくなつてしまふ。

鐵道に沿うて行くと古寺がある。境内はさまで古くはないが、庭はきれいに掃き清められて、あたりにもなく、極めて静かである。

ここを出てまた北へ行き、鐵道の踏切を越えると森がある。見渡すと幾百年を経たかと思はれた松杉、楠等の大木がこんもりと茂つて、梢にひよ鳥が鳴いてゐる。東側に廻ると、そこに石の鳥居が立



つてゐて、その奥に一つの社が見える。多分鎮守の神であらう。

帽を取つて拜んで、その前を北に行くと大川の堤へ行く。堤には若草が萌えて、土筆などを摘む少女の姿もちらほら見える。堤上に立つて見渡すと、川には春の水がゆるく流れて、岸の柳が、野面を渡る春風になよなよとなびく。向うの岸を見渡すと、竹藪に續いて五つ六つの藁葺の屋根が見えて、鶏の聲が長閑に聞える。もう日も少し西に廻つたので、僕は堤の上に腰を下して、このよい景色を眺めながら辨當を開いた。

しばらく川邊を逍遙して、やがてもと来た方に引き返したが、さきの寺のあたりまで来た時は、日はもう西に落ちかかつて、濁聲高く野良歌をうたひながら、家路にかへる農夫の幾つれにか出遇つた我が家の門前に來ると向ふの森に、時を求むる鴉ががやがやとさわいで、村の寺の鐘が野をこへて響いて來た。

### 自然と人生

太田 弘

自然といふと、自分は何時とも人氣のない、森嚴な山や、森や、野等を想像する。けれども造化の神から見たならば、その中に人間を配したといつても、矢張りそれが自然に見えるであらう。人生は自然の一員である。それ故に自然を離れては、人生は瞬時も存在する事は出来ぬけれども、人生を離れても、自然は依然として存在する。

古來人間は自ら萬物の靈長だといつて威張つて居る。併しこの所謂萬物とは、自然に附隨して居るものについて云つた言葉であつて、人智、人力が如何に發達したといつても、到底自然界を征服することも出来ない。自然は實に偉大なものである。海濱の住民が遠大の志を抱き、山間の住民が狭小の心の持主であるのも、之れ皆自然の感化力が人生に及ぶ事の大なるを證明してゐるのではなからうか。人間はいくら力んでも、春を秋にする事は出来ない。又昔から我が國には、富士山と琵琶湖とは同時に一夜のうちに出来たものだといふ説があつた。若し自然の力が薄弱なものであつたならば、こんな事は想像も出来なかつたであらう。一方人間を見るに、彼のピラミットを造るにさへ數萬の人数十年の歲月とを費したではないか。

翻つて、又、星月夜、戸外に出でて大空を仰げば、幾千、幾萬の星群が燦然として輝いてゐるのを見るであらう。あの美しい光、大自然の光の奥に潜む秘密を知らうとして苦んだ人間は、全世界にそも／＼どれ位あつたであらうか。何の障礙物もなく自由な空中を愉快氣に飛で廻る鳥類を見て、己れに翼のないことを悲しんだ人間は、今までにどれ位あつたであらうか。而して、これ等の願が、終に現今の天文学、飛行術等となつて實地された事を思へば、自然は人智の啓發者であつて、人間を今日の文明に導いたものは即ち自然であるといつても、敢て過言ではあるまい。

### 小田原の海

谷崎潤一郎

いつしか窓の向うの石垣山の梢に近く、夕日が次第に沈みかゝつて居た。風がすつかり止んで、沖は死んだやうに静かである。今しがたキラキラして居て空と海とは、一日の強い反射の光を收め、目に快い程の明るさに、青く青く冴を返つて、細かい波の皺までも、一つ一つ數へられさうに見える。東南の地平線をぼかして、水に浸りさうに垂れ下がつた薄雲の裾の、パツと落陽に射られた隙間から



伊豆の大島が、微かに三原山の頂を露はして居る。二三艘の小船を曳いて岸邊へ近寄る漁船の發動機が、夕なぎの波の上に、ぼつ、ぼつ、と眠たげな響きを續け、其の度毎に煙突から吐き出されるくつきりした白い煙が、折々石油臭い匂を二階の廊下まで、忍びやかに漂はせる。多勢の漁師が、えいぐいと関を作つて、鮪を漕ぐ音、地引網を曳く聲、濱は俄かに賑やかになつた。

### 富士山

國民新聞社長 徳富蘇峯

關東の平原も、田は半ば刈り入れて居る。田の畦にある榛の樹も、瘦せて骨ばかりになり、案山子はモ―其笠の上に鴉を止める様になつて居る。百舌鳥さへ何處に往つたか分らないに、唯向ふに富士の山が見ゆる許りで、すべて此の寂寞たる關東の平野が、候ちひき立つて来る。寂寞であればある程神韻が縹渺として、畫家の所謂遠景を描き出して来る。又秋の澄み亘つた空に、相模灘に出て見れば向ふに江ノ島があり、伊豆の端が出て居り、長汀曲浦參差として畫の如くある。モ―是で宜い。併し其上に富士が突兀として聳えて、雪の冕を倒まに、鏡の如き相模灘の洋心に印して居るを見るときには、其景色に位が附いて来る。遠州洋より眺め、或は田子ノ浦から眺め、或は原、吉原、裾野、春風颯々として、黄菜花を吹き渡り、蝶蛾飛んで去るところ、奔り行く汽車の窓から眺める時には、日本の鈍牛的の汽車すら、少し早過ると思ふ。又夜汽車で京都から歸つて、朝ボツカリ目が覺めて御殿場で顔を洗ふときに、富士が額にブツかる程近く見え来るが如き、實に何とも云はれぬ。又桃の花が咲いて、藁屋が五六軒許りある藤澤あたりの村落で、富士の山が松の小陰から、顔を出したる、或は夕立が霽れて多摩川の水が濁りて、雷が何々と鳴りて、汽車の煙が濕うて、若鮎釣る男が、膝まで川の

中に這入りて竿を振つて居るときに、富士が黛の如く出て来る、簾の蔭からでも、大根島の間からでも、薄原の中からでも、凡そ富士の見ゆるところは、渾てのものを化して、――凡を化して美となし板を化して奇となし、陳を化して新となし、總て一種の生命を興へて来る。假に富士が無かつたとすれば、モ―關東の景色は、殆ど平凡取るに足らぬと云つて宜い。

夫で富士の山が、如何に日本人に美と云ふものゝ活ける代表を示すか。我國の詩人なり、畫家なり英雄なり、すべて美のインスピレーションを、此處から持つて來たに相違ない。富士の山は實に日本國民二千年來の大宗師と云つて宜い。日本人が羅馬、希臘の外に美術的特質を有つて居るのは、半は富士山のお蔭といつて宜いかと思ふ。日本の文明史を書くに就いては、殊に日本國民精神上の歴史を書くに就いては、富士山と云ふものは最も注目せねばならぬものと思ふ。

### 月

谷口竹千代

月は昔から數知れぬ人々によつて歌はれた。世界何れの處へ行つても、月に憧れぬ人もなければ、月を愛せぬ人もない。

その月の世界は、神秘幽渺な夜の天空に美しい光を投げてゐる。そしてその光の中には、限りない不思議の微粒が、さゝやかな輝きを見せては、清く澄み渡つた大氣中に躍動してゐる。

月を見る趣は處々によつて違ふであらう。山の中、海の上、花やかな都の空と、照らさるゝ世界は思ふがまゝに彼等特有の美しさを誇つてゐるであらう。けれ共、青白い月光の中にある神秘的微粒な躍動は、月の照る所必ずわが瞳に映る、そして清らかな雰圍氣の中に、右往左往、何かをさゝやいて



ゐるやうな宇宙の靈と共に、神秘的の光りがたつぷりと空間に含まれた時、そこに何とも言へない月夜の美感を催さしむるのである、そして月の照る處必ず此の美感がある。

吾等はその美しい月を静かに眺め入る時、自我を忘れて大宇宙の靈と語り得る。月は實に神秘的な光りを投げてゐる、不思議な力を持つてゐる。幾億萬年の昔から、幾億萬年の末かけて、長い生命を續けてゐる。昔し榮華の歡樂に酔うた人々の頭の上に光の雨をそそいだのも、此の月であつた、幾多の詩人が筆を馳せて得た名詩佳篇も、多くは此の月に對する憧憬の文字であつた。いつしか星移り人去つて、榮華の跡は亡び、詩人の墓は朽ちて了つたが、しかも月のみは昔しも今も變ることなき神秘と美感とを以つて吾等を守つてゐる。

月は吾等の大なる、慰安者である、恩人である。知己である。月は世の中の凡べての事を知つて居るやうである。そして吾等の何んな秘密をも知つてゐるやうである。しかも善人と言はず悪人と言はず、同じ光を以つて等しなみに彼等の心を慰め、何かの教訓を垂れてゐるやうに見える。

吾等はその美しい月を静かに眺め入る時、わが心中の苦しみと悩みとまた喜びとが、吾等の身邊に躍動してゐる不思議の微粒によつて、だん／＼月の彼方に傳へられて行く。そして吾を慰め吾を勵ますやうなさゝやさが、ふた／＼ひ神秘の光の中を流れ流れて來る様に覺えるではないか。月の中には吾等が尊敬してゐる人、崇拜してゐる人、なつかしい人、こひしい人の靈感が絶えず閃いてゐるのではあるまいか、かう観ずる時、吾等はますます／＼月に對する憧憬の念を増さずには居られぬ。

## 平和

寺田八之祐

平和は吾等の痛切に欲するものである。此地球上に生れ出でた者で、一人としてあの優しい羽の所有者である所の鳩を思はぬ者があらうか。我等人類は平和を熱望するのあまり、鳩をして平和の標象たらしめたのである。夢にも見て尙現實に眞の平和を得ざる我々は、此の可憐な鳩をして、死したる泥にて作られたる一種の偶像にしてしまつた。哲學者、賢人は説く、「吾人人類の終局の理想は吾人相互の幸福である。」と。吾等の平和を欲する事此の如く大。然も我等は果して此の理想の様に遠い、なつかしい平和を得る手段を盡して居るか吾人は疑はざるを得ないのである。吾人青年は確く信ず、争ひを経ざる平和は平和たるの價値なしと、人生は戦闘である、戦闘のない所に人生はない。少しの平和と見た休息の間にすら、敵は其の劍を磨く事を止めない。息はつかれる、而して戦闘は再び開始される。嗚呼我等は争闘に於て英雄たるを欲するも、一人として追ひやられたる、黙せる獸となり了るを欲する者があらうか。「人生は夢の如きものである」とは眞に弱者の言である。「夕陽と朝陽とは眞に人生の兩極端を示して居る」と或る文學者が云つたが、戦闘と平和とは正に人生の兩極端である。朝陽を人生の戦闘の始とすれば、夕陽は眞にそれ平和の標象であらう。

しづ／＼と萬象の色を雲間に反射して地平線上に沈み行くあの眞赤な太陽を見る時、吾等は眞に平和の氣分に包まれるのである。嗚呼人や、其青年は朝陽の如く戦闘の始めであり、老年は夕陽の如く平和の終りでありたいものではないか。争ひを経ざる平和は、平和たるの價値がない。人生の壯大なる戦闘と對比する事に依つて益々平和の價値が發揮される。余は斯う斯う信ずる。

## 鐵道界に志望せし所以

作者不詳

私は昨年高等小學校を卒業しました。同窓の友達は或る者は上級の學校に入學し、或る者は會社商



店工場等の實業方面に向ひました。私は家が貧しいからとても學費を出して貰つて上級の學校に行くことは思ひもよらぬことでありました。私の父は或る工場に働いて居ります。私が長男であと二人の妹と一人の弟があります。私には將來兩親を養ひ弟妹の面倒を見てやらねばならぬ責任があります。私は先づ自活の道を求めねばなりません、そして將來の計を樹てねばなりません。

私は學校を卒業をする前から卒業後の方針に就いて／＼考へました。自分はどの方面に向つたらよいか、どんな職業が適當であるか、始めは容易に判斷がつきませんでした。或る人は或る商店へ周旋しやうと云つて呉れました。或る人は父の工場に勤めた方がよいと勸めて呉れました。そこに丁度父の知人に鐵道に出て居る人がありまして、其の人から鐵道の事情をいろ／＼聞きました結果自分も鐵道に就職して見たいと思ひました。それから教習所の規則書を取り寄せて見ますと、私達が今迄餘り知らなかつた種々の特典があることを見出しました。私の心は喜びに滿されて前途に一條の光明を認めたやうに感じました。そこで先づ此の教習所へ入り將來鐵道の一員となつて働きたいと固く決心しました。

鐵道は多くの交通機關の中で最も効用の大きなものであつて、一般公衆に利便を與へ、地方の産業を發達させ、引いては國家の經濟上に裨益し、又國防上から云つても無くてはならぬものであります。此の國家の大動脈のやうな機能を持つた鐵道に戰を奉ずることは男子として實に愉快なことであり、私はあくまでも鐵道のために自分の全力を捧げたいと思ひます。

### 犠牲的精神

明治大學教授 志田 紳 太郎

日本人は犠牲の精神に富み、これがまた國民的精神を形作つてゐる。犠牲の精神とは何等の報酬利益を豫期せず、自己の財産、勞力、身命を差出す意氣である。人類の爲に道を説いて、席の暖まる暇がなかつた孔子や、突の黔むことが出来なかつた墨子や、黎民の爲に外に在ること十三年、三たび家門を過ぎて入らなかつた禹や、これら史上に燦爛たる光を放つてゐる人々は、皆犠牲の精神に富んでゐた。今日の人は、表面だけ犠牲を拂つてゐるやうであるが、多くは裏面で利益を豫期してゐる傾向が見えて來た。我等の祖先である眞の犠牲の精神に富んでゐた人は、國の爲に、家の爲に、また神の爲に、その他何かの爲に、自己を抛擲し、報酬には些しも眼を著けなかつた。

人間も一人で生活してゐる分には、犠牲を拂ふ必要はないが、國體を組織してゐる以上は、是非その精神がなくてはならぬ。國體が大きく、それが危険に遭遇する場合には、犠牲の精神は一層深く、一層強くならなければならぬ。

我が日本はもと一家を基礎として造り上げられた國家で、團體としては最も堅く最も強いものである。我が國民の有する犠牲の精神は、極めて鞏固なものであつて、建國以來數千年の今日に至るまで嘗て國家の體面を汚したことがない。勿論日本が島國で、他國の襲撃を免れ易かつたことも事實ではあるが帝國隆盛の眞の原因は國民の犠牲的精神にあつたのである。

今日我々は祖先の拂つた尊い犠牲の爲めにこの強國の列に入つた日本帝國の國民たる事が出来るのであるが、他面から觀れば、これは極めて重い負擔で、前よりも大きな危険に對して面を向けることになつたのである。在來の日本は對外關係が少く、古くは神功皇后の三韓征伐、元寇、豊臣秀吉の朝鮮征伐近くは清國及び露國との交戦位のもので、他は國內の小競合に過ぎなかつた。然るに、今日位置を進めて世界に對して強國の地位を保つことになつたから、犠牲の形が從來よりも大きくなつた譯である。従つて犠牲の精神も、亦一層強くならねばならぬ。即ち在來の特長を益々發揮するやう



に力むべきである。

## 海上生活

米窪太刀雄

雲行けば船も随ひ、船行けば雲も亦追うて、紫紺の海に銀と咲く潮の花を眺めくらして、今日ははや三十八日の潮路を重ねた  
今や練習船大成丸は、静かに大太平洋の長濤に揺られつつ、二度目の真無風を味つてゐる。つい昨日まで、リギンは風に鳴り、パウは浪に吠え、養由の弓弦を放れた征矢の如く、一時間八漕も駛つたのを想へば、うその様である。

帆船に取つては、風がなくなり、船が進まなくなつた時ほど心細く又みじめな事はなからう。見渡す限、空は一面瑠璃色に染められ、水平線の彼方には、干枯びたやうな雲が坐つてゐる。海的面は、ありとある浪の起伏的行動を封じ去つて、巨砲で削り去られたやうに滑である。風といへば信夫翁の胸毛を揺らす程の力もなく、測程機は引き上げられ、大小三十餘枚の帆は、一齊に、意氣地なくマストにへばりついて、天地の間に見ると見るもの悉く倦厭と懶惰との象徴でないものはない、油を流したやうな海とはこのことであらう。おとなしいといはんよりは、むしろ無氣力である。海はかくの如く恭順の體を示して居るのに、茲に長濤といふ旋毛曲が控へて居る。風が降服し海が變節することよ、いでその儀ならばと、静かに治れる水の層級を、その平衡性能と、下壓偏性とはらつて無理やり上下にゆすり始める。その、絶えぬ微動が薄い水の表面を破らぬ範圍内において、遠く遠く底力強く傳る爲に、二千四百噸の樓船も、搦られる様に、龍骨の下からゆらゆらと持ち上げられる。

見渡せば船の横動に應じて、マストヤードは皆それぞれに勝手氣儘の方面にダンスをやつて居る。控へよと怒鳴つてもマストと長濤との妥協である、いつかな、聞きさうもない。兎に角、長濤は船乗に取つて鬼門である。

無風で相當に苦しめられた船乗は、又更に苦しむべく、茲に「しけ」といふ奴を迎へねばならぬ。さてまさにも因果な事である。

最高帆はもう前の初夜當直に絞られた、風力七を算する西方疾風は梯索に當つて悲鳴を發する。夜目にも著き北太平洋の波浪は、傲然とおそれ氣もなく乗り入れた二千餘噸の一大樓船の、鋭い船首でむざと、二つに切り破られ、佛然としてガンネルを咬む勢物凄く、どしんと舷に當りさま、忽ち、三十尺の高さに撥ねあがる。待ち構へたやうに、意地わるい烈風がそれとばかりに嗾ける。

輕佻な浪はこの尻押のおだてに容易く乗せられて、何の容赦もなく、大きな煙筒のやうな藍青色の長い大きい水柱が水煙を立てて驕然と跳りこむ。リギンに時ならぬ飛沫散り、甲板は忽ち泡だつ海となり、潮水は風下の方へ流れ走る。忽ち頭の上の船橋から、「ゲルン絞れ。」の士官の號令が、凜乎として、夜の沈んだ空氣を顛はせつつ高く響いた。次いで、「絞帆疊め。」の號令が下る。

猿の如く、するすると梯索を傳ふ後から、海洋の男性的素質の極致を見よやとばかりに、礫の様な莽猛な驟雨が沛然と洗ひ落すやうにやつて来る。仰いで驟雨の過ぎ去つた後のヤードを見れば、蒼穹を、燦然と鏤めて居る無数の星屑を、今にも拂ひ落すかのやうにマストの上で雨に濡れて板のやうになつた帆を疊み上げるその早業、その手練、陸に眷戀する人、セイラーを輕視する人に是非見せたい一幅の好畫圖である。



## 我が景慕する偉人

文學博士 芳賀矢一

昔から偉人、豪傑といはれる人物は随分多い。就中豊臣秀吉などは僕の最も好きな人物であつた。併しこの頃は、秀吉が果して景慕するに足る人物であるかに就いて疑を挟むやうになつた。成程秀吉は戦争が上手で、何をも恐れず、あらゆる人に打ち勝つた豪傑であるが、國家社會のために貢献した所の比較的少かつたのは、甚だ物足りなく思ふ。

秀吉と併べ稱せられるのは徳川家康である。家康は智もあり、勇もあり、寛仁大度で、慈悲深く、天下を太平に治めて、民を安穩幸福にすることをつめとて、遂に三百年間無事昌平の代を作つた。この點は秀吉よりはたしかに偉い。しかし彼は利己心のために奔走した様に思はれる。して見るとやはり家康も完全な人物とはいへない。

かう考へると、まあ孔子の様な人が、眞に景慕するに足る人物であらうかと思ふ。孔子は最も深く善惡の別を辨へ、これによりて天下億兆の民を、人の人たる正道に導かうとしたが、亂世で用ゐられなかつたか、遂に弟子を集め、書を著して、その道を百世に傳へた。かういふのでなければ眞の偉人とはいはれぬと思ふ。

## 立志

勝田香月

諸君、諸君は今、人生に於ける最も重大なる時機に際會して居る。今にして將來の大方針を確立し

憤然蹶起して直往邁進萬難を排して運命と闘はざれば、終生を活社會の落伍者として悲嘆と煩悶と不平のうちに悶々として慘澹たる人生の行路病者たらざるを得ないであらう。

先づ、諸君は確たる方向を定めねばならない。「自分は何を爲す可きであるか。如何にしてそれを爲し遂げねばならぬか」を明確に判断す可き時機である。凡そ「志立たざれば、天下成る可きの事無し。百工技藝と雖も未だ志に基かざるものあらず。志立たざれば、蛇無き舟、銜無き馬の如く漂蕩奔逸何の底る所あらんや」との王陽明の言は簡明にして然も素直に諸君の胸底を射るであらう。如何なる大事業も一朝一夕にして成るものではない。如何なる大建築も其の設計圖と基礎工事を無視して建設せらるゝものではない。

ギョテは曰ふ。「予は判然と自分の希望を知る人を尊敬する。何となれば、凡そ世上に存在する苦難の大半は、自分の目的を充分に理會して居らない、と云ふ點に基因するからである。此類の入々は高塔を建設しよう企とするも其の基礎の爲めに力を費すの度は僅かに小舎を建築するが爲に費すの程度に過ぎないのである」と。志を有するか否かは、其の青年が生きてゐるか否かにも等しく重視せねばならない問題である。然かも其の志が堅固で有るか否かは直ちに其の人物の優劣を指示し其の人間の爲さんとする事業の成否を論断する事が出来るのである。

志は大にして高きを要する。努力は歩、又一步の堅實さを以て、新氣は戦はずして既に敵を呑むの概を以て然も隱忍自重、堂々其の貫行に全勢力を傾倒せねばならない。「志を立つるは大にして高きを欲す、小にして低きを欲せず、小にして低ければ小成に安んじ、大にして高ければ大成を期す、凡そ事は上を學んで中に至り、中を學んで下に至るものなり、故に天下一等の人たるを志す可し」と云へる貝原益軒の言も亦、諸君が立志に訓ふるところが多いであらう。

更に又、太田錦城の所謂「人、身を立てんと欲せば宜くし勞苦の事を爲して勞苦の家に入るべし、



若し樂む可き事を爲し樂む可きの家に入らば身則ち亡ぶべし」の覺悟と、ヤングの所謂「人、他人の既に做し得たることは、必らず做し得べし」の大信念とを以つて各自が各自の志望を樹立するとき、既に、諸君は諸君の胸中に充ち溢るゝ希望の歡聲を聴き、其の双腕に漲り來る戰鬪的精神の緊張を感ぜずには居られまい。

諸君が、若し諸君の將來の方針を如何に定む可きか、如何にして其の方針を完成せしむ可きかに就き苦慮す、焦燥し煩悶して居るから、と云つて、歲月は即ち諸君の決斷の日を待つては居ない。機會はいつか遠く去り、青春は夢の間に消えて「無量の感慨今、何の役にか立たむ」の嘆聲を洩らす日も遠からず諸君に襲ひ來るであらう。

「汝は、今や、右にも左にも轉がり易い重大の時期に際會して居るのである。故に、須く志を立て、奮起精進すべきである。若し、立志努力を怠つたならば、必らずや懶惰昏弱にして心思定まらぬ青年と爲るに違ひない。汝、若し一旦、此の境遇に墮すれば、再び奮發勉勵して名を成すに至ると云ふ事は容易の事ではない。予は深く「青年は凡そ其の好む所に従ふ可きで有る」と信じてゐる。予が平生の福運は少年の時將來の方針を確立したことに起因する。汝若し眞摯に志を立て、勇猛邁進苦學精勵すれば、即ち、生涯を通じての基礎こゝに樹立せられ、汝の事業は必ず成就するであらう」とはボックストンが其の子に對する訓戒の一節である。

「君は既に自分で自分の將來の方針を定めねばならぬ年齢に達したではないか、若し、因循姑息何等、決心するところ無くば、自ら掘るところの墓中に呻吟し、其の墓石を轉倒するの力さへ無くなるのであらう。蓋し、人をして容易に種々なる慣習に馴れしむるものは其の人の精神にある。君は。今や、毅然として志を立てる事を學ぶ可きである。若し毅然として志を立て敢然其の遂行に努力する時は、凡庸にして動じ易き君の生涯も確固たる信念のもとに光彩を發揮して、再び、又、枯草が風に吹かれ、此に飛び彼に轉するやうな見苦しい境遇に墮落する事も無からう」とは一少年を戒めて訓へたラメンナルの言である。諸君——と云つても本誌の讀者の多くは皆相當の志を立て現在努力を續けつゝある者が多いと信するが、未だ、將來の方針もあまりに漠として、而して又當面の難局に處して是を如何に展開して行くかに就いても十分の覺悟を有せざるの諸君は此際須く一大決の要が有らうと信ずる。

### 卒業式祝辭

予爵 仲小路 廉

本日諸子が本校處定の學科を修了して、卒業證書を授與せられたることは、洵に慶賀に堪へざる處である。唯今當校長より諸子が將來世に進むべきことに關して教訓されたのであるが、余は尙ほ一言諸子に述べたいと思ふことがある。夫れは何事にあれ、口に言ふことは容易であるが、其の實行が困難を感ずると云ふことである。諸子は本校在學中に種々の事柄を聞かれ、又は學んだであらうが、是等の事柄は一として口に出すことを得るも、併し其の眞髓たる利益は實踐躬行に存するのである。校長が前に懇々述べられたことは、將來に於て必ず實踐躬行し、以て本校に於て學び得た學問技術をして大に活用する處あらしめ、之を大にしては國家の恩義に報い、之を小にしては一身の功績を擧げねばならぬ。

諸子は今後一言一行を慎み、本校を出でて事務及び技術に従事するに際しては、先輩と其の聲譽を共にすることを心掛けねばならぬと共に、諸君一人の言行は、總ての卒業生の名譽又は不名譽となることを思ひ、十分此の點に注意を拂はれんことを望むのである。聊か所感を述べて祝辭と致します。



## 友を追悼する文

山田 美妙

明治何年何月何日、亡某君の友人一同打ち寄つて追悼の會を開き、ねんごろに弔意を表するにあたり、自分も友誼を忝うした一人の名譽として、つゝしんでこゝに一言を述べ、君の尊靈に申し上げようと思ひます。

私は精神と身體と、この二つに對してふたつながら立派な指導を君から得ました。之に加へるに君の如何にも友愛の念に富まれた真情は、いつも終に人を動かして、莫大な教誨を賜はる事となつた。眞に私から云へば、君をば父とも師とも仰いだうへ、猶ほ心には未來一生の親友として、絶えずその感化を受け、名も無い草ながら蘭と鉢を共にして、さいはひに其の薫りに染まらうとの念、只これのみでした。

何事か、君はさほどに思ふわれ／＼を捨て、此の世の外の人となられました。はじめに其の事を聞いた時は眞實と思ふ、いよ／＼確められて魔につかれたやうに茫となり、やゝ我に歸つたところていつか只涙です。

それももう夢の間に一年を過ぎました。あゝ一年の前には君とてもまた白木の位牌にその名をしるして、その友人たちの戀ひこがれる歎きの言葉をこのやうに聞かれようとは思はなかつたでせう。何事も一寸さきの間、しかも不出世の才を抱きながら、みす／＼それを北邙一片の烟と變らせて、渣焉としてあの世の人となられたこと、友人たるわれ／＼の上から見て、如何ほど残りをししか知れず、やがて君の材を要する時代もあるべき社會の上から見て、又如何ほど残りをししか分りません。友人たるわれ／＼でさへ既にこの通りです、況んや血肉の間の妻子眷族のかた／＼の御心もちとなつたら

ば如何でせう。いつまで述べても盡さず、ともすれば斷腸の言葉となるこの苦しい思ひは、こゝで後的一切を無言として、すべて一切其の中へをさめます。

## 鐵道局教習所の模様を友に問ひ合す文

作者 不詳

拜啓その後は御無沙汰いたしました。何卒御ゆるし下さい。暑さもにはかに衰へてもうすつかり秋らしくなりました。これからは文字通り燈火親しむべきの候となることとせう。

貴兄には相變らず御健康にて御勉學の由、欣ばしく存じます。私も幸ひ無事に勤務致して居りますから他事ながら御安心下さい。

願れば小學校時代より常に兄の御庇護と御教訓とにあづかりましたが、昨年三月兄は小學校を了へると同時に鐵道に従事すべくS驛に入り、ついで本年選拔されて東京鐵道局教習所に入りました。私もこの三月高等小學校を卒業すると共に兄の後を逐つてS驛に勤務する様になつたことは偶然とは云へ、何かそこに因縁がある様にさへ思はれます。どうぞ今後も御見捨なく御導き下さい。

現業に従事して半年つくづく自分の淺學菲才を今更の様に感じました。普通學にしる専門的の智識にしる、全く貧弱であることを嘆ぜずには居られません。將來鐵道界に立つてその本務を遺憾なく遂行するためには到底現狀では満足が出来ません。で私も是非教習所に入りたく存じます。高等普通學を修め尙その上に専門的の智識を得るのに尤も捷徑であると考へます。就きましては教習所の模様を出来るだけ詳しく知り度いと存じます。それには兄の御手を煩はさなければなりません。御勉學御多忙中まことに恐れ入りますが、どうぞ教習所について下の様の點を特に御教示下さるならば幸ひ



と存じます。入學の準備、手續、入學後參考となるべきこと、經濟的の方面、その他兄の御感想等なるべく忌弾なく御洩し下さるならば幸甚です。

御忙しいところを勝手の手のみ申上げて甚だ御迷惑と存じますが、兄の御宏量にあまへて右御願ひ申上げます。 草々

## 二、文語體文例

### 人生の春

文學博士 井上哲次郎

げに青年は人生の春なり、青春と云はるゝも亦宜べならずや。春は準備の季節なり、芽生え花開き、夏の繁み秋の實りを待つ。

我等は今まさに此の時期にあるなり。心身發育し、精力また増進して、やがて來ん活動、大成に備ふ若し春にして風雨切りに至り、芽を傷け花を害ひ、然も之を防ぐに由なかりせば、枝葉空疎にして果實また稀ならん。

青春の我等に於ても亦然り、若し内外の障害に負けて心身の發育を害ひ、精力の増進を妨ぐるが如き事あらば、志す所の活動成業共に期す可からず。されば我等はよく發育の時期を善用して憾なき發達を圖らざる可からず。青年の間は自然の生長に任せてさへ、心身共に或る程度までは發育するものなれば、まして確乎たる決心と覺悟とを以て鍛鍊を積み、修養を重ねんには、其の成果の見る可きも

のあるや必せり。然るに若し鍛鍊を怠り、修養を等閑にせば、些細なる障害にも、心萎え身衰へて、成業測り難し。而して將來の成否が實に今日の鍛鍊修養の厚薄に由つて分るゝを思はゞ、誰か感奮興起せざるを得んや。

三春の行樂未だ盡きざるに、濃かなる翠色已に夏の至るを報ず。青年又かくの如し。徒らに青春の歡樂に耽らば、歲月空しく過ぎ、活動の準備未だ成らざるに、身は早くも社會に出でざるべからざるに至らん。其の活動や知るべきのみ。此の時に當りて成業の覺束なきを嘆きて後悔の臍を嚙むとも其の愚や真に及ぶ可からざるなり。

日月運行して自然は歳々に春の至るを報ず。然るに人生の其の一度暮るゝや、永劫再び歸るの期なし。されば青春に當つて將來に備ふる事無くんば、終生之を償ふに由なからん。青春を以て歡樂の期と思ふべからず。歡樂に心浮かれては内に充實せる努力を望む可からず。されば青年は須らく將來の光明に生き、刻々の修養を勵むべし。心を内に養ひて外に奪はるべからず。青年の最も留意すべきは即ちこゝにあり。

### 我が家

故文學士 大町 桂 月

みづから世を避けて門を鎖すとはあらねど、片田舎に住めばおのづから來り訪ふ者稀なり。東京の西郊花園神社の傍、市街をはなれて一字の茅屋立てり。屋外凡そ千坪、前に葡萄棚あり、後に竹林あり。梅や、櫻や、柿や、栗や、松や、檜や、椿や、楓や、無花果、百日紅や、其の間に簇生す。四顧ただ木立を見て人家を見ず。環堵蕭然、何となく我が心に適する所なり。



我年來病軀を抱けり。我が志を伸ばさむには、先づ我が體の健康を復せざるべからず。西郊の地空氣新鮮にして、街上の塵埃至り及ばず。嘗に我が心に適するのみならず、亦我が體に適す。汽車の便を借りて都門より歸り來れば、滿園の綠樹笑つて我を迎ふ。稚兒飛び來りて我が手の風呂敷包に取り籠る。例として土産の菓子あらむことを期するなり。さるにても我が志業未だ緒につかざるに、早くも三人の子の父となりぬるこそ愧づかしけれ。

蒸暑き夏の夕、涼臺を無花果樹下に移して、一家晚餐に團樂すれば、竹葉をよぎて涼氣おのづから盤上に進る。一鉢の飯、母と分ち、妻子と分ち、庭の鶏と分ち、池の鯉と分ち、今一つ、一匹の犬いづも食時を違へず來りてかしこまる。これ近隣の家の飼へるものなり。その主人近頃妻子を残して病死せり。喪家の狗の警思ひ出されて、あはれなるまゝに、残肴を投げ與ふるを常とすれど、貧家の厨魚なきこと多し、馬鈴薯など與ふるに、ただ鼻先にかきたるのみにて、悄然として立ち去るこそ氣の毒なれ。

一泓の池水二間四方に足らざるばかりなれど、清水湧き出でて、田にそゞぐ。もとは朽木中に満ちて、蛙やゐもりの棲所となり、岸には雜草生ひ茂りて見るかげもなかりしが、草を茂り、朽木をとりわけ、ゐもりを捕へ出すこと七八十に及び、水はじめて澄みて鑑みるべくなりぬ。池邊に立て眺むるに、蛙、ゐもりとのみと思ひの外、長さ一尺ばかりの鯉魚ありて泳ぎめぐり、人の足音聞きては穴深くひそみ行く。大兒と中兒とこれを見て興がり、今少し鯉を入れよといふまゝに、十尾入れ、二十尾入れ、三十尾入れ、遂に大小七八十の多きに及び。白や、緋や、黒や、碧水に一種の模様を畫がき或は集り、或は散じ、時には水面に唸鳴し、時には空に躍る。かたばかりの欄干ある獨木橋上に立ちてこれを眺め、これに餌をやること、三兒にとりてはこの上もなき慰なり。

おぼつかないに「とと」と呼びて、鶏に餌を與ふるも亦小兒のなぐさみの一つなり。家の四方

に散在せる鶏、この聲を聞きて、喜んで來り集り、先を争ふうて食ふ。雄三羽、雌七羽ばかりあり。種類も一ならず。就中しやもの雌一羽最も慍悍なり。餌を食ふこと最も甚だしく、近よるものの頭を嘴にてつつくさま、如何にも惡さげにて、他の鶏恐れて敢へて近よらず。されど最も大いに好き卵を生むものはこのしやもなり。

園中兒を喜ばしむるものは、梅の實なり、葡萄なり、柿なり、栗なり、無花果なり、筍なり、難なり、鯉なり、蟬なり、蜻蛉なり。これ等に對して兒は喜ぶ。喜ぶ兒を見ればただうれしきなり。慾もなし、名利の念もなし。沈思して自然に對すれば、はじめはその愛すべきをおぼゆ、終にその敬すべきを覺ゆ。自然の奥には何等かの神異のひそめる如く思はる。而して小兒は人類の中に最も自然に近きものなり。よしや子を持つて未だ親の恩は知らずとも、物のあはれはおのづから知らるべくや。

樂しき我が團樂にも、むほ一朶の愁雲たなびく。そは我が胃腸の病なり。母や齡古稀に近し、憂愁苦楚の中に數十年を送りて、我と相住む事も前後僅かに十餘年に過ぎず。末年我と相住みて小康を得たるは、なほ一年中の小春日和の如きか。然るに我が病弱の身は、その小春日和をさへ時雨の空に變ぜしめむとす。母は常に我が病身なるを氣遣ひ、わが食少きを心配す。「親を思ふ心にまさる親心。」と詠じけむ、世に子の病ばかり親の心を傷ましむるものなし。罪深きかな、抑々不孝の子なるかな。昔は廉頗老いてなほ用ゐられむとして、強ひて健啖せりとかや。それは功名故、我は親故に、強ひて餐を加へ、久しく絶ちをりし中食をさへ物するに至りぬ。食すむやうになりてうれしとて、母の喜ぶさまを見るにつけても、おぼえず涙ぐまれしこと幾度ぞや。



## 田園生活の趣味

文學博士 藤岡作太郎

ただ廣々と淋しかりし田も、春になれば鍬もつ男の影かずかす見えて農事も漸くせはしくなる。春過ぎ夏來れば、苗代の稻は鉢を立てたる様に生え、耕されたる田は漫々水を湛へて、蛙の聲かしましく、植付を促すかと聞ゆ。

五月雨ふりつづく間に田植は終り、何時しか暑さ堪えがたき頃になれば、郊外は一面に緑の田なり穂末におきたる露の玉も涼しく、夕風吹き渡る稻の波も快し。早天つづきて土乾き、ひびわれんとすれば、かしの村、この村、各我が田に水を引かんと争ふ。夜の程あちらこちらに火光の赤く立ち昇るは、蟲送りとして害蟲を狩るなり。

秋風音づれて青田は漸く色付く。やがて黄金の色ゆたかになれば、案山子は弓張り、鳴子は風に鳴りて、群れ來る雀を驚かす。二十十日の厄日も過ぎて、稻はふさふさとよく實のりたるを、刈りもし干しもし、扱きもし、篩ひもし、俵につめて貯ふるまで、農家の忙しさは、犬猫の手も借りたき程なり。辛うじて收穫のこと終れば、はや霜深く雪も降る頃となる。

## 遊ぶべき季節

文學博士 三宅雪嶺

花の季節は遊ぶべき季節、遊ぶべきに遊ぶは猶動むべきに動むるが如し。勤強の必要ならば遊樂も亦た必要、遊樂を輕んずるは、睡眠を輕んずるに同じ。睡眠を貪るは固より不可、眠たくば飽くまで

眠れ棺の中、遊樂を貪る、其弊や言はずして明けし。而も能く覺むる者は能く眠り、能く動むる者は能く遊ぶ。最も勤勉なる者は最も遊樂す。現今英國第一の外科醫トリヴは最も勤勉なるを以て名あり。而して一年の三分一を都外の遊樂に費す。實に動むる者は遊ぶべきべからず。一日に遊ぶべき時間あり、一年に遊ぶべき季節あり。遊ぶべき季節、何を遊ぶべきにけんや。

而も花の季節は櫻花爛漫たるのみに非ず、寒暖正に膚に適し、花なしと雖も尙ほ快とするに足る。花の人を快にするか、氣候の人を快にするか、遽に決し易からず。嚴寒若くは酷暑、櫻花の咲くも人甚だ之を賞せし。陽春四月、花なきも人必ず出遊せん。況や山野緑を呈し、往くとして心魂の舒暢を覺えざる無きをや。花ある處、遊ぶに宜しく、花なき處、亦遊ぶに宜し。呼びて花の季節とする頃唯だ當に遊ぶべし。遊びて然る後大に動むるに堪ふ。

如何に遊ぶべきかは、人皆知るが如し。而して動もすれば之を言ふに惑ふ。されど事や豈に單純ならずや。遊樂と勤勉と相反する者、若し遊ばんと欲せば、平素従事する所の反對に出でんのみ。營々として室内に勤務せんか、須く室外に遊ぶべし。室内に籠るの久しければ、室を離れ、家を離れ市街を離れ、遠く郊野に遊ぶべし。骨牌は勿論、碁將棋、管絃、猶ほ之を避けよ。而も軍人の如く室外に就業するの多きは、室内の遊樂却て妙ならん。決して一に拘るべからず。要は反對せる者を轉換して相ひ救ふに在り。

## 梅花

文學博士 三宅雪嶺

梅花は雪中に在りて最も風致を具ふるもの、天氣快晴、春風麗らかなるに方りては、櫻花の爛漫た



るに若かずとせらるべく、嚴冬未だ去らず、萬木雪に掩はれ、一望たゞ皚白なる時にこそ、此れ獨り  
寒を凌ぎて蕾を持ち、其の花、其の枝、共に清香を放つに適すれ。古より梅花の譬に引かるゝ、總  
じて二様の意義に於てす。其の一は他に魁くすること、其の二は節を守ることなり。百花に魁けて發ら  
き、清香を放ちて凋落するは、人の明かに目睹する所、故に卒先して險を冒かす者ある、則ち引いて  
以て譬へらる。而も其の花や又た能く風雪に堪へ、危難に逢着して毅然屈せざるの節にも比せらる。  
先んじて進むと、忍びて難に堪ふるとは元と一ならず、動もすれば全く反對せるやの觀あるが、之を  
并はすに及びて最も稱すべし。

花を賞し花を詠ずるは何れの國にも之れ有り。而して梅桃若くは蘭の屬を賞するもの、東方に於て  
特に多し。梅は諸邦に之れ有りて、且つ幾許か賞せらるゝとはいへ、枝幹の様材たる、苔蘚の古雅なる  
自ら觀賞に適する如くに栽培加工せるは、實に東方の事にして、凡そ樹木の花にて香氣の馥郁たる此の  
如きは少し。西方に於ては多く香氣ある花を賞するの風あり。若し此の意味よりして梅花の培養に力を  
致すある、頗る強き香氣を發せしめ得しならんに、其の花よりも其の果實に重きを置きしこと、猶ほ  
櫻花に於けりしが如し。西方の人は果實なき草卉及び灌木にてのみ花を賞せんとし、果實ある樹木よ  
りは、主として實を求めんとするの習慣あり。彼のクローカスは一莖に二花に過ぎざるもの、庭園又  
は樹木の下に多く栽培せらるゝが、其の百花に魁けて發らく丈けは、先づ我れの梅の類すとすべきか

梅雨の頃

徳富蘆花

雨降りて止み、止みて又降る。鶉聲と蛙聲と交々雨晴を争ふ。雨の絶間に出て、麥葉まじりの深

泥を踏みつゝ、村を過ぐれば、緑くらき家には人ありて梅子を落し、畑には甘藷を植うる女あり。田  
は大方植ゑられぬ。嫩黄田々、秧猶ほ疎にして水多く、蛙聲四方に滿つ、田より田に落つる水は、音  
も濁りて、こぼ／＼と鳴る。まさに梅雨の頃は水の聲なり。  
川は膏の如き碧瀬満々として、黄なる麥葉一束浮きつ沈みつ漂ひぬ。川邊の蘆稀に穂を抜きたり。  
其の蘆を折り敷いて、鰻鮓を釣る子供あり。  
氣重うして濃かなり。村より出づる煙の濕うて立らも上らず。鶺鴒となりて這へるを見よ。山の藍深  
く緑重うして、滴水を落さば色融けて流れ出するさまを見よ。  
山に鳥の聲あり。  
雨ははら／＼とまた降り出でぬ。

秋の郊外

故 正岡子規

朝日障子にありて、蜻蛉の影あた／＼かなり。世の人は上野淺草とうかるめり。われも出でなんや、  
出でなん。  
鶯横町を出づるに、垣に咲ける紫の小さき花の名も知らぬが、目につく。空忽ち開く。村々の木立  
遠近に連なりて、右には千住の煙突四つ五つ黒き煙をみなぎらし、左は谷中、飛鳥の岡つゞきに天王  
寺の塔聳えたり。見渡すかぎり眉墨ほどの山もなければ、平地の眺めの廣さ、我が國にてはこれほど  
の處外にはあらじと覺ゆ。胸開き氣伸ぶ。  
田は半ば刈らすあり。刈りたるは皆田の縁に竹を組みてそれに掛けたり。我が故郷にては稻の實の



る頃は田の面乾きて水なければ、刈穂は悉く地干にするなり。吾れにはこの掛稻がいと珍らしく感ぜらる。榛の木にかけたるは殊に趣あり。その上より森の梢、塔の九輪など見えたる、更に面白し。道の邊に咲けるは蓼の花ぞ最も多き。その紅の色の老いてはげかゝりたる中に、ところどころ野菊の咲きまじれる様、ふるひつくばかりうれし。

我が足の響に野川の水のちら／＼と動くは、目高の群の驚きて逃ぐるなり、あないとほし。目高を見るは野遊びのめあての一つなるを、なべての人は目高ありとも知らず過ぐめり。世に愛でられぬを思ふにつけて、いよ／＼いとほしさぞ優るなる。

小餅にやあらん、すばやく逃げ隠れたる、憎し。たま／＼蛭の浮きたるはなくもがな。むかうより人力車來れり。見れば、男一人乗りて前に藁づとを置きたる、その端より黄なる實漏れて見ゆるは密柑か金柑か。一足町を離るれば、見るもの皆雅なり。

柿の樹に柿の残りたるはあちこちにあり。一つくひたし。烏瓜の蔓に赤き實の一つだに残りたるを見ず。

目高多き小川を過ぎ、諏訪神社の茶店に腰を休む。日傾き風俄かに寒くなりたれば、興盡きて出る

### 讀書の樂

故文學士 大町桂月

伴侶ありて始めて得るの快樂は、常に得べからず、又人に迷惑をかくることあり。碁、將棋、玉突などの如し。讀書に至りては、いついかなる處にても、獨り之を樂しむことを得べし。其の樂いよ／＼窮めて、いよ／＼盡さず。嗚呼、人、書を讀みて知識を養ひ、情を養ひ、出でて社會につくし、

入りてまた書を友とし、書に慰藉を求むれば、其人の一生は如何に樂しかるべき。夜雨一燈しづかに書に對し、心澄み、氣昂りて、一身書と共に融化して、われ我れる忘ることあり。知らず世上の名奔利走の徒、此樂を解せりや否や。

### 雪

作者不詳

六花粉々として地上に白綿を敷き渡したるが如き光景はげに情趣を解する人は如何に見るならん。白雪皚々たる富士山嶺は古人も是を偉なりと稱したり。其の山嶺より麓にかけての一體の白雪を見れば心氣一轉してうたゝ快心の笑を催すを覺ゆ。其の景男性的なればなり。

今年も早數日を餘すのみ。而して未だ雪の降りたるを見ず。古人曰く「雪の多少は其の年の幸不幸を定む」と、誠ならずといふを得んや。

吾等學途半にある者も雪の如き純白なる精神を以て世の艱難辛苦に向はゞ其の報や來るべきこと必せり。世人それシベリヤの廣野に矛を取りつゝある我が忠勇なる兵士を思はざるか。

### 歲暮の感

加藤拙堂

今年も亦暮れぬ。誰か歲晩に臨みて多少の感慨なからむ。此の感慨は常に追想に伴ふ。過去三百六十五日を追想して事の志と違ふを悲むも人情なれば、半生の事業を回顧して砂上の樓閣何の爲すなき



を嘲つも亦人情なり。漫に追懐を以て愚人の行爲と做す勿れ。追懐も何の功なきが如しと雖も、吾等は之れによつて反省しつゝ、過去の一切を整理して將來の覺悟を定めんとす。蓋し追懐は發展の第一歩にして、之れあるが故に立脚殊に鞏きを覺ゆ。追想せよ。回顧せよ。そこに悔恨の涙あつて汝の前途を洗滌せん。されど徒らに追ふべからざるの過去に煩悶して、來るべき新天地に想到せざるものは怯者の釋言、吾等の斷じて取らざる所。吾等は追懐によつて過去を整理し、其の繁累を去り、扮擾を解きて、向上の道途に利便ならしめんとするのみ。向上の心、一たび沮まば、生きながら墓中に埋れ去らん。吾等は尙生きたり、更に生きざるべからず。生くるものは之れをして意義あらしめざるべからず。吾等の苦悶は、如何にして吾等の生存を意義あらしむるかにあり。それが爲に追想し、悔恨す、偶ま以て發展の途を助くる所以たらんのみ。

年々歳々、希望を以て迎へ、歳々年々、追懐を以て送る。送迎日日これありと雖も、逝くものは返らずして來るべき年には限りあり。人生五十、百年の憂を懷き、しかも夢消醉散徒らに我が老を忘る。「年月はかへらぬものを我ながら驚かぬ身ぞ驚かれぬる。」驚かぬ身と驚く所に覺醒あり、年窮歳盡、吾等を覺醒すること些少にあらず。送舊迎新は人生の刺戟劑たり、吾等の興奮料たり。

## 運 動

作者 不詳

病氣の苦しくしてつらきものなることは人の能く知るところなり。たとひ病氣にかからずとも、身體強健ならざれば心地よからず、元氣振はず、隨つて如何なる美事をも成就する事能はざるなり。これに反して、身體強健なれば、健全なる精神は健全なる身體に宿るといへるが如く、精神もあつて

ら爽快となりて、元氣を増し、外目には困難と見ゆることも、自らたやすく思ひて、立派に成し遂ぐるに至るものなり。

而して身體の健康なることを欲するものは運動を怠るべからず。朝早く起きて戶外を散歩し、新鮮なる空氣を呼吸すれば、心神の爽快なることいはむ方なし。柔道、擊劍、短艇、野球、庭球等は元氣を増し、筋肉を強壯にす。また一日若しくは數日の旅行を試みるも亦大いに身體を健康ならしむべしこれに反して、終日室内にのみ起臥する者は、顔色青ざめ身體虛弱となりて遂に病に罹るに至る。

されど運動は適度なるを要す。過ぎたるはなほ及ばざるが如しといへるが如く、運動も過激に失する時は却つて健康に害あり。又運動に熱中して、學業をおろそかにするが如きことなきやう固く注意せざるべからず。運動は身體を壯健にして、學業を修むるに便あらしめ、且は長じて社會に立ち、その學ぶ所を實際に施すに便あらしめむが爲のものなれば、飽くまで學問は本にして、運動は末なり末のために本をおろそかにすべき理あるべからず。

## 我國の美風

文學博士 井上 圓 了

我が國は之を國土の上に望むも、國家の上に考ふるも、人心の中に尋ぬるも、理想特殊の靈氣の開發によりて、一種神聖の國家をなせるものにして、即ち神聖なる皇室と大和魂と相映じ、心界の靈と物質の美と相映じ、以て神聖なる忠孝の至誠を煥發し、是によりて一系連綿、天壤無窮の皇運國體を護持するは、實に我が國の特有の美風なり。而してこの美風たるや、建國の初、神代雲深き處より、源泉滾滾として流れ來り、以て萬古不變の國體を維持するの精神となれり。嗚呼また盛んならずや。



夫れ我が君主は先天的君主なり。我が忠孝は先天的忠孝なり。忠孝一致、君民同家は我が國の特有性なり。之を先天的の原形といふ。此の原形を實現する材質は、之を國の内外に取り、内においては四時氣候の溫和なる山川風光の清麗なる、實に我が特性を誘發し、又一種靈妙の美術の發達するありて、よくこの性を養成せり。外においては儒佛の教義漸く入り來り、その旨また特有性に適合して、其の原形を充實せしめ、此を以て、内にありては未だ一人の天位を覬覦するものなく、外にありては未だ嘗て國體の面目を汚したることあらず。千秋萬古巍然として理想の中天に獨立を聳やかし、三千年來神靈の雲氣今なほ靄然として、君臣上下の間に浮ぶを見る。豈東海の神國ならずや。

## 大日本帝國

文學博士 佐々政一

日本帝國は、北樺太より南臺灣に至るまで、千二百餘里に連亘せり。随つて寒暑の稍甚だしき地もなきにあらねど、概して溫帶中和の氣候にて、春の花、秋の紅葉は更なり、驟雨一過しては、月光洗ふが如く、積雪晴れ來つては一望の銀世界、四季とりどりの眺は窓の内よりも絶えずこれを見るを得るなり。況やその山川は頗る秀麗、その國土は頗る豊饒、天恵に富めることは、世界のいづれの國に比しても、決して劣るところあらざるなり。

さればこの美しく豊かなる風土に化せられて、自ら淳良なる風俗をなせり。親はこの豊なる海山の産物を其の子と共に味はむとし、子は此の美しき花紅葉を父母と共に眺めむとす。親の慈愛も、子の孝行も、兄弟、夫婦の情愛も、おのづから其の間に養はれて、一家の睦しきこと、これ亦全世界に比類を見ざるなり。

この睦しき家より出でたる弟妹が新しき家を立つるや、其の新しき別家の人人は、兄の家を本家としてこれに敬事し、本家の人人はまた別家の人人を子弟としてこれを受撫す。別家より更に別家を出し、其の支流漸く廣くして、日本全國に及びたるものを我が日本國民とす。

畏くも萬世一系の皇室は、日本全國の總本家にして、全國の千萬家、相寄り、相集りて、これを敬重し、これに奉仕するもの、即ち我が國家なり。皇室の我等臣民に臨み給ふこと、恰も慈親の赤子に於けるが如く、我等臣民の皇室を慕ひ奉ることも亦孝子の父母に對する如きものあるは、畢竟これがためなり。嗚呼、この帝國に生れ、この皇室を戴ける我等臣民は、世界の最も幸福なるものといふべきなり。

先づ第一に日本國の山河の美しさと、國土の豊饒な事を述べ、次に風俗の淳良なる事を記し更に日本國民は一家族から生れ出た民である事を説いて、最後に、皇室はこの多くの家族の總本家にましまして、天皇と臣民とは全く親子の關係を兼ねてゐる。ことを説いてゐる文は平易であるけれど、我が國體の精華を説いて餘す所がない。

## 歐洲戰亂所感

國民新聞社長 徳富蘇峯

世界的大戰争の結果に就きては、神にあらざれば知る能はず。或は神と雖も知る能はざるものあらん。されど少くとも一方に於て獨逸、他方に於て英國は、如何に決闘して互に相傷くとも、其の第一流國たる位置は失ふことなかる可し。

若し英國にして此の戦争を良薬として警醒せんか。眠れる獅子が覺の來りたるなり。英國はこれが



爲に寧ろ國勢振起し來るや殆ど疑を容れず。而して獨逸に至りては、勝てば愈勝に乗じて優勢になり敗るれば其の屈辱を雪がん爲に百倍の努力を做す。彼は愛すべき國民たらざるも、畏るべき國民たるを失はざるなり。若し夫れ露國に關しては世界の議論一ならざるなり。されども少くも露國は大國なり。此の戦争の爲に、假令獨逸に失ふ所ありとも、恐らくは、埃、土兩國に取る所あるべし。假令取る所なしとすとも、尙世界の國たるを失はざるなり。更に吾人をして安眠する能はざらしむるは、北米合衆國なり。天は恰も米國を社せんが爲に此の世界的戦争を仕組みたるに似たり。今日においては、敵も味方も皆米國を以て軍需品の問屋となしつつあり。乃ち世界の金貨は雨のごとく米國に向つて降下しつつあるなり。列強皆疲れ、米國獨り新銳の氣を振ふ。吾人は戦後に於ける米國の鼻息の頗る荒き事を今日より豫測せざらんと欲するも能はざるなり。戦後に於ける世界の國際政局が如何なる變動を來すかは、むしろ未知の事とせん。されど一方に於ては世界の強國たる獨逸を敵として、他方に於ては世界の強國たる米國を我が近隣に控ふ。知らず、我が日本帝國は此の危局に處して如何の準備がある。吾人は百年の大計は愚か三年の準備さへも、即ち於ては覺束なしと思ふなり。而して廣く世間を見渡せば、太平の情氣は滿滿として社會に充溢しつゝあり。強國の名ありて強國の實なく強國の敵ありて強國の備なし。嗚呼、危いかな。

## 日本刀

坂田 警軒

日本刀の利は萬國に赫然たり。然れども儒夫これを執れば、嬰兒之れに狎れ、弱將これを執れば、敵國之を輕んじ、庸君これを執れば、夷狄之を侮る。而して亂臣以て其の君を弑するを得、賊子以て其の父を殺すを得。執ること其の人に非ずんば、果して不可なるか。然らば則ち刀を恃むは人を恃むに

如かず、日本刀を磨くは日本膽を磨くに如かざるなり。今や人をこれ持まず、膽をこれ持まず、是非榮辱來り襲へども、而も拒ぐことを知らず、聲色貨利來り侵せども、而も防ぐことを知らず、揚々然として三尺の秋水を横たふ。一庸夫前に當れば、強夫は則ち悍然として之に抗し、儒夫は則ち戰慄して之を避く。それ何ぞ敵國を問はん、それ何ぞ夷狄を問はん。

所謂、日本膽とは何ぞ。曰く仁、曰く義、曰く忠、曰く孝なり。夫れ仁、義、忠、孝は人の固有にして而して列聖の世道人心を千萬年に維持せられし所以なり。善く之を磨けば則ち其の光芒威靈、姦賊の心を寒からしめて而して猩膺の侮を禦ぐに足れり。嗚呼、是の人や眞に日本刀を執る可きなり。故に藤原氏は能く入鹿を誅し、北條氏は能く蒙古を攘ひ、名和、楠の諸將は能く王室を復せり。これ豈刀を恃まずして、而して人を恃み、刀を磨かずして、而して膽を磨きし效にあらずや。然らずんば赫々たる日本刀は安んぞ亂臣賊子の用と爲らざるを知らんや。

## 武士道

文學博士 中島 力造

武士道は封建制度によりて發達したるものなれども、其の淵源は遠く上代にはじまれり。而して名は武士道といふと雖も、實は武士の専有にあらずして、四民の中にも行はれたる道德なり。されば封建の制廢せられたる今日においても武士道は依然として現存し、我が國民道德の一現象として世界各國に其の美を稱せらる。

武士道の内容は如何なるものなりやと問ふに、一言以てこれを蔽へば、忠君愛國を以てその精神とするものなり。尤も仔細にこれを分拆すれば、忠孝、節義、武勇、廉恥は勿論、その他禮儀、慈悲



正直、度量等、種々の徳目を包含す。然れども廣く全般に涉りて、その一貫する所の一大精神を索むるときは、畢竟忠君愛國に歸着すること、疑ふべくもあらず。これを武士道の初期に於ける發達に鑑みれば、當時の武臣が皇室を護衛するを以てその第一義となせるを見るべし。而して之と同時に對外思想も亦頗る盛んなりしかば、自ら愛國の精神も涵養せられたり。即ち内に在りては皇室を保護し、外に對しては國家の防禦を以て自ら任ずるもの、これ武士道の神髓骨子なり。然るに忠君と愛國とは我が國體においては一にして二ならざれば、この兩者は彼此合體して、我が武士道の根柢をなせるものといふべし。

武家時代にありては、政事の運用は幕府の掌る所となりしかば、武士は皇室に對するよりも直接幕府に對して忠勤を勵むることとなれり。更に降つては、各地に豪族起り、英雄割據の状態を呈せしより、其の郎黨は皆自己の主君なる豪族に對しての忠義を盡くすこととなれり。斯くて武士道は封建制度の下に顯著なる發達を遂げたるに拘らず、其の形式においては初期の武士道と異なるものあるに至れり。然れども武家時代の武士道は只その形式に於て一變したるに止り、その内容においては敢へて本來の性質を變更したるにあらず。即ち此の時代に至りて忠君と云へば、その直接仕ふる所の主君に對するものにして、愛國といふは主君の領地に對するの謂に外ならず。而してその變態は、明治維新と共に再びその形式を復舊し、忠君は即ち天皇に對して盡すべきもの、愛國は即ち日本全體に對してすべきものとなれり。

武士道は唯盲目的に武勇をあらはすを以て能事了れりとなすものにあらず。一定の主義方針によりて、武を勵み、勇をあらはすを以て目的とす。而してその主義方針たるや、忠君愛國を措いて他にこれを索むべからず。若し夫れ忠君愛國の本義に背きたる行動あらんか、武士としての面目は業に已に地に墜ちたるなり。かゝる場合に處しては、切腹に由りて自己の殄滅を圖るが封建時代の常習なりき

尙又君國の爲に一大事の起りたる時は、生命を賭してその危害の排除につとむるは、古今を通じて武士道の精神たり。封建時代に君の馬前に討死するを以て無上の光榮と心得しもの即ち是なり。然れども徒らに身命を輕んじ、世に所謂犬死をなすは、武士道の本義を距ること遠し。平時に在りては、自愛自重して一身を泰山の重きに比すると共に、棄つべき時に一命を惜しまざること、鴻毛の輕さが如くなる、之を武士道の真義となす。

之を要するに、武士道の價値は、その單純なる實行的精神にあり。教義としては何等深遠なる意義を有せざれど、其の實行に關しては、秋霜烈日の概あるもの、これ我が武士道の特色にして、同時にまたその長所たり。日本國民が一旦緩急あるに際して、上下一致、義勇公に奉ずるの壯烈は、その武士道に負ふ所極めて大いなるを思はざるべからず。

## 愛 國 心

作 者 不 詳

如何なる士如何なる地と雖も家あれば家族あり國あれば國民あり是に於てか家族に愛家心あり國家に愛國心あるは必然の結果なり。殊に我國の如き家族制度の國に於ては、愛家心と共に愛國心の濃厚なるは勿論なり、然れども一家に愛家心なく一國に愛國心なくんば、其の家其の國は滅亡せざる迄も衰微すべきは疑ふべき餘地を残さず。試みに西洋史を見よ波蘭土に於ける、亞弗利加に於ける之れ皆愛國心の缺乏によらずんば非ず。彼等には自己以外に何者をも有せざりしなり愛國心と利己心とは相容れざること氷炭相容れざるが如し。之に反し我國の元寇に於ける近くは日清日露の兩役に於ける之れ皆愛國心の凝結に外ならず今や歐洲の天地は慘たる戰場と化しつゝあり而して彼等の行動は吾人を



して轉た恐怖を覺えしむ即ち愛國心は我國の專賣物に非ず是に於てか吾人は吾々の誇りとする愛國心を益々修養せざるべからざるを覺ゆ。

### 商人の覺悟

于野 澁澤榮一

凡そ人としてその處世の本旨を忘れ、非道を行ひても私利私慾を充さんとし、或は權勢に媚び諂ひても其の身の榮達を圖らんとするは、これ實に人間行爲の標準を無視したるものにして、斯の如きは決して其の身、其の地位を、永遠に維持する所以の道にあらず。苟も世に處し身を立てんと志さば、其の職業の何たるを問はず、身分の如何を顧みず、終始自力を本位として、須臾も道に背かざることに意を専らにし、然る後に専ら富み且榮ゆるの計を怠らずして、始めて直に意義あり、價値ある人間の生活と云ふことを得。是に於て武士道は移して以て直に實業道とすべきなり。日本人は飽く迄大和魂の權化たる武士道を以て立たざるべからず。商業にまれ、工業にまれ、此の心を以て心となさば、戰爭に於て日本が常に世界の優位を占めつゝある如く、商工業に於ても亦世界に雄を競ふに至るべし。實業家は宜しく舊來の惡思想を一洗し去り、新時代の活舞臺に於て、古武士が戰場に馳驅したるが如き心掛を以て、大いに世界に活躍せざるべからず。吾人は武士道と實業とは何處までも一致せざるべからざるものにして、また一致し得べきものなることを主張するものなり。

### 國の富強と海運

故侯爵 大隈重信

明治政府は開國進取を以て國是とし、藩藩共に、幕府諸藩の所有船を集め、之を民間に貸し下げて汽船會社を起さしむ。即ち日本郵便蒸氣會社にして、わが國における航洋汽船會社の嚆矢なりき。この會社は、内部の紛擾と外船の競争との爲に、久しからずして瓦解せしが、土佐の岩崎彌太郎、別に三菱會社を起して、海運の業を營みしに、功績頗る揚り、社運隆盛として榮えたり。後、共同運輸會社起りて、それと對抗し、頑固して相下らざりしが、數年ならずして、競争の弊に堪へず、合併して日本郵船會社と稱せり。これと前後して、又大阪商船會社の設立あり。二社共に今盛に遭運に従事せり。明治における海運發達の急速なるは、眞に人をして驚倒せしむ。日露戰爭の起れる明治三十七年の海運力を以て、その元年のに比するに、噸數五十四倍餘の増加を見たりといへば、その後の進歩も亦想見するに足れり。今やわが汽船は東南南洋より、進んで歐米に航路を開き、煙を噴き潮を蹴て、天下を横行し、世界の大汽船會社と對立して、堂堂として優等の位置を占むるに至れり。地理を以て比すれば、わが國は恰も東洋の英國なり、英國は海運を以て邦家の生命とし、これに倚つて立ち、これに依つて強盛なるに、われはいまだその道程のなかばにも達せず、前途は遠く希望は大いなり。勉めざるべけんや。

獨逸の現皇帝嘗て宣はく、「吾人の將來は水上に在り」と。願ふに今後列國の平和的爭鬪は陸上にあらずして水上に在らん。而して海運の消長が國家の盛衰、興亡に關するは、古代のヴェニス、ジェノアに驗し、中古の葡、西、蘭に證し、今の英、米、獨、佛に徴して明らかなり。然らば則ち、天賦の海國たるわが國は、今より益海國的經營を完備し、以て世界の大海運國たらんことを期せざるべからず。富國強兵の如きは自ら成るべきのみ。



## 我が水産業の前途

村田 保

濃濃として鏡奩を開くの湖水、溶溶として珠玉を碎ける溪名は、共に耳語して曰く、「吾は尙未だ爾が研究せざる科學的材料を有せり。」と。煙波萬里長空に連なれる滄海は、鞆鞆として四周の岸邊を打ちつつ疾呼して曰く、「來れ、吾は尙未だ爾が知り得ざる無盡の遺利を藏せり。」と。然り、我が國は古來豊富無盡の寶庫を有する水産國なり。抑々海岸に堆積して山狀を成せる魚族藻類の如きも、約五千萬の國民を生養するに足るのみならず、尙且餘剩ありて、海外に輸出するもの頗る多きにあらずや。四時北極に於ける六花のその如く、皎皎と結晶せる鹽も、國民の多數が常食とする鹽魚、漬物の爲に殆ど土芥の如く之を消費せらるるのみならず、工業上に使用する所の容量も亦實に莫大なるものあるにあらずや。されば其の實數實量に至つては、果して幾許なるかを測知すべからざるなり。すなはち、我が島帝國水産業の前途も豈亦洋洋として多望なるにあらずや。

## 鐵道と通信

作者 不詳

鐵道と通信とは極めて密接なる關係を有す。今日の如く鐵道の發達を見たるは、一に通信機關の發明されしに依ると稱するも過言には非ざるべし。若し鐵道に通信機關無かりせば決して今日の如き發達を見得ざりしこと明かなり。

鐵道は其の機能として敏速を要するものにして、運輸運轉に關する種々の打合せ及指令等は最も迅速ならざるべからず、然らずんば鐵道本來の目的を達することを得ざるなり。故に現今通信機關は鐵

道敷設に伴ふ必須條件として設備されつゝあるは、宛も影の形に添へるが如くなり。嘗に通信設備を備ふるに止らず鐵道の改良に伴ひて通信設備も亦改善されつゝあり、即ち鐵道と通信の關係が相對的にして決して離るべからざるものなるが故なり。

假に鐵道に通信設備なきものとせんか、如何に強大なる動力を用ひ、如何に完全なる線路を敷設し如何に理想的の車輛を使用するも、決して輸送能力を増進することなく、寧ろ鐵道創始時代のそれと些の異なる處非ざるべし。嘗に輸送力を減殺するのみならず、運轉上の危険を招來し、従つて利用を減退し、ひいては鐵道の營業を不振ならしむるに至るべし。

我が國有鐵道に於ては夙に通信の重要なことを認め、輸送機關の改良と同時に他方通信設備の進歩改善に専念しつゝあり。殊に各鐵道局教習所に於て特に電信科なる一科を設け、多數の優秀なる通信従事員を養成しつゝあるは鐵道に於て通信の重要視せらるゝ所以なり。

## 海

早大教授 内ヶ崎 作三郎  
文學士

予は幼時海を恐れ、常に船暈を覺えたり六年前に浦鹽に航せし際は三十餘時間殆んど絶食の態なりしが、其の後英國海峽は無事に通航するを得るに至りぬ。其の後も凡そ四回同海峽を往復したれど、更に船暈は覺えざりき。更に昨年歸國の際、大西洋を横斷せし時の如きは、往波濤の重疊せるありと雖も、僅かに一度食事を缺きたるのみなりき。よりて予は海洋生活には「慣るる事」が最も肝要なるを悟れり。

世に海の如く自由にして且永遠の面影を表せるはあらず。大洋を航せば神秘の感に打たれん。甲板



上には俗物も出沒すれども、一度船底を思へば、そこには自然の莊嚴が權威を示せるあり。朝日、夕日の崇高なること、星夜の中空をぞろに恐るべき事、殊に風ぎ渡れる曙の波の美しさは、これを見し人ならでは想像だに許すべからざる妙境なり。高山幽谷を跋渉して、天の靈氣に浴せん事、又必要なるべしと雖も、現在及び將來の日本民族は、山を捨てて海に赴く氣分、性質、習慣をも養はざるべからず。數千年前の祖先の時代に復歸して、再び、怒濤の子とならざるべからず。日本民族の將來發展すべきは西か、北か、はた南か、東か、豫測を許さずと雖も、海を越えざれば何れの方面にも發展の餘地なきは數の定まる所なり。日本民族は男も女も海を好み、海に慣るる訓練を経ざるべからず。

## 海 國 民

故文學士 大町 桂 月

日本は海國なり。狹長にして島多き國土。四圍皆海、從つて航海の術進み、遠征の氣象、盛なるべき筈なり。ただ徳川氏が鎖國主義を取りたりしたため、三百年來、航海遠征の意氣鎮沈したりしも、今や開國の日本となれり。日本橋下の水、直ちに西洋諸國に通ず。國民たる者また蓬萊嶋裡に春眠を貪ることを得ず。日本人將來の事業は、海の上若しくは海の外にあるべし。又、國を守るにも、海を以てせざるべからず。雲井龍雄の詩に曰く、「睥睨蜻蛉州首尾、欲向何處試我才」と。今の世才を試むべき所、豈蜻蛉州裡のみならむや。日本國民は海國の民たるの實をあげざるべからず。

## 海外移住を奨む

文學博士 澤柳 政 太郎

人の生活に一日も缺くべからざるものは食物にして、食物は主として土地より生ずるものなり。然るに土地の生産力には一定の制限ありて、無限に増加するものにはあらず。之に反して、人口の増殖は時に天變、地震、飢饉、疫癘等によりて、制限せらるることなきにはあらざれども、漸次増殖の傾向あるは疑ふべからざる所なり。明治の初年に於ける我が國の總人口は三千五百萬と稱せしが、今は朝鮮を除きて五千餘萬と稱し、年々五六十萬を増加す。此の勢を以て進まば、我が人口は今より七八十年後には倍加するに至るべし。而して穀物生産は、如何に農事の改良を圖るとも倍加する能はざるは明かなり。是に於てか、或は海外に移住し、或は國富を増進して、食物を外國に求むる必要あり。何れにもあれ、海外に向つて雄飛を試むるは、日本國民必至の勢なり。

我が國にありても、北海道の如きは今尙人口稀薄にして開拓の餘地少からず。近來新たに版圖に歸したるものには、南に臺灣あり、北に樺太、朝鮮あり、又滿州の我が勢力範圍にあるあり、何れも廣漠たる沃野、多量なる漁場ありて、内地人の移住を歓迎せんとす。しかのみならず、遠く東を望めば北米、南米の沃野あり。南には臺灣を隔て、暹羅、安南、印度並に南洋諸島の天産物に富めるあり。共に我が有爲なる海國男子を喜び迎へんとす。大いに爲す所あらんとする青年は、須らく波濤を蹴つて雄飛する覺悟あるべし。

## 港 灣 の 必 要

谷 信 次

海上權力史論の著者たる米國海軍大佐マハン氏は、諸國民の海上權力をして消長せしむる所の重要なる状態を數へて、地理上の地位、地形的構成等とし、一國が深水の港灣に富むは其の國富強の一原



因にして、一國の海上權の發達に就いて考究すべきは其の國の總計而積に非ずして、海岸線の延長、及び港灣の性質如何にありと説きたりき。實にや、海洋は交通運輸に便にして國家の發達を促進すべき幾多の要素を助成するものなれば、國家の發展に適當なる地位は、島國半島國の類にして、彼の長く海洋に瀕し、四面海を受けて航路の要衝を占め、或は海灣の屈曲多くして、海岸線の延長に富める所は、乃ち最も這般の發展に對して、優勝なる便益を保有する者にあらずや。彼の太古、歐羅巴に在りてフイニシヤが海の母と號せられて一代の富強を極めたる、希臘羅馬が全世界文明の先驅たる、下つて西班牙、葡萄牙の富強、和蘭の繁榮、近代英吉利の富強が、よく世界の霸權を收め得たる、是皆天賦の地利を利用し、一國舉つて海軍に盡瘁し、大いに海上權を發達せしめし結果たるに外ならざるなり。此に於てか思ふ、比較的海岸線に乏しき歐米諸國に於て、その文化かくの如きものあり。然らば則ち、遙に是等歐米諸國に優れる海岸線を有する我が天與の海國は、茲に海上雄飛の大覺悟を固めて、須く海上の事業を發達せしめ、以て國力の膨脹を計り、世界に對して遜色なきを期せんこと豈刻下の急務にあらずや。

### 航空機について

土村 正一

韓信、墨氏の風を航空機の卵なりといはば、航空機の起源は甚だ遠き昔にあり。我國に於ても古く飛行の工夫をなしたるものありと云ふ。鳥の翼を張りて大空を我物顔に翔ける、さては春の野に花より花へと飛び遊ぶ蝶等は、如何ばかり當時の人々の心を唆りしならむ。然れども愈々其發明ありて、實用に供せらるゝに至れるは、極近世の事なり。只煙または熱せる空氣を滿したる氣囊によりて、上

方へ昇るのみにて、航行の自由なかりし往時の風船は、現今の自働氣球より見れば頗る幼稚なりしものならむ。

當初より飛行機の研究には、人々財貨等多大の犠牲を拂はれたりしが、器機の作製の法次第に巧妙となるに及び、嘗に普通の飛翔のみならず、宙返り飛行等をなすものも出でたり。大戰以前宙返り飛行等はたゞ曲藝とのみ目せられしが、戰爭中その愈實戰に應用せられ奇功を奏してより、亦一の空中戰術として認めらるゝに至れり。

後進なる我國飛行界も、近時異様の進歩をなし、諸外國飛行家をして讚嘆せしめつゝあり。陸海軍當局に於ても、或は航空學校を設立し、或は外國飛行家を招聘し、尙民間に於ても幾多の飛行研究所等の經營あり、常に斯道の研鑽に努めつゝあるは、誠に慶賀すべき事ならずや。されば發達の前途豫知すべからず。然れども外國のそれに比すれば、尙幾多の遜色あるを免れず。時折郵便飛行等の企あれども、歐米諸國に於ては早く飛行機を以て、旅客、貨物等の運送に當てつゝありと云ふ。その差蓋雲泥の觀なき能はず。

吾人は我眞摯なる飛行家に依りて、近く現状の缺陷を補ひ得て、よく歐米と伍し、漸次彼等をして一步を譲らしむるの日の來るべきを疑はず。

### 現代青年の覺悟

文學博士 加藤 弘之

外國との交際は日なほ淺けれども、我等は己に一度ならず國交の斷絶を見、戰爭の慘禍を経験せり日清、日露の大戦は、幸にして皇威の隆昌と陸海軍の武勇と、國民一般の忠愛とによりて、日本の大



勝に歸したれども、つらつら國勢を考へ、また世界の大局を達觀すれば、我等は未だ俄に志滿ち、氣驕るべからざるなり。將來の國運を双肩に擔ふべき現代青年の覺悟を要すること大いなりといふべし。世界における我が國家の位置次第に高まるに従ひ、國費は年毎に増加して、今は非常の額に上れども、國家が爲すべき事業は益多くして、有るが上にもなほ有らむことを望むは富力なり。然るに日本は此の點に於て、歐米の諸強國に比べて、甚だしき懸隔あるは遺憾の至なり。

富を得るは主として實業の隆盛により、實業の隆盛はまた學術の發達によることにして、維新以來國民は熱心に此の事に従ひをれども、如何せん、新進國の悲しさには、未だ到底歐米の先進國と肩を比ぶべきにあらず。言はば現代は世界中の人々が互に文明といふ目標として競走を試みざる事なるが日本人はその出發點に於てすでに五十歩百歩を立ちおくれたる形なり。且、先登者たる諸國民の身體精神、共に我等に優るとも劣ることなし。随つて此の競走は我等に取りて頗る困難なりと雖も、もと我等も活潑、有望なる國民なること歴史の確實に證明する所なり。されば今後長き間の奮闘次第、工夫次第にて、此等の不利益を補ひて、立派に祖先以來の面目を發揮し得べきこと斷じて疑ふべからず。大和民族が世界の晴の舞臺に力だめしを爲すは、また甚だ愉快なりといふべし。

戊申詔書に曰く、「戦後日尙淺く、庶政益更張を要す。」と。謹みて按ずるに、日清、日露戦争後における國債の増加は、驚くべき多額に上りたれども、苟も新進の大國家として世界各國と相伍せむには國防を整へ、外交を修むるは勿論、國內文明の開發もまた一日を緩うすること能はず。是に於て國家の事業は皆擴張、改良を謀らざるべからざるものあり。聖旨蓋しこれを諭し給へるなり。

### 時代思潮と青年

安井秋良

各時代には、夫々其の時代の思潮なるものあり。例へば、ミソタリズムを歓迎したる時代あり、或は帝國主義を尊びたる時代あり、或は個人主義の盛になりたる時代もありき。

現代に至りては、歐洲戦亂の影響として世界到る所滔々としてデモクラシーに風靡せられんとす。我が國も此の時代思潮より超然たること能はず。之が原因となりて普通選舉論の起るあり労働問題の論ぜらるゝあり、又是より婦人問題漸く喧しくならんとす。

干戈戢りてよりは、世界到る所に改造の聲澎湃として起り、曰く社會改造、曰く教育改造、曰く宗教改造、曰く何改造と、改造の論議に日も之れ足らざるの觀あり。一方海外には過激なる思想の横溢するありて、亦我が國に流入せんとするの虞なしと云ふ能はず。今や吾が思想界の混亂その極に達すと云ふも過言にあらずなり。

抑々是の如き思潮に對して我等青年は如何なる態度を執るべきか。或は云ふ、青年は非常に感受性鋭敏なるが故に、他の者よりも却て速に危険思想の核心を捕捉する憂なしとせずと。思ふに、こは何人も首肯する所なるべし。我等青年たるものは、深く茲に鑑る所なくして可ならんや。

世には新しき思想、泰西の思想とだに云へば、一も二もなく心酔して得々たる者尠からず。是の如きは未だ時代思潮を解するものと云ふを得ず。須く我等はかゝる輕舉を戒めざるべからず。され、外來の思想は總て否なりと云ふに非ず。中には、今日の國家の特徴となれる或る原理よりも更に高き原理を以て社會生活の秩序を一層鞏固ならしめんとする建設的思想なきにしもあらず。是等は採りて以て我が範となすに躊躇すべきにあらず。

要は、唯我が國體の他に異なる所以を自覺し、また青年として當に務むべき當面の問題を悟了して以て思想の取捨を決せよと云ふのみ。斯くてこそ始めて我等は時代思潮を解するものと云ふべきなれ



## 國憲及び國法とは何ぞ

文學博士 吉田 靜 致

大日本帝國憲法は、明治二十二年二月十一日に發布せられたるものにして、天皇國家を統治し給ふ根本の法則を規定し、臣民の權利及び身體、財産の安全を保障せられたる大典なり。されば國民たる者は、等しくこれを遵奉せざるべからず。

特に我が憲法は、その發布の勅語に示し給へるが如く、明治天皇の仁慈により、國家永遠の基礎を固くし、又臣民の安全と幸福とを完うせんが爲に欽定し給へる物にして、諸外國の憲法の如く、或は君民の協定により、或は人民の約定によりて成れるものとは、固より同日の論にあらず。

我が帝國憲法は國家最高の法則にして、統治權の作用を大權、立法、司法に分ち、各これが機關を定む。而して大權の行動は主として政府をしてこれに當らしめ、立法は帝國議會をしてこれに參與せしめ、司法は裁判所をしてこれを行はしむ。

皇室典範は、皇室の大事に關する法則を規定せられたるものにして、憲法と等しく尊重すべき大法なり。國憲とは通例この兩大典を指さすものとす。猶多數の法律、勅令等あり。何れも皆國家の隆昌と臣民の慶福とを目的として制定せられたるものなれば、國民は常にこれを遵守せざるべからず。

法律又は命令のいづれにても、一旦制定せられたる以上は、國民は絶対に服従すべきものにして、時勢の推移によりて改廢せられざる限は、その效力儼然として存するものなり。故に、尙その效力あるに當り、自己の不便、不利を口實としてこれを犯さんとするが如きは、法律上は勿論、道德上より見ても許すべからざる罪惡なりとす。

されど國法の遵守すべきは、決して制裁の有無に係はるべきにあらず。國法の命ずる所は即ち正義

のある所にして、萬民の安寧の存する所なれば、進んでこれに従はざるべからず。然らざれば、合同の生活は成立せず、又國家の目的をも達する能はざるべし。古希臘の哲人ソクラテスは、冤罪によりて死刑の宣告を受けながら、尙脱獄の勸誘を斥け國法に従ひて、毒を仰ぎ、從容死に就きたりき。かかる遵法の精神こそ實に立憲國民の理想とすべき所なれ。

## 道德及び法律の意義についての所信

法律を遵奉するは國民の重大なる義務にして、法律の命ずる處は道德亦これを命じ、法律の禁ずる處は道德亦これを禁ずるや論を待たず。然れども、法律は唯國民利福を増進し、安寧秩序を保持せんが爲、國家の權利を以て干渉すべき事項を規定するに止り、道德に比すれば、其の範圍遙に狭し。

餘財を有するもの、公共の爲に應分の義捐をなすが如きは、法律これを命ずるにあらずれども、道德は美事として之を奨勵す。集會訪問等に約束の時刻を違ふる如きは、道德上より云へば非難すべき事なれども、法律は之を禁ぜざるなり。是等は唯その一例に過ぎざれども、吾人日常の行爲は、法律の支配に依るものよりも、道德心の發動に出づるもの多し。されば、唯法律の命ずる所を行ひ、法律の禁ずる所を行はざるのみにては完全なる人といふべからざるや明らかなり。

行政官廳の處分に對し、人民に訴訟の途を與へたるは、一定の範圍の事件に限れり。故に、行政官廳は人民に訴訟の道なき事件に關しては、如何なる處分をなすも不可なきに似たれども、其の實、訴訟の途の開けたる事件に關するよりも、德義上の責任は一層重からざるべからず。若し行政官廳にして世態人情を辨へず、法律を唯一の標準として、一切の行政上の處分をなさんか、之が爲に官民の和合を破り、延いて國家の安寧を害するに至るべし。又法律は債權者に對して、債務者が約束の期限に至



りて其の債務を果さざる場合には、之を法廷に訴へ、財産差押の處分を請求するの權利を與へたり。然れども道徳上よりいへば、此の權利を行使するは、已むを得ざる最後の手段たるに止り、債務者の事情を察せず、法律の與へたる權利なりとて、直に之を行使するが如きは、人情に反するものとして甚だしく擯斥せらるべし。されば、法律の許す所、道徳必ずしも之を許さざる事あり。法律上有らゆる權利は飽くまで之を主張し、他人の己に對する義務は、飽くまで之を強請するを以て、人道に背かざるものと思ふは大なる誤なりとす。さればとて、其の權利に對する義務を有するものは、固よりこれを果さざるべからず。之を怠るは道徳の許す所に非ず。道徳は必ずしも法律の與へたる權利の行使を許さずと雖も、法律の命じたる義務を直に之を果さんことを命ずるものなりと知るべし。之を要するに、法律の命ずる所は必ずこれを行ふべく、法律の禁ずる所は決してこれを行ふべからず。而して、法律の許す所は之を行ふべきや否や、更に道徳上の考量を要す。また、法律は人間の爲すべき行爲の一部を示すものに過ぎず、人間の爲すべきことは法律の規定せる以外に多々あることを知るべし。(高等小學讀本より)

## 修 養

故文學士 大町 桂月

世に憫むべきは、未練なる男、臆病者、愚痴をこぼす男、一身の利害以外に天地人生あるを知らざる者、人を持みて人の顔色を見て喜憂する者。

未練とは悟らざる者の謂なり。世の中は成るより外には成らず。成敗は人にあり、運は天にあり。人力のあらむ限を盡くしたる以上は、運を天に任すの外なし。事成らざるも人を咎めず、爲に死を致

すも天を恨みず。死生の外に超脱して、自若として運命と戦ふ。安んぞ未練を言はむや。

臆病とはやはり悟らずして、膽力のなき者の謂なり。既に死を見ること歸するが如くならば、また何の恐るる所あらむや。よしや幾分死を惜しむの念ありとも、己に恃む所あらば、さまで恐るる所なかるべし。ここに最も見苦しきは、平生は大言を吐きて、骨あり、膽あるが如く見せかくる男が、いよいよ危き場合、生死の巷に臨みて腰を抜かし、醜態を演出することなり。何人も臆病といふ病の手を離るれば強くなる。窮鼠猫を囓むといふものは是なり。これに反して臆病の手につかまるれば、強き者は弱くなり、智者も愚とならむ。

愚痴は未練と兄弟分なり。思ひあきらむることは能はずして、くよくよとかへらぬ雑言をいふことなり。これも悟らざるの致す所にして、修養の足らざるに坐す。婦女子に多くこれを見る。男にしても女子に近きものにこれを見るなり。

一身の利害以外に天地人生あるを知らざる者は、私情私欲の念のみ強くして、同情なきものなり。公德心なきものなり。社會人生の何たるを解せざるものなり。人我にやさしくすれば何よりもうれしく思ひ、われに薄情なれば忽ち世の中を地獄のやうに思ひ、一喜一憂みな他人がおのれに對する所作による。天高く地厚きも、自ら求めて踟躕するなり。

人を持みて人の顔色を見て喜憂する者とは、毫も己に恃む所なく、獨立獨歩する氣概なきなり。苟くも獨立自尊、己に足つて他に待つ所なくんば、何ぞ人を持まむや。既に人を持まざるば、何ぞ人の顔色をして喜憂せむや。人間も人の顔色に喜憂するやうになりては、情なきの極點なり。たとひたぬに富貴となるとも、むしろ餓死せむに如かざるなり。

之を概するに、未練、臆病、愚痴、人を持み、一身の利害に踟躕するものは、所謂男らしからざる者なり。苟くも男と生れたる以上は、男らしきを要す。男の男らしきからざるは、わさびの辛からざる



るが如く、砂糖の甘からざるが如し。然らば如何なる事をか男らしきといふ。快活にして瀟洒、義に勇み、弱者をあはれみ、艱難に屈せず、死を恐れず、獨立自尊、人を恃まず、人にすがらず、我が思ふ儘に言ひ、且行ひ、顧慮せず、躊躇せず、運命に甘んじ、未練を言はず、愚痴をこぼさず、丈夫の態度はまさにかくの如くなるべきなり。而してこれ今日の學問を修めればとて得らるべきものに非ず。今日の學問はただ知識をひらくものなり、人物を磨く點に於てはほとんど風馬牛なり。されば今日の學者に人格の高潔なるものなく、却つて市井の間に俠骨の稜稜たる者を見る。人物を磨かむとする者は、學問以外別に自ら修養する所なかるべからず。

## 實 力

文學博士 笹川 臨 風

人は自らの力を頼むべきなり。閥を頼む勿れ。學位を看板にする勿れ。權貴威武に媚ぶる勿れ。富家勢家の縁者となりて自己の榮達を謀る勿れ、他力を望む勿れ、道に外れても成功せんと思ふ勿れ。斯かる事は皆意氣地なき者、心事の陋劣なるもの、大丈夫らしからぬもの、男子の眞骨頂なきものなす手段なり。大正の青年は斯かる手段に依りて、生存競争に打ち克たんなどと心がくべからず。若し心がくればこれ個人の發展を妨ぐるものなり。

自らの力を頼まんに頼むだけの素養を要す。素養なき者は是非とも他方に奔る。素養とは、反言すれば、猶之を露骨に言へば、裸にして抛り出しても飯の食へる男となるべき資格を云へるなり。昔は山林に隠れ、江湖に放浪すれば濟む時代なりしも、今は山林にても江湖にても自ら働かねば飯が食へぬなり。裸にして抛り出しても飯を食ひうるは力士なり。力士は自己に力があるを以て其の力を以

て到る處に饑えず。力士には自己の力以外に何等の他力なし。力士が博士と成ればとて、力士の力に於て一毫の加ふる所なし。大正の青年は力士の心懸けを持ちて其の發展をつとめざるべからず。而して此の素養を作らんがためには、勤勉ならざるべからず、責任を重んぜざるべからず、自己を尊ぶ精神なかるべからず、精力不斷ならざるべからず、正直ならざるべからず、潔白ならざるべからず、勇敢ならざるべからず、飽くまでも眞面目ならざるべからず。

## 都會と地方

文學博士 三宅 雪 嶺

世人常に謂ふ、「英雄豪傑の士は、必ずや隴畝の間より崛起し、曾て都會に生まれず」と。固より吉論にあらずと雖も蓋し一世を動かす英雄豪傑は、おほく村落、邑里より出づるが如し。即ち豊臣秀篤の中村より出でたるが如き、ピスマルクのフリードリヒス、ルーへより出でたるが如き、その他、擧げ來れば、苟も名を當代に壇にし、譽を後昆に垂れたる學者、事業家、詩人、義士の、身を村閭、茅屋の下より起して、遂に天下に雄飛するに至りし者、極めて多し。これ都會に生まれ、都會に長じ、都會に老い、居常齷齪として、都門の中に生活するは、猶畢生一家中に屏息すると同じく、天地狹隘宇宙窄小にして、更に活潑清澄、宏大雄壯なる心氣の伸ぶることなければなり。

身都門の中に生活しながら、身體を強固にし、精神を旺盛ならしめんには、時に郊外に散策して、自然の壯觀を眺め、以てその心身を養ふべし。郷里の地や、都門を距ること或は二十里三十里なるもあらん。或は百里二百里に上るもあらん。然れども舟車の便を假らば、均しく比隣の如きのみ。故に往々に鐵路若しくは船舶に依り、而して歸るや亦これに依らば、日曜日天朗なる時、近郊に遊ぶと何



の異なる所かあらん。

抑都門の紛紛囂囂たるは、人生の爲に必要なならざるにあらずと雖も、一層大なる志氣を涵養せんには、都門を離ること遠く、山高く、水長く、萬境自然なる處において、清淨なる空氣を呼吸せざるべからず。血氣いまだ定まらず、心身なほ堅固ならざる時に際してや、その學業の暇、幸に故山に歸るがごとき機會あらば、道途を迂廻して、名山、大川の間を逍遙し、時には孤枕を山驛の夢に敲て遠く猿兒の叫ぶを聞き、時には山徑叢危、細棧纒に通ずるところ岩もる水を掬して、以て渴を醫する、これ洵に務めて試みるべきことなり。

七〇

## 職業

文學博士 中島力造

人は徒らに生きんが爲に生れたるにあらず、活動せんがために生れたるなり。されば我等は一定の職業を選びて、忠實にこれに従事せざるべからず。かくの如くにして、よく獨立自營を完うするを得べし。獨立自營の人にして始めて人たるの道を辨へ、人生の意義を解するものといふべし。假令生活の資に餘裕ありとも、無爲安逸を以て能事とする無職の遊民は、實に不忠不孝の人たるのみならず、抑亦獨立の人格を缺くものと謂はざるを得ず。更に社會經濟の上より見るも、人人其の業を分ちて、長短相補ひ、有無相通するが故に、其の存續發達を圖るを得べし。然るに己は碌碌として何の爲す事なく、偏に他人の恩愛に依頼せんか、我が一身の恥辱たるはいふも更なり、又實に社會の寄生蟲たるを免るべからず。是豈健全なる身體を有し、普通以上の教育を受けたる者の爲すべき所ならんや。職業には貴賤上下の別なきにあらず。例へば官吏、教員等の職務と、車夫、馬丁等の勞役と、誰か

其の間に逕庭なしといはんや。しかれども、苟も不正の業にあらざるかぎり、職業はすべて神聖なるものにして、其の價値に於て異なる所なし。是の故に我等は徒らに高尚なる職業を求めんことに苦心せず、身に應じたる職業を選びて、其の成績を擧げんことを努めざるべからず。我等が人としての價値は、其の職業の高下にあらずして、如何に其の職業を成就し得るかに存するなり。然り、勤勉忠實なる僕婢は、無責任なる總理大臣よりも、人としての價値に於て優れり。即ち人格の高下は、人人の地位身分、職業の如何に關係せざるを知るべし。

只夫れ職業の種類は、一身の事情に鑑みて、之を選択せざるべからず。事情とは何ぞや。第一は自己の性質才能の如何なり、第二は一家の事情なり、第三は身體の強弱なり。職業の適否は、生涯の運命を定むるものなれば、父母、師長の意見を聽きて、慎重に之を決し、悔を他日に遺すことなからんを要す。

## 服従

文學博士 井上哲次郎

服従とは自己の尊敬する人の教に従ひ、その命令を守るをいふ。先生及び父母兄弟は言ふまでもなく、官吏の命を聽き、學校の規則を守り、國の法律に従ふは皆服従なり。すべて我が従はざるべからざる人に對し、又守らざるべからざる事柄に對し、己の我を通さず、其の命ぜらるるまゝになすを服従といふ。

服従は一見誠に意氣地なきことのやうに思はるるやも計り難し。生徒の中には、一も二もなく師長の命を奉じ、學校の校則に従ふを卑屈極ることと考へ、師長に反抗し、校則を破りて、得意とする者な



しといふべからず。しかれどもこれ大なる心得違にて、服従の本義を辨へざるより起ることなり。何となれば、茲にいふ服従は、如何なる人にも如何なる命令にも服従せよといふ意にあらざればなり。若し我等は痴人の言に盲従し、不當の規則を遵守せざるべからずとせば、それは無理なる要求といふも可ならむ。かかる場合に、唯命是從ふは如何にも卑屈に相違なし。然れども、師長、父母官吏等は、其の地位よりいふも、その年齢よりいふも、皆我等より経験に富み、世故に長けたる人なれば、いづれも我等の尊敬すべき人といはざるべからず。又、法律又は校則は、或は國民の幸福を圖るため、或は學校内の平和を保ちて、我等が學を修め徳に進むに便利を與ふる爲に作られたるものなるが故に、我等は衷心より之を尊重せざるべからず。尊敬すべき人に従ひ、尊重すべき規律を守るものを、何ぞ意氣地なしといふべけむ。否、服従の出來ざる者こそ、却つて賤しむべき我が儘者といふべけれ。

世の中は獨り學校のみに限らず、何處にても規律と服従とによりて圓滿に治るものなり。子にして父母に從はざれば、一家の内風波絶えず、屬官にして上官に從はざれば、政府の事業行はれず、會社にして重役に從はざれば、會社の事務抄らす。殊に軍隊には嚴重なる階級ありて、下の者は順を追うて上の者に服従せざるべからず。これ一見無理なるが如くにして、決して無理ならず。何となればかくせざる時は、統一を保ち、風規を維持すること能はざるが故なり。これに由つてこれを考ふるに我等に服従の必要なること、實に明白にして疑ふべからざるにあらずや。

凡そ服従するには、衷心喜んで爲さざるべからず。表面は服従を装うて、その實いやいやながらこれを行ふは、眞の服従とはいふべからず。たとひ然らずとも、不活潑なる返事をなし、或は愚圖愚圖して實行を躊躇するべきことありては、これを命じたる人の感情を害するものなり。君命じて召す時は駕を俟たずして行く。といひ、「命じて呼べば、唯して諾せず。」といふも、畢竟この意味なり。なほまた人の面前にてのみ服従を装ひ、退いて不平を鳴らすが如きは、所謂小人の所爲にして、堂堂

たる男子のなすべきことにあらず。行に蔭日向あるは道德に於て最もこれを卑しむ。

### 余が長所と短所

早大教授 吉川 秀雄

余が短所の一つは性質の極めて短氣なることなり。心一たび激する時は、我ながら狂人に近しといはむ。怒に乗じて、人を罵倒し、物を壊つなど、いふまじきことをいひ、なすまじき事をなして、後に至りて悔ゆれども及ばざるを恨むるは常の事なり。余はこの短所に心づきて、自ら改めむと努力すること久し。雖も、その效殆どあらはるることなし。余はつくづく性の挽め難きを悟りぬ。

余が長所は物事をなすに頗る熱心なる事なり。一たびある事に熱中する時は、一意専心、始と寢食をも忘るるばかりなり。これ余が短氣なる性質の半面なるべし。しかもこの熱心を數日若しくは數週の間繼續して、さばかり倦怠する事なきは、短所なる性質と矛盾するが如しと雖も、しかも余にありては兩存する不思議なる事實なり。これは余が身體の頗る剛健にして、疲勞をおぼゆること少きによるるべし。

余の短所は世の人にあるがちの事なり。さればとて余はこれを理由として自ら許すことなく、一意この缺點を除去する事に力めざるべからず。而して余の長所を有する人は、必ずしも世に多からざるべし。余はこの點において天の恩寵を忝うしたる如き心地す。余や資性魯鈍なりと雖も、この長所を發揮して、勉勵止む事なくば、天資鋭敏なる人の驥尾に附して進まむこと、必ずしも絶望にあらざらむか。



## 最も興味を感じたる史上の事蹟

星野重顯

源頼朝と平重盛とは、共に源平歴史の大半を飾るもの也。靜かに其時代を思惟する時、兩偉人の間に存する著しき類似とその差異とは、吾人をして深く興味を感ぜしめずんばあらず。請ふ少しく之を論ぜしめよ。

思ふに頼朝は大戈偉傑、亂世の英雄たる者にして、多くの奮闘的素質を有したり、重盛は智仁兼備の者なりしも、而もそは治世の大臣たるべくして、亂世の英雄たるべきにはあらざりし也。

源氏の興るや頼朝は實に其の樞軸たり、源氏の榮ゆるや彼實にその柱石たりしなり、而も頼朝は平家を覆す獅子心中の蟲たりしな。一族骨肉を戮して自ら股肱を失ひ、枯葉の將に秋風の來たるを待つあるに至らしめしは誰ぞ。洵に惜むべき也。

平家の興るや重盛は實に其の基礎たり、平家の榮ゆるや彼實に中興の開山たりしなり、而も重盛は平家の滅亡を早からしめたり。早くより佛説に歸依し、私情のために自ら己の生命を縮め、大逆無道の父をして羅針盤なき漂船の如きに至らしめしは誰ぞ。洵に悲しむべき也。

思ふに彼等は共に人傑の第一人者なりき、然も彼等は未だその修養に於て全からざるものありしなり。頼朝の我執の念に強くして、一族骨肉を犠牲にし重盛の意思の弱くして、父子を犠牲にして、俱に夫の慘憺たる悲劇を見るに至りしもの、全く之が爲なり。

頼朝と重盛とが、爾く其主義性質を異にして、而もその結果を同じくし、共に史中有爲の中心人物として、而も辯護するに辭なきまでの缺點を有したりしは、深く吾人の興味を感じて措かざる所也。

## 私の觀たる我

松井史亨

「吾日に吾身を三省す」と、古の聖賢己に之を言へり。されば我等苟も人格の向上を希ふ者は須く己を第三者の位置に置きて、誤なく自己を觀察し、以て修養の資となすべきなり。

我熟々我身を顧みるに、その性や温順なりと雖も、快活ならず。惻隱の心溢るゝと雖も、涙に脆く人に對して寛に過ぎたり。正直なりと雖も、他人の言を過信し、熟慮せずして進み、往々輕卒の誹を受く。これ眞に自ら足らざるの致す所にして、深く心に恥づる所なり。然れ共、又、長所なきにしも非ず。そは即ち一度他人に誓ひたる事は、如何なる難儀に遭遇すとも必ず斷行して恐れずてふ固き決心これなり。

我元來、他人の如く、春の花見、秋の月見に興を持たず。旅行も亦甚しくは好む所に非ず。然りと雖も、我にはこれを償うて餘ある快樂あり。そは即ち讀書と水泳となり。燒くか如き炎塵を避け、單身激浪を乗り越えて遠く沖合に泳ぎ出づる時、凡百の煩惱は忽ち一掃せらる。何物かこれに比する樂あらんや。又秋冷嚴寒の候、燈下に書を繙く時、心は忽ち千古の昔に住し、身は直ちに千里の異國に走り、見ぬ世界の英傑と膝を交へて、互に胸襟を開きて談じ、時の移るを知らず。又快ならずや。

我に一つの信念あり。如何なる人、如何なる力を以てするも、而も確固として到底抜く能はざる信念を有す。そは眞理なり。實に宇宙の眞理なり。我この眞理の爲には、我生命、財産も何かあらんもの概あり。これ我が信念なり。

我今我身を觀じ來りて、前途に一縷の光明を見出したるが如き觀あり。即ち我は我が短所を轉じて



長所たらしめ、長所は益々これを長養し、趣味嗜好はより以上に高尚なるものと爲し、確固たる信念の上に立ちて、一步一步人格の向上を計らんのみ。

## 大 勇

文學博士 坪内逍遙

彈丸雨飛の間には、よく泰然として自若たるも、演壇に上りては顔色土の如く、手顫ひ聲戦き、筆を執りては句句風霜を挟み、凜烈當るべからず、讀む者をして覺えず戰慄せしむる力あるも、實務に當りては逡巡躊躇して、殆ど一小事をも英斷する能はざるなど、此の如きもの往往にして其の例に乏しからず。而もこれ決して怪しむに足らざるものなり。その勇や主として經驗と練習に基づく自恃自信たるに外ならざるが故に、一經驗と練習とが伴なはざる方面に向ひては、その自恃心を移す能はざるが爲のみ。

然らば眞勇とは何ぞ。眞勇とは正を履みて懼れざるの勇なり、はじめより利害成敗を打算せず。榮辱は勿論、場合よつては生死をも眼中に置かず、爲すべき故に爲すのみ、往くべき故に往くのみといふ意氣これなり。若し恃む所ありとすれば、それ唯正理と人道とを恃むのみ。その他には依る所なく恃む所なし。或は彼の宗教家の如く、神を恃み、天を恃むといふことはあるべし。されどもその所謂神と天とをば、正理人道と同一視して恃むなり。

## 三、書簡文體 文例

### 舊師に入學を報ずる文

友田宜剛

肅啓。追追暑熱は甚だしきを加へ來り候處、先生には、益御清昌に校務に御盡瘁遊ばされ候事、恭賀斜ならず候。卒業後、御勤靜御伺ひ致すべき筈なるに、試験準備に忙殺せられ、心ならずも御無汰沙仕り申し候。平に御有免下され度候。御蔭様にて試験も譯なく相濟み、僥倖にも合格致し候うて、此の程入學許可相成り候。他事ながら御休神下され度候。これと申すも偏に先生の一方ならぬ御指教に基づく事と存じ、感激の至に奉存候。殊に平素困難と感じ候英語、數學の難關を比較的容易に通過致し候ひしも、全く平素御教導の宜しきを得たるに外ならず。思へば、此の五年に受けたる高恩は何物にか比し申すべき。此の高恩に比しては、山の高さも高しとするに足らず、海の深さも深しとするに足らず候。ただ此の上は、一意専心學業に奮勵して、將來少くは人間らしき人間とも相成り、聊なかりとも國家に寄與する所ありて、以て御恩の萬分の一に報い奉る外御座なく候。茲に謹んで、年來御教訓の有り難きを拜謝し、尙、將來の御誘導を祈り奉り候。時下尊體十分御愛護下されたく祈り奉り候。頓首。

### 病氣のため入學試験を受けざりし友人に

明大教授 内海月杖

謹啓。兄の御體格、兄の御學才を以てしては必ずや登第第一の人たるを想ひ成績發表の日を樂しみて



待ちをり候ひしに、本日官報紙上御名を見出し得ざりしに驚き、吉田君を訪うて相尋ね候へば、あやにく流行感冒にて御臥床、試験場の上ることを得られざりし由、はじめて拜承、驚き入り候。まことに御遺憾至極の御事と存じ上げ候。自分の學事にまされて、少しも存ぜず、御見舞も申し上げて、失禮いたし候。

しかし追追に御快方の由大慶に存じ候。平生極めたる御壯健にあらせられ候へば、御快方へ向はせらるれば、不日御全快なさるべく、しかして徐に御静養。來年の時期を御待ちなされるやう、念じ上げ候。人生の長きにくらべ候へば、一年のおくれなどは何にても候はず。ましてや及第の望萬全なる御身に取つては、何でもなき御事に候。

申し上ぐるまでもなく、學問は身體の強壯が第一の要件に候。いかに兄の御學才を以てしても、もし萬一、健康を御損じなさる様のことありては、誠に終生の恨事と相成るべく候。なにとぞ心静かに御養生なされて、もとの御健康にかへらるるやう、くれぐれも念じ上げ候。

いづれ二三日の中に參堂、拜眉萬述申し上げべく、御見舞をかねて、微衷申し述べ候。匆匆。

### 郷里の父に送金を乞ふ文

服部 躬治

日にそひ暑くなり候ふを、御かはりもあらせられずや。大略先便にても申し上げし如く、いよいよこの夏は、奥羽地方より北海道へと確定仕り候。伴侶は同窓の二人に、大學生一人、都合四人の道づれに御座候。いづれも一騎當千の運動家、健脚ぞろひの事に候へば、殆ど徒歩旅行の覺悟にて、野宿をすら辭せざらむ見脈には候へども、さりとて全く一文無しも心細く、あまりなる無謀の業も仕り難

く存じ候うて、各自二十圓乃至三十圓の準備金を懐にと、相談一決いたし候。さてその金に候。二三个月以前よりその心して十圓ばかりは貯へおき候ふが、最低額二十圓にも、なほ十圓を要し候ふにつき、この分何とぞ御恵み下されたく、今月末日までに御願ひ申し上げ候。豫定よりは日數はかかるべきかと存すれども、金は努めて剩餘を多からしめむと、今よりかねて相戒めまかりあり候。少い金をいかにしてつかふ、それやがて私輩の修業なるべく存じ候へば、母上兄上にもよろしく。御土産話は歸京の上、かすかす書面にて申しあぐべく候。

### 落第し半途退學せんごする友人に忠告する文

巖谷 小波

久しく御消息に接するを得ず、定めし學年試験の爲御多忙なるべしと存じ、平生よりよく勉めよく遊びて御成績常に悪しからざる貴兄の事に候へば、此の度も首尾よく御及第の事と存じ居候ひしに、意外にも御成績思はしからざりし由承り、大いに驚き入り申候。貴兄も嘸かし御遺憾の御事に候はんと存候。然しながら中途退學など誠におもひもよらざる儀に有之、落第決して失望するに及ばざるごとと存候。自分の出来るだけの力をつくして受験せられ、殆ど人事の限を御盡くしなされ候上の事なればこれ天なり命なりとも申すべく候。社會には、一度落第致し候へば非常に落膽して、自己一生の運命は決定致され候やうなる考を起し、或は自暴自棄に陥り、遂には放蕩懈惰の遊民となり、あたら一生を疵物となし果つるもの有之、或はまたとりかへしのつかざることに神經を痛め、その爲健康を害するものも有之候。これ等は所謂薄志弱行の輩のすることにて、此の如き者はよし及第致し候ともいつかまた困難に逢ふ場合には忽ち落伍致し候ものにて、決して有爲なる大丈夫とは申難かるべく候



人の一生は遠慮に御座候。學校にて一年や二年遅れ候ふとも、社會に出でて數等を抽んで候もの多數有之候。盛に運動でも致し候て元氣を養ひ、來年必ず此の失敗を取り返し候はば、それにてよろしかるべしと存候。  
落第そのものよりも、更に恐るべく戒むべきは、之に伴なふ失望落膽乃至神經衰弱といふ妖魔に有之候。御閑暇も有之候はば、御遊下さるべく、例の小舟に棹さして、一竿の風月と洒落るるも愉快此の上なかるべく候。早早。

### 注文品の催促

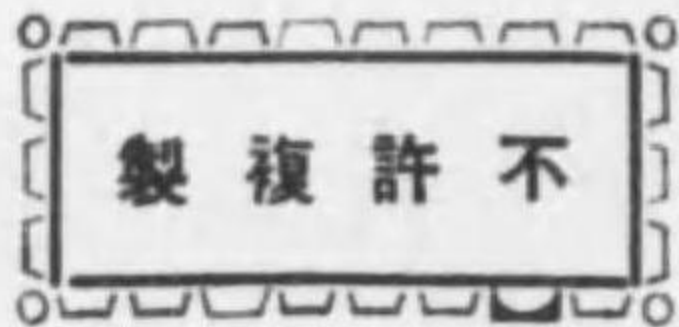
服部 嘉香

拜啓去十月三日附を以て御注文申上置候山藪物五拾反未だ着不仕候同文中にも申添へ候通り最早や販賣季に際し取急ぎの品に有之而も今以て遅延に關する何等の御通知にも接し不申大に迷惑致居候御多忙中とは萬々推察罷有候へ共當店に於ても追々と注文も有之其都度他より融通し漸く供給致居候次第従つて原價己に不廉に候ま、只信用を失墜致さる程度迄に勉強致居候有様如斯は貴店と取引開始以來初めての事に候何卒此書着次第大至急現品御送附願上候先は右要用まで兎に角着荷待ち居候

勿々

印刷日 昭和三年二月十五日  
發行日 昭和三年二月二十日

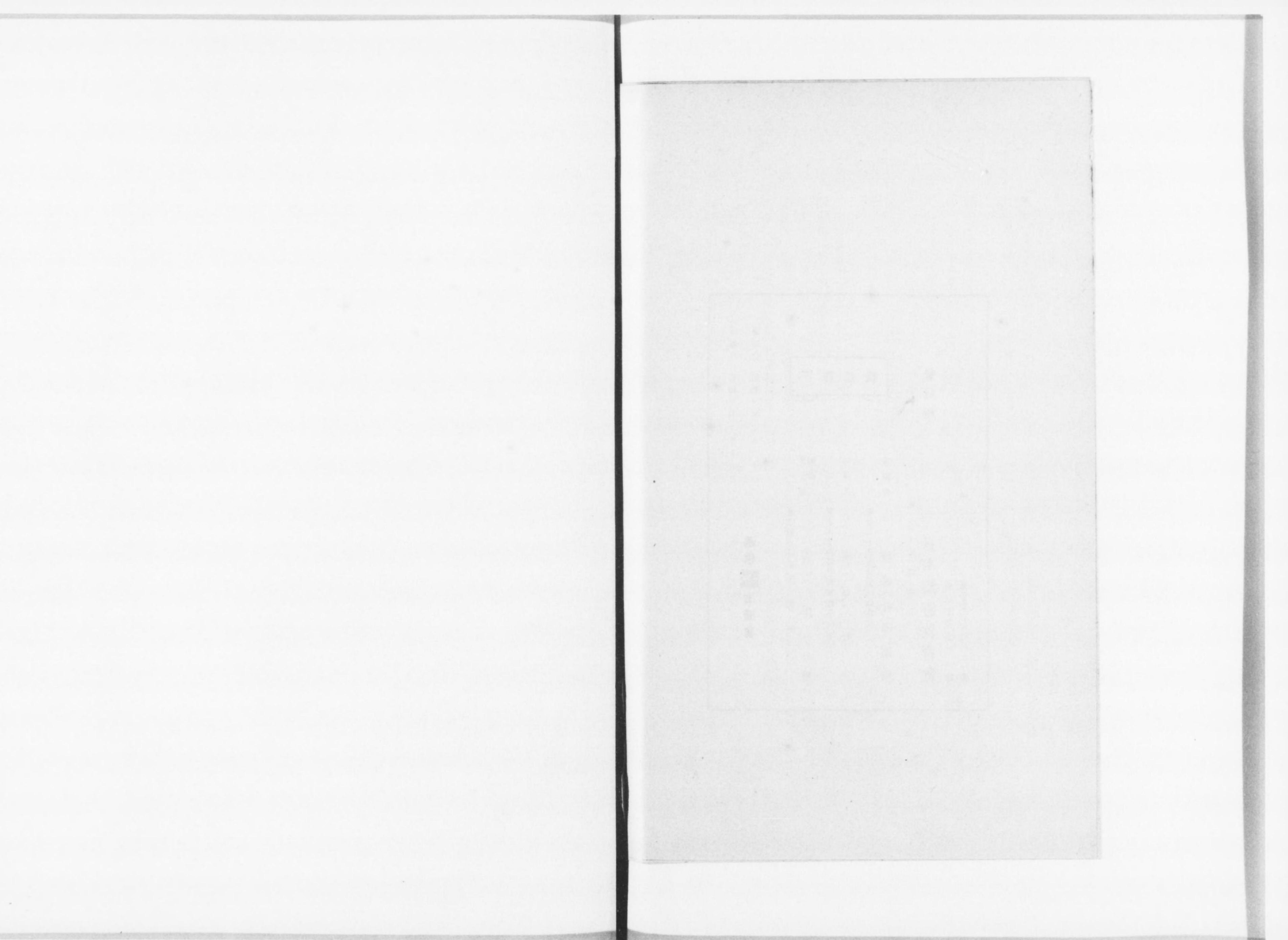
通信 受取 準備書



發行所

編輯人兼 印刷人	東京府王子町上十條一四七八 吉田房
印刷所	東京市牛込區早稲田鶴卷町三〇六 道又好三
發行所	東京市牛込區早稲田鶴卷町三〇六 信成社印刷所
發行所	東京・十條 驛前 日本鐵道教育會
	電話 王子五六一番 播磨東京六四八七一番







ノ

# 遞信代數學講座

## 第一編 緒論

### 1. 代數學とは算術と同じく数を論ずる學問である。

然し乍ら代數に於ては數を表すに算術で使ふ數字の外、 $a, b, c, \dots$ 、 $xy, \dots$ 等の文字を使ふ故算術よりは餘程簡單明瞭で且つ應用の範圍が廣く非常に便利なるものである。代數は廣義の算術である。

### 2. 演算の符號 $+$ , $-$ , $\times$ , $\div$ の用ひ方は算術の通りであるが和, 差, 積, 商等の書き方は少しく異つてゐる。例へば $5+3$ は (5と3との和) を示し, $a+b$ ( $a$ プラス $b$ )と讀む) は ( $a$ で表はした數と $b$ で表はした數との和) を示すものである。又 $a-b$ ( $a$ マイナス $b$ )と讀む) は ( $a$ と $b$ との差) を示すものである。

次に積と商であるが、 $a$ と $b$ との積は通常 $a \times b$ と書き、 $8$ と $x$ と $y$ との積は $8 \times x \times y$ と書くのが普通である。然し乍ら代數に於ては文字と文字との間及び數字と文字との間に書くべき $\times$ は通常書かないことになつてゐる。

例へば  $a \times b$  は  $ab$  ( $a$ エー、 $b$ ビー)と讀む)と書き、 $8 \times x \times y$  は  $8xy$  ( $8$ エックス、 $xy$ )と讀む)と書くのである。

尤も代數に於ても、數字で表はした二つの數の間に書くべき $\times$



は決して省かれない。例へば  $5 \times 3 \times 2$  の符號  $\times$  を略すれば、532 となり [五百三十二] なる數を表はして  $5 \times 3 \times 2$  即ち 30 を表すことにはならないからである。只絶対に小數點と誤る恐なき場合に限り符號  $\times$  の代りに、 $[\bullet]$  を打つことはある、例へば  $5 \times 3 \times 2$  を  $5\bullet 3\bullet 2$  と書く如きである。

$a$  を  $b$  で割つた商、即ち、 $a \div b$  は大概  $\frac{a}{b}$  ( $b$  分の  $a$ ) と讀むと書く。

### 3. 等號 “=” と等式

二つの數が等しい事を表はす符號 = 即ち等號の用ひ方は算術の通りである。

例へば  $a$  と  $b$  との等しいことと  $x$  と  $y$  との和が  $C$  に等しいことは

(1)  $a=b$  {( $a$  イクオール  $b$ ) と讀む} と書き、

(2)  $x+y=c$  {( $x$  プラス  $y$  イクオール  $c$ ) と讀む} と書く。

斯くの如く二つの數の等しいことを “=” を使つて書き表はしたるものを 等式 といふ。

等式に於て、“=” の左側の數を其の等式の 左邊、右側の數を 右邊 と云ふ。(1) の例に依れば  $a$  が左邊で、 $b$  が右邊である。

### 4. 代數記號及び公式

$a, b, c, \dots, x, y$  などのやうに數を表はす記號  $+$ ,  $-$ ,  $\times$ ,  $\div$  などのやうな演算を表はす符號其他 “=” とか括弧とかいふやうな代數で使ふ符號を一括して 代數記號 といふ。

或計算に於て總ての場合に當て嵌る結果を代數記號で書き表はしたものを 公式 といふ。

### 5. 代 數 式

數を表はす記號 (數字, 文字) と演算を表はす符號 ( $+$ ,  $-$  等) とを

用ひて書きたる式を 代數式 (單に式とも稱す) と云ふ。

例.  $b+2$  …… は  $b$  で表はした數と 2 との和に等しい數を表はす式であり

$y+2$  …… は  $y$  より 2 だけ大きき數を表はす式である。

### 問 題

- (1)  $x$  より 20 だけ大なる數如何
- (2)  $a$  より  $b$  だけ大なる數如何
- (3) 100 より  $c$  だけ少なき數如何
- (4) 1 時間に 3 哩づゝ歩けば  $a$  時間はは何程歩むか
- (5)  $c$  冊にて  $y$  錢の本、1 冊の價如何

### 解 答

- |            |                    |
|------------|--------------------|
| 1. $x+20$  | 4. $3a$ 哩          |
| 2. $a+b$   | 5. $\frac{y}{c}$ 錢 |
| 3. $100-c$ |                    |

### 6. 代數學は如何なる順序に計算するか

1.  $+$ ,  $-$ ,  $\times$ ,  $\div$  とばかりか、 $\times$ ,  $\div$  とばかりの時は左から右へ、書いてある順にやつて行けば宜しい。
2.  $+$ ,  $-$ ,  $\times$ ,  $\div$  が入り交つてゐる時には、先づ  $\times$  と  $\div$  とで示された演算をやつて、それから  $+$ ,  $-$  とで示された演算をやるのである。

### 7. 數 値

$a=2$ ,  $b=3$ ,  $c=1$ . として

$3a+2b+c-abc$  を解け

[解]  $3a+2b+c-abc$  は



(4)

$(3 \times a) + (2 \times b) + c - (a \times b \times c)$  なる故

$(3 \times 2) + (2 \times 3) + 1 - (2 \times 3 \times 1)$  となり

$+6 + 1 - 6 = 7$  ..... が答である。

この答の7を  $a=2, b=3, c=1$  の時の  $3a+2b+c-ab$  ..... の  
数値と云ふ。

問 題

$a=1, b=2, c=3$  として次の式の数値を計算せよ。

1.  $8ab-5ac$

3.  $ab+bc+c-3a$

[解]  $(8 \times a \times b) - (5 \times a \times c)$  [解]  $2+6+3-3=8$

故に  $(8 \times 1 \times 2) - (5 \times 1 \times 3)$  4.  $a=5, b=3, n=2$  なるとき次

即ち  $16 - 15 = 1$  の数値如何

2.  $a+b+c$

(1)  $nr+b, (2) n(a+b), (3) a+bn$

[解]  $1+2+3=6$  [解] (1)  $nr+b=10+3=13$

(2)  $n(a+b)=2(5+3)=2 \times 8=16$

(3)  $a+bn=5+3 \times 2=5+6=11$

8. 冪なる語は算術と同意義に用ひられてゐる。

$8 \times 8$  ..... を 8 の二乗といふ。

$8 \times 8 \times 8$  ..... を 8 の三乗といふ。

$8 \times 8 \times 8 \times 8$  ..... を 8 の四乗といふ。

$8 \times 8 \times 8 \times 8 \times 8$  ..... を 8 の五乗といふ。

一つの数の冪とは、其数を幾つか掛け合せたものの事である。

或る数の冪の書き方は、

$a a \dots \dots \dots a^2$  と書くべし。

$a a a \dots \dots \dots a^3$  と書くべし。

(5)

$a a a a \dots \dots \dots a^n$  と書くべし。

(説明) 其数を一つだけ書いて、其右肩に掛け合はす度敷を小さく  
書くのである。

$a$  の二乗のことは  $a$  の第二冪とも、 $a$  の二乗冪とも稱す。又  $a$   
の三乗のことは  $a$  の第三冪とも、 $a$  の三乗冪とも稱す。又  $a$  の二乗  
のことを  $a$  の平方、 $a$  の三乗を  $a$  の立方をとも稱す。

(注意)  $a^2$  とあるのは  $a$  を  $a$  に掛けたもので  $a^2$  の二乗ではな  
い、 $a^2$  の二乗は必ず  $(a^2)^2$  と書くべきである。

今  $a=2, c=3$  ならば

$a^2 c^3 = 2 \times 3^3 = 2 \times 27 = 54$

問 題

(1)  $a=1, b=2, c=3$  として

$a^b c$  の数値を求む

[解]  $1 \times 2^2 \times 3 = 12$

(2)  $8^3$  とは何解

[解]  $8^3 = 8 \times 8 \times 8 = 512$

(3)  $a=9, b=4$ 、として

$a^2 - 2ab + b^2$  の数値を求む。

[解]  $a^2 - 2ab + b^2 = 9^2 - 2 \times 9 \times 4 + 4^2 = 81 - 72 + 16 = 25$

9. 代数学上の数

負の数、正の数。

$a$  から  $b$  を引いた残りは  $a-b$  である。

今  $a=10, b=6$  とすれば、 $a-b=10-6=4$

又  $a=8, b=8$  とすれば、 $a-b=8-8=0$



でこれは諸君が己に算術で勉強した通りである。ところが若し  $a=6$ ,  $b=10$  とすると  $a-b$  は  $6-10$  となつて、譯の分らぬものになつてしまふ。

さて斯様な  $a, b$  の値であつて  $a-b$  が忽ち譯の分らぬものになる様では代数の眞價はない。この不便を取り去る爲めには例へば今の  $6-10$  ならば、これを  $-(10-6)$  即ち  $-4$  で表すことにしてこれ  $(-4)$  をも数の中に入れる事にするのである。そして斯様な数を、(算術で使つてゐた数と區別する爲め) 負の数 又は 負数 と謂ふのである。

▶ 負の数の呼び方は「マイナス」と云ふ。

即ち  $-5$  は(マイナス5)と呼ぶのである。

負数に對して普通の数を正数と云ふ。正数を表すには負数の「-」の代りに「+」なる記號を用ひ  $+5$  は(プラス5)と呼ぶ。

正の数, 負の数, 零, を一括して代數學上の数と云ふ。

#### 10. 記號の名數

正数, 負数を表はす <sup>プラス</sup>「+」, <sup>マイナス</sup>「-」の記號を 性質の記號 或は符號と云ひ, 加へる記號の「+」や引く記號の「-」及び其の他演算, 計算の意味を表はす記號を 演算の記號 と云ふのである。故に代数に於ては

「+」及び「-」の記號は二通りの意味に用ひられることを知つて置かねばならぬ。そしてその一つは 正負を表はす性質の記號 であり今一つは 加減を表はす演算の記號 である。

#### 11. 絶 對 値

負数及び正数の符號を取り去つた数をその数の絶對値と云ふ。例

へば  $(-5)$  の絶對値は5であり  $(+7)$  の絶對値は7である。

故に正数の絶對値と云ふものはその数その儘のことであると思つて居つても差支へはない。

#### 12. 不等號 $>$ , $<$ , $\neq$ 不等式

$a$  が  $b$  よりも大きい事を表はすには  $a > b$

$a$  が  $b$  よりも小さい事を表はすには  $a < b$  と書く。

又  $a$  と  $b$  とどちらが大きいかは分らないが兎に角等しくないと云ふ事を表はすには  $a \neq b$  と書く。

符號  $>$ ,  $<$ ,  $\neq$  は何れも 不等號 と謂ひ, 不等號を使つて二つの数の等しからざる事を書き表はしたるものを 不等式 と云ふのである。

#### 13. 二つの数の大小をきめる規則

$a-b$  が正の数だとすれば  $a$  は  $b$  より大きいことになるし,  $a-b$  が負の数だとすれば  $a$  は  $b$  より小さいことになる。

(イ) 正の数は0より大なり。

$$+10-0=+10 \quad \therefore +10 > 0$$

(注意)  $\therefore$  ……は 故に といふ言葉の代りに用ふ。

(ロ) 負の数は0より小なり。

$$(-10)-0=-10 \quad \therefore -10 < 0$$

(ハ) 正の数は負の数より大なり。

$$+1-(-6)=+7 \quad \therefore +1 > -6$$

(ニ) 正の数は絶對値の大なる方が大なり。

$$+9-(+3)=+6 \quad \therefore +9 > +3$$

(ホ) 負の数は絶對値の小さい方が大きい。

$$(-9)-(-3)=-6 \quad \therefore -9 < -3$$



問題

(1) +13と+28とは何れが大なるか。

[解] +13 < +28

(2) -13と-28とは何れが大なるか。

[解] -13 > -28

(注意) (+2)と(-2)の如き二数を絶対値等しくして符號の反せる(異符號)の二数といふのである。

異符號の二数が同じ絶対値を持つ時は、この二数を合すれば零となる。例へば (+4)+(-4)=0 の如し。故に一般に次の如き定則を得ることが出来る。

(+a)+(-a)=0

第二編 正數、負數の規則

(A) 正數、負數の加法

[法則 1] 同符號の二つの數の和は、その數と同じ符號で和の絶対値はその二つの數の絶対値の和に等しい。

即ち同じ符號の數を加へるにはその絶対値を加へ合せてそれに元の符號を附けて置けばよいのである。

(例1) (+5)+(+2)=+(5+2)=+7

(例2) (-5)+(-2)=- (5+2)=-7

[法則 2] 絶対値の等しくない異符號の二數の和は其中の絶対値の大きい方の數と同符號で、和の絶対値は二つの絶対値の差に等しい。

(例1) +8と-3との和を求む。

上の法則に従へば、絶対値の大きい方即ち8の符號は+であり加へ合せやうとする二つの數の絶対値の差は、5 であるから

(+8)+(-3)=+(8-3)=+5

(例2) (-8)+(+3)=- (8-3)=-5

[法則 3] 絶対値が等しく、符號の異なる二數の和は零に等しい。

(例 1) (+10)+(-10)=0

[法則 4] 零と或る數との和は其の數自身に等しい。

(例1) (+30)+0=+30

(-30)+0=-30

算術ではある數に他の數を加へるとその和は必ず前よりも大なるものにきまつてゐるが、代數では必ずしもそうでない。即ちある數に負數を加へると和の方が却て小さくなるので、この場合代數で和と云つても、實際は差の事であるからこの點の注意の爲めに、(+3)+(-2)+(+4) の様に加へ合せる數の中に負數が混入つてゐる時は、其の和を特に 代數和 と云ふのである。

和の性質

(1) 加へ合せる數順を如何様に變へても和の値は變るものでない。

a+b+c を c+b+aとしても同じ

何故ならば (+9)+(-6)=-6+(+9) であるから

(2) 或數に幾つかの數を順に加へて行く代りに加へて行く數の和を加へても可い。

a+b+c+.....=a+(b+c+.....)である。

(B) 正數、負數の減法



**減法の性質**

引き算は總て加へ算に改めることが出来る

其法則は

(1) 甲數から乙數を引くといふことは乙數の符號を變へて甲數に加へることである。

(例一) +10から+3を引くといふことは此の+3の(+ )なる符號を換へて-3として之を+10に加へることである、即ち

$$(+10) - (+3) = +10 + (-3) = +7$$

(例二)  $(-7) - (+5) = (-7) + (-5) = -12$

**(C) 乗法と除法**

二つの數を掛けたり、割つたりする計算は算術と少しも變らない  
唯符號だけを次の法則に従つて定めるのである。

**[法則 1] 二數が同じ符號の數ならば之を乗除して正數となり、二數が異なる符號の數ならば之を乗除して負數となる、**

この法則を分解して次の二つとする事が出来る。

- (乗法の法則) 同符號の二數の積は正にして、異符號の二數の積は負なり。而してその絶対値は二數の絶対値の積に等し。
- (除法の法則) 同符號の二數の商は正にして、異符號の二數の商は負なり。而してその絶対値は二數の絶対値の商に等し。

(例 1)  $(+3) \times (+5) = +(3 \times 5) = +15$

(例 2)  $(-3) \times (-5) = +(3 \times 5) = +15$

(例 3)  $(+a) \times (+b) = +ab$

(例 4)  $(-a) \times (-b) = +ab$

以上の例に於ては、掛け合す數の符號が同じであるから、積の符

號は何れも正である。

(例 5)  $(-3) \times (+5) = -(3 \times 5) = -15$

(例 6)  $(+3) \times (-5) = -(3 \times 5) = -15$

(例 7)  $(+a) \times (-b) = -ab$

(例 8)  $(-a) \times (+b) = -ab$

以上の例に於ては、掛け合す數の符號が異なるから、積の符號は何れも負である。

**[法則] 零と或る數との積はいつでも零である。**

(例 9)  $(-4) \times 0 = 0$        $0 \times a = 0$

(問題) 次の各々の積を求めよ。

$+8 \times (+9),$        $-8 \times (+3),$        $0 \times (583).$

(答を當てにせず自ら運算したまへ)

答       $+72,$        $-24,$        $0,$

(例 10)  $(+a) \div (+b) = +(a \div b) = +\frac{a}{b}$

(例 11)  $(-a) \div (-b) = +(a \div b) = +\frac{a}{b}$

(別 12)  $\frac{+45}{+5} = +\frac{45}{5} = +9$  ( $\frac{+45}{+5}$  は  $(+45) \div (+5)$  と同じ)

(別 13)  $\frac{-45}{-5} = +\frac{45}{5} = +9$

以上の例では、被除數と除數との符號が同じだから、商の符號は正である。

(例 14)  $(+a) \div (-b) = -(a \div b) = -\frac{a}{b}$

(例 15)  $(-a) \div (+b) = -(a \div b) = -\frac{a}{b}$

(例 16)  $\frac{+45}{-5} = -\frac{45}{5} = -9$

(例 17)  $\frac{-45}{+5} = -\frac{45}{5} = -9$

以上の例では、被除數と除數の符號が異ふから、商の符號は何れ



も負である。

◀ 零は正又は負のどんな数で割つても零である。

$$(例18) \frac{0}{+1} = 0, \quad \frac{0}{-0.5} = 0$$

◀ 如何なる数をも、零にて割る事は出来ない ものとす。

【注意】 積は其の因数の順序を變するも其の結果に異なることなし。

$$a \times b = b \times a$$

$$(-5) - (+3) = (+3) \times (-5) = -15$$

除法の運算は乗法の逆なるが故に同様なり。

(問題) 次の各々の商を求めよ。

$$\frac{+78}{+6}, \quad \frac{0}{+8}, \quad \frac{-36}{+9}, \quad \frac{-58}{+1}, \quad \frac{+583}{+583}, \quad \frac{-6}{+6}$$

(答をあてにせずに自らやりたまへ)

答 +13, 0, -4, -58, +1, -1.

### 第三編 整式の四則

**整式** 文字で表はした数での割り算を含んで居ない代数式を整式といふ。

例へば代数式

$$1+x, \quad a-b, \quad ax^2(\text{即ち } a \times x \times x).$$

$3x^2-7x+8$ , の如きものはいずれも整式である。

**単項式と多項式**

例は、整数  $a, b, c$  や  $-3x^2$ (即ち  $-3 \times x \times x$ ) などの様に、整式の中に含まれてゐる演算が、掛け算だけで寄せ算も、引き算もないときは、その整式を整単項式又は略して単項式と云ふ  $a+b$  や  $x-2y+$

$3z$  などの様に、幾つかの単項式の和を整多項式又は略して多項式と云ふ。多項式の中にある単項式をその他項式の項と云ふ。

例へば、 $x-2y+3z$ の項は、 $x$ と $-2y$ と $+3z$ との三つである。この中 $x$ と $+3z$ とは正項で $-2y$ は負項あると云ふ。つまり(+)を前に持つてゐる項をば正項と云つて(-)を前に持つてゐる項をば負項と云ふのである。

(注意) 正項必ずしも正の数でもなければ、負項が必ずしも負の数ではない。

尚ほ多項式はその項の数によつて之を二項式、三項式 といふのである。例へば  $b+2a$ , は二項式であり、 $x-2x+5$  は三項式である。

**係数** 一つの単項式の中の数字で表はした因数を、その他の因数即ち文字因数の係数と云ふ。

例へば  $15ax^2$  に於ては、15 を  $ax^2$  の係数と云ひ  $2x$  では2が $x$ の係数であり、 $-\frac{3}{5}x^2y$  では $-\frac{3}{5}$ が $x^2y$ の係数である。

又例へば  $-3y^2$  の係数は  $-3$  である。と云ふ様に単項式の数字で表はした因数をば、その単項式の係数と云ふこともある。(例、 $7a^2x$  の係数は7)

**同類項** 例へば単項式  $3x^2, -5x^2, 5x^2, -\frac{1}{2}x^2$  などの様に係数以外の文字因数が、すつかり同じ幾つかの項を同類項と云ふ。

例一  $x, -2x, 5x, -8x$  は同類項である。

**単項式の加法**

幾つかの単項式の和を書き表すには各項の符號をその儘にして書き列ねれば宜しい。幾つかの同類項の和はその係数の和にその共通



なる文字因数を書き列ねたるに等しい。

[例] 1.  $2a, -3b, -4c$  の和は

$2a - 3b + 4c$  ぞすればよろしく

2.  $a, 2a, 3a, 4a$  の和は

$a + 2a + 3a + 4a = (1 + 2 + 3 + 4)a = 10a$  ぞすればよろしい。

多項式の加法

幾つかの多項式の和は是等の各項を符號をその儘にして書き列ねたるに等しい。但し同類項あらば、之を一つに纏めて簡単にすること。

同類項の和

$+9ax, -4ab$  の如く二つの單項式が(+),(-)の記號又は係數を異にするのみなるときは互に同類なりと云ふ。今此種の式の加法を説かう。

例  $+9ax, -4ab, +7ab, -8ab$  の和を求むべし  $ab$  を單位と見

做せば同じ單位の  $+9, -4, +7, -8$  の代數和を求むること

なる。然るに

$9 + 7 = 16$ .....正數の絶対値の和

$(-4) + (-8) = -12$ .....負數の絶対値の和

$16 - 12 = 4$

なるを以て求むる所の和は  $ab$  の4倍即ち  $4ab$  である。

因つて次の同類項加法の式が得られる。

[法則] 多くの同類項を加ふるには正負の記號を附した儘係數を分離したるものと見てその代數和を求め、之を係數としたる同類項を作る。

(例)  $2bc, -7bc, -3bc, +4bc, +5bc, -6bc$  の和を求む。

$(+2) + (+4) + (+5) = +11$

$(-7) + (-3) + (-6) = -16$

$(+11) + (-16) = -5$

故に  $2bc + (-7bc) + (-3bc) + (+4bc) + (+5bc) + (-6bc) = -5bc$ .

多項式の簡約

多項式中にある同類項は上の方法に依つてその代數和に置き換へねばならない。この手段を簡約と云ふ。

その他爲すべき代數計算を實行し、夫れぞれ同類項の幾つも現れない様にする事を往々、「簡約する」又は「簡単にする」と云ふことがある。

(例)  $7x - 6 - 3x + 8$  を簡単にせよ。

$+7x$  と  $-3x$  とは  $+4x$ .  $-6$  と  $+8$  とは  $+2$  なる故  $4x + 2$  である。

(問題) 解答に頼らず、暗算せよ

(a) 次の和を求めよ。

1.  $a, 2a, 3a$

2.  $+3ab, -5ab, +4ab, +3ab$

3.  $a, b, -c, b, +c, -a, -b, c, +a, a, +b, +c$

4.  $5(x+y), -9(x+y), 12(x+y)$

5.  $7x, 8y, -5x, -2y$

(b) 次の式を簡単にせよ。

1.  $3a + b + a$

2.  $x^2 - x^2 + 3x - 4x^2 - 5x + 7$

3.  $3a - 2b + 2c + 2a - 7b - c$



## 解 答

- (a) (1)  $+6a$   
 (2)  $+5ab$   
 (3)  $2a+2b+2c$   
 (4)  $8(x+y)$   
 (5)  $2x+6y$
- (b) (1)  $4a+b$   
 (2)  $-4x^2-2x+7$   
 (3)  $5a-9b+c$

## 減 法 (引き算)

減法は加法の逆即ち二数の和と其一数とを知つて他の一数を求める算法である。

減法を例に就て説明しやう。

(例)  $(-4a^2b)$ より $(-7a^2b)$ を減せよ。

$a^2b$ を単位と見れば $-4$ より $-7$ を減することとなり

$$(-4)-(-7)=(-4)+(7)=+3$$

なるを以て求める所のものは $3a^2b$ である。

上の例に因つて次の同類式減法の法則を得られる。

【法則】 減数の記號を變じ加法を施すべし。

## 問 題

- $72x-38x$
- $-5ab-(3ab)$

一つの代數式から他の代數式を引くには、減数の各項の符號を變て被減数の右の順々に書き並べて行へば可い。

例一  $a+2b$ から $+3c-5d+6e$ を引け

答  $a+2b-3c+5d-6e$

◀ 同数を減するには減数の符號を變へて被減数に加へればよろしい。

(例)  $2a$ より $-3a$ を減するには

$$2a-(-3a)=2a+3a=5a$$

## 括弧用法

加減の組合せは定則の内に次のものを含んでゐる。

$$12+(8-3)=12+8-3$$

$$12-(8-3)=12-8+3$$

此式は等號の左の式の括弧を除去し右の式となしたるに相當する、故に次の法則を得る事が出来る。

【法則】 括弧の前に(+)を有するその括弧を除去するには括弧内の各項の記號を其の儘に括弧の前に(-)を有するものを除去するには括弧内の各項の記號を(括弧内の最左にありて何等の記號を有せざるものは+を有するものと見て)變じて、括弧の前の符號と共に之を取去り連記すれば宜しい。

(例)1.  $a+(b-c+d)=a+b-c+d$

2.  $a-(b+c-d)=a-b-c+d$

3.  $4a-3-\{a+2-(5-2a)\}$ の括弧を取れ、

この場合小なる括弧より次第に取るこゝ次の如し。

$$4a-3-\{a+2-(5-2a)\}=4a-3-\{a+2-5+2a\}=4a-3-a-2+5-2a$$



(問題)

次の各式の括弧を取れ。

- 1.  $2x - (7 - 5x)$
- 2.  $5x + (3x - 9) - (2 - 6x)$
- 3.  $3x - 7 - (6x - 3)$
- 4.  $a - (b - c)$
- 5.  $a + (b - c) + (c - a)$
- 6.  $a - \{b - c - (d - e)\}$
- 7.  $3a - [b - \{a + (b + 3a)\}]$
- 8.  $4a + [b - 4 + (5b - 4a)]$
- 9.  $3x^2 \times 3y^2 - [4a + (5x^2 - 3y^2) - 4a]$
- 10.  $(x^2 - y^2 - z^2) - \{a^2 + (x^2 - y^2) - (z^2 + a^2)\}$

==== 解 答 =====

- (1)  $7x - 7$
- (2)  $14x - 11$
- (3)  $-3x - 4$
- (4)  $a - b + c$
- (5)  $b$
- (6)  $a - b + c + d - e$
- (7)  $7a$
- (8)  $-4a + 6b$
- (9)  $-2x^2$
- (10)  $0$

括弧にて括ること。

- (1) 代数式の幾つかの項を符號を其の儘にして符號 + を前置したる括弧の内に入れることが出来る。

$$a + b - c + d = a + (b - c + d)$$

- (2) 代数式の幾つかの項をその各々の符號を變へて符號 - を前置したる括弧の内に入れることが出来る。

$$a - b + c - 2 = a - (b - c + 2)$$

乗法 (掛け算)

同じ数の冪の積

次の定則は組合せ定則を用ひて證明することが出来る。

例一

$$a^3 \times a^2 = aaa \times (aa) = aaaaaa \dots \dots \dots (\text{組合せ定則}) \dots \dots \dots = a^5$$

故に冪の指數定則を得られる。

同数の冪の積は同數に其の指數の和を指數となしたるものに等し。

例二

$$a^3 \times a = a^{3+1} = a^4$$

問題

次の積を問ふ

- 1.  $a^3 \times a^7$
- 2.  $y^{100} \times y^3$

單項式の乗法

交換組合はせ及指數の定則及記號法則を諸君は已に知りたる故次の運算の理は明かであらう。

例一

$2a^3b^2$  と  $-3a^2b^4$  との積を求めよ。

此二數の記號異なるを以て積の記號は負なり次に

$$\begin{aligned}
 2a^3b^2 \times 3a^2b^4 &= 2 \times a^3 \times b^2 \times 3 \times a^2 \times b^4 \quad (\text{組合せ定則}) \\
 &= 2 \times 3 \times a^3 \times a^2 \times b^2 \times b^4 \quad (\text{交換定則}) \\
 &= 6(a^3 \times a^2)(b^2 \times b^4) \quad (\text{組合せ定則}) \\
 &= 6a^{3+2}b^{2+4} = 6a^5b^6 \quad (\text{指數定則})
 \end{aligned}$$

故に求むる所の積は  $-6a^5b^6$  である。

因つて次の單項式乗法の法則が得られる。

(法則第一) 乗法の記號法則に因り積の記號を定め次に係數の積を係數として各文字の積を作る、若し同文字あるときは指數定則を



用かて其積を作る。

単項式の積は矢張単項式であつて其係数は掛け合はす式の係数の積に等しい又其積の文字因数は掛け合す式の文字因数を並べて書いたもの、即ちすべての文字因数の積に等しい。

例二

$$(-2a^2b^3) \times (-4ab^2c^3) = 8a^{2+1}b^{3+2}c^{3+0} = 8a^3b^5c^3$$

問題

1.  $3a^4, 4a^5$
2.  $2a^2b, 3ab^2$
3.  $-7x^4y^2, -8y^2z^2$

多項式に単項式を乗する法

乗法の配分定則及法則第一を諸君は知りたる故次の運算の理は明かであらう。

多項式と単項式との積は其多項式の各項と単項式との積を皆加へ合せたものに等しい。

例一  $a+b$  に 3 を乗せよ。

配分定則に因りて  $a, b$  に別々に 3 を乗すれば  $3a+3b$  を得因て多項式に正の単項式を乗する法則が得られる。

(法則第二) 法則第一に因りて多項の各項に乗数を乗じ其結果を列記すべし。

例二

$a+b$  に  $-3$  を乗せよ

多項式に負の単項式を乗する結果  $-3a-3b$  を得。

例三

$$(6x^2+7xy-3y^2) \times (+5a^2y) = +30x^2a^2y + 35x^2y^2 - 15x^2y^3$$

問題 次の積を求む

1.  $8a^2-9ab, 3a^2$  (答)  $24a^4-27a^3b$
2.  $x^3y^2-y^3s^4+x^2s^4, x^2y^2s^2$  (答)  $x^4y^4s^2-x^3y^3s^6+x^4y^2s^6$
3.  $2x^3+3x^2y-4xy^2-y^3, 5xy$  (答)  $10x^4y+15x^3y^2-20x^2y^3-5xy^4$

多項式に多項式を掛けるには、乗数の總ての項を一つ一つ被乗数に掛けて得たる總ての積を加ふればよい。

例一

$$(x+2)(x+3) = (x+2)x + (x+2) \times 3 = x^2+2x+3x+6 = x^2+5x+6$$

(問題)

(1)  $(x+5)(x-4)$

(解)  $(x+5)x + (x+5)x - 4x^2 + 5x - 4x - 20 = x^2 + x - 20$

(2)  $(x-3)(x-2)$

答  $x^2-5x+6$

(3)  $(x-7)(x+5)$

答  $x^2-2x-35$

(4)  $(x^2-4)(x+6)$

答  $x^3+6x^2-4x-24$

(5)  $(x-2)(x+12)$

答  $x^2+10x-24$

除法 (割り算)

除法は算術と同じ様に二数の積とその一数とを知つて他の一数を求むる算法である。

指數定則

指數定則 ある文字の冪をそれよりも次數の低い同じ文字の冪で割つた時の商は矢張り同じ文字の冪であつて、その指數は被除數の指數から除數の指數を引いたものに等しい。

諸君は已に乗法に關する指數定則を知つたのであるから、次の運算の理は容易に了解し得るであらう。



例一  $a^3 \div a^2 = a^{3-2} = a^1$

何故ならば、 $a^3 \times a^2 = a^{3+2}$  なるが故である。

故に、除数の指数が被除数の指数より大ならざるときは次の様に云ふことが出来る。

同数の冪の商は同数、被除数の指数より除数の指数を減じたる残りを指数としたものに等しい。

例二  $a^5 \div a = a^{5-1} = a^4$

例三  $a^3$  を  $a^5$  にて割れ

被除数の指数が除数の指数よりも小さい故次の如く分數となる

$$a^3 \div a^5 = \frac{1}{a^{5-3}} = \frac{1}{a^2}$$

(問題) 次の商を問ふ

1.  $x^7 \div x^4$       2.  $a^9 \div a^5$

==== 解 答 =====

- (1.)  $x^3$                       (2.)  $a^4$

**単項式の除法**

除法は乗法の逆であるからして、乗法の法則、除法の指数定則及び記號法則に依つてこの場合の法則を導き出すことが出来る。

單項式を單項式で割て得たる商は矢張り單項式であつて、其係數は被除數の係數を除數の係數で割て得たる商に等し、亦其文字因數は法の中にある各々の文字の冪で實の中のそれと同じ文字の冪を割て得たる商と、實の中だけにあつて、法の中にない文字の冪を其儘取た者の積に等し。

例一

$15a^2b^3c$  を  $-3b^2$  にて除すべし。

二數の記號異なる故商の記號は  $-$  である。

次に  $15a^2b^3c$  を  $3b^2$  にて除すれば

$$\frac{15}{3} \cdot a^2 \cdot \frac{b^3}{b^2}$$

何となれば之に  $3b^2$  を乗すれば  $\frac{15}{3} \times 3 \cdot a^2 \cdot \frac{b^3}{b^2} b^2 c$  即ち  $15a^2b^3c$

となり、即ち被除數が出るからである。従て其商は  $15a^2b^3c$  であつて求むる所の商は  $-a^2b^3c$  なり。

故に次の單項式除法の法則が得られる。

(法則第一) 除法の記號法則によつて商の記號を定め指數定則に因て同文字の冪の除法を施した商と被除數のみに含まれたものとの積を作つて係數の商を其係數とする。

例二

$$-12a^2b^3c^2 \div (-3ab) = \frac{12}{3} \cdot \frac{a^2}{a} \cdot \frac{b^3}{b} \cdot c^2 = 4abc^2$$

問題 次の商を求めよ。

1.  $24a^3 \div 8a^2$       2.  $18x^2y^2 \div 6x^2y$

==== 解 答 =====

- (1)  $\underline{3a}$                       (2)  $\underline{3xy}$

**單項式にて多項式を割る法**

多項式を單項式で割るには其多項式の項を一つ一つ單項式で割つて得る所の總ての商を加へ合すれば宜しい。

諸君は已に除法の配分定則にて

$$(18-6) \div 2 = \frac{18}{2} - \frac{6}{2}$$

なることを知つてゐる因て次の法則が得られる。



(法則第二)

法則第一に因て被除数の各項を除数にて除し其商を連記すべし。

例

$a^3b^5 - a^2b^5$  を  $a^2b^5$  にて除すべし

$$\frac{a^3b^5}{a^2b^5} - \frac{a^2b^5}{a^2b^5} = ab - 1$$

例

$a^3b^5 - a^2b^5$  を  $-a^2b^5$  にて除すべし

$$\frac{+a^3b^5}{-a^2b^5} + \frac{-a^2b^5}{-a^2b^5} = -a + 1$$

問題

次の左式を右式にて除せ

(1)  $4x^3 - 12x^2$ ,  $4x$

(4)  $27ab - 45bx - 18b^2y$ ,  $6b$

(2)  $12a - 9a^2b + 18ab^3$ ,  $3a$

(5)  $18a + 6a^2x - 24a^3x^2$ ,  $-12ax$

(3)  $x^3y - 3x^2y^2 + 4xy^3$ ,  $xy$

(6)  $8x - 12y$ ,  $-4$

解答

(1)  $x^2 - 3x$

(4)  $\frac{27}{6}a - \frac{15}{2}x - 3by$

(2)  $4a^2 - 3ab + 6b^3$

(5)  $-\frac{3}{2x} - \frac{a}{2} + 2a^2x^2$

(3)  $x^2 - 3xy + 4y^2$

(6)  $-2x + 3y$

多項式を多項式にて割る法

多項式を多項式で割るには、恰も算術の二桁以上の $\square$ の割り算と同様に計算するのである。

例へば  $6x^4 + 11x^3 - 4x^2 - 14x - 5$  を  $2x^2 + 3x + 1$  で割るには此の被除式及除式が共に  $x$  の降冪順に排列されてあるのだから

$$\begin{array}{r}
\phantom{2x^2+3x+1)} 3x^2+x-5 \text{ (答)} \\
2x^2+3x+1 \overline{) 6x^4+11x^3-4x^2-14x-5 \dots\dots\dots \text{(被除式)}} \\
\underline{6x^4+9x^3+3x^2 \dots\dots\dots 3x^2(2x^2+3x+1)} \\
\phantom{2x^2+3x+1)} 2x^3-7x^2-14x-5 \\
\underline{2x^3+3x^2+x \dots\dots\dots x(2x^2+3x+1)} \\
\phantom{2x^2+3x+1)} -10x^2-15x-5 \\
\underline{-10x^2-15x-5 \dots\dots\dots 5(2x^2+3x+1)} \\
\phantom{2x^2+3x+1)} 0
\end{array}$$

- 算術の割り算の形式の様に書き、
- (1) 先つ始めの被除式の第一項を除式の第一項で割つた商、即ち  $6x^4 \div 2x^2$  の商なる  $3x^2$  を答の方に記し、次に  $3x^2$  を除式に乘じたる  $3x^2(2x^2+3x+1)$  なる  $6x^4+9x^3+3x^2$  を被除式の下に書いて引き算を行ふ。
  - (2) さすれば引いた残  $2x^3-7x^2+14x+5$  を得るであらう。之を第一剰餘と名づけると、恰も  $2x^2+3x+1$  で此剰餘  $2x^3-7x^2-14x-5$  を割る気持ちで  $2x^3 \div 2x^2$  を求め答の處へ  $2x^3 \div 2x^2$  の商  $x$  を書き、 $x$  と除式との積  $x(2x^2+3x+1)$  なるべき  $2x^3+3x^2+x$  を第一剰餘より引いて第二剰餘なるべき  $-10x^2-15x-5$  を得る。
  - (3) 次に前と同様に此第二剰餘なるべき  $-10x^2-15x-5$  を又もや  $2x^2+3x+1$  で割る積りで其の首位の割り算  $-10x^2 \div 2x^2$  を求め商  $-5$  を答の處に書いて、第二剰餘  $-10x^2-15x-5$  から  $-5(2x^2+3x+1)$  なるべき  $-10x^2-15x-5$  を引けば、餘りは零となるから結局餘がなければ割り切れたることになるのである、仍て答は  $3x^2+x-5$  であるといふことになる。何となれば、被除式から  $3x^2(2x^2+3x+1)$  と  $x(2x^2+3x+1)$  と  $-5(2x^2+3x+1)$  等の代数和を引いたならば0となつた、依つて被除式は是等の和に等しい筈だから



$$\text{被除式} = 3x^2(2x^2+3x+1) + x(2x^2+3x+1) - 5(2x^2+3x+1)$$

處が此等號の方は  $2x^2+3x+1$  に  $3x^2, x, -5$  を別々に掛けて加へたのだから一度加へて置いたものに  $2x^2+3x+1$  を掛けたものに等しい。故に被除式  $= (3x^2+x-5)(2x^2+3x+1) \rightarrow$  商  $\times$  (除式) であるから、商と除式との積は被除式に等しいから此除法は正確だといふ事が解る譯けである。

==== 問題 ====

(1)  $(2x^2-x-1) \div (2x+1)$

(2)  $(9x^3+3x^2+x-1) \div (3x-1)$

(3)  $(100x^3-3x-13x^2) \div (3+25x)$

==== 解答 ====

$$\begin{array}{r} x-1 \\ 2x \times 1 \overline{) 2x^2+x-1} \\ \underline{2x^2+x-1} \\ -2x-1 \\ \underline{-2x-1} \\ 0 \end{array}$$

答  $x-1$

○  $2x^2 \div 2x = x$  となること  
 $-2x+2x = -1$  となること  
 $-x$  から  $+x$  を引けば  
 $-2x$  となること  
 $-x$  から  $+x$  を引けば零など云つてはならぬ。

$$\begin{array}{r} 3x^2+2x+1 \\ 3x-1 \overline{) 9x^3+3x^2-x-1} \\ \underline{9x^3-3x^2} \\ 6x^2+x-1 \\ \underline{6x^2-2x} \\ 3x-1 \\ \underline{3x-1} \\ 0 \end{array}$$

○  $3x^2$  から  $-3x^2$  を引けば零ではなくして  $6x^2$  だといふことが解れば  $x$  から  $-2x$  を引いて  $3x$  となることは了解出来るだらう。

$$\begin{array}{r} 4x^2-x \\ 2x+3 \overline{) 100x^3-13x^2-3x} \\ \underline{100x^3-12x^2} \\ -25x^2-3x \\ \underline{-25x^2-3x} \\ 0 \end{array}$$

○ 除式も被除式も共に  $x$  の降幂順に並べて置いてから計算すること。

## 第二編 方程式

(イ) 恒等式 等式の左邊と右邊とが全く同一の結果となるもの即ち式中の各邊の同一文字に如何なる値を置き換へるも恒に左右兩邊が同一値を示すべきものを云ふ。

(ロ) 方程式 等式の兩邊が全く同一の結果とならぬもの、即ち式中の文字に或る特別なる値を置き換へたるときにみに等式の左右兩邊が相等しくなるべきものを云ふ。

方程式に於ては、其の中に含まれて居る文字の表はすべき數、即ち其文字の値が各々其方程式に依つて定まるべきものである。再言すれば、方程式に於ては、其の中の文字を如何にすれば等式が保たれる様になるべきかといふ風に、文字の値は此等式が成立つ様に定められるべきものである。斯の如き文字を示すべき數を方程式の未知數といひ、其の値を求めることを方程式を解く(又は單に解く)といひ、其の文字の値のことを根といふのである。

例へば  $x+3=5$  に於て  $x=2$  である時に限つて等式が満足せられる。であるから  $x=2$  は方程式  $x+3=5$  の根である。又  $2x-5=11$  に於ては  $x=8$  の時に限つて等式が保たれるから  $x=8$  は  $2x-5=11$  の根である。

従つて具へられた數が具へられた方程式の根であるかどうかを驗するには、具へられた方程次の左邊及び右邊の未知數(例へば  $x$  の様な)へ與へられた數を入れて各邊を別々に計算し、其値が相等しくなるかどうかを考へて見ればよいのである。



## 問 題

(1) 次の各々につきて恒等式と方程式とを區別せよ。

(a)  $5x+1=3x+5$

(b)  $a(x+8)+1=(ax+1)+8a$

等號の左邊と右邊とが同一の形となるか、否かを判別すればよい。

(a) (a)に於ては  $5x+1$  と  $3x+5$  とがソツクリでないから 方程式 であり。

(b) (b)に於ては

$$\text{左邊} = a(x+8)+1 = ax+8a+1$$

$$\text{又 右邊} = (ax+1)+8a = ax+1+8a = ax+8a+1$$

となつて左右兩邊がソツクリとなる。仍て是は 恒等式 である。

(2)  $x=2$  は  $(x+1)(x+2)(x+3)=60$  の根なるや否やを檢せ。

(解)  $x=2$  が根なれば、左邊の  $x$  の代りに  $2$  を置き換へた時、左邊が  $60$  とならねばならぬ。

であるから  $x=2$  と置きかへれば

$$(x+1)(x+2)(x+3) \text{ は } (2+1)(2+2)(2+3) = 3 \times 4 \times 5 = 60$$

となる 仍て  $x=2$  なる時は此等式が満足せられる事が判つた。

であるから  $x=2$  は  $(x+1)(x+2)(x+3)=60$  の根である。

等式の變化について

(1) 等式の各邊に同じ數を加へても等式が成立つ。

(2) 等式の各邊から同じ數を減じても等式が成立つ。

(3) 等式の各邊に同じ數を掛けても等式が成立つ。

(4) 等式の各邊を同じ數で割つても等式が成立つ。

例へば

(1) は  $a=b$  ならば  $C$  を各邊に加へれば  $a+c=b+c$  といふ等式が得られる。

(2) は  $a=b$  なるときは  $C$  を各邊から引いても  $a-c=b-c$  となることを示し

(3) は  $a=b$  ならば  $ac=bc$  だといふのであり

(4) は  $a=b$  ならば  $\frac{a}{c} = \frac{b}{c}$  だといふのである。

移項とは

茲に  $5x-8=2x+4$  といふ一つの等式がある。さすれば前述の如く、等式の各邊へ同じ數を加へても等式が成立つのであるから、先づ各邊へ  $8$  を加へて見ると

左邊は  $5x-8+8=5x$  となるから上の等式は  $5x=2x+4+8$  となるのである。

前述の (2) の形を適用して各邊から同じものを引いても等式が成立つのであるから、各邊から  $2x$  を引いて見ると 左邊は  $5x-2x$  であり、右邊の  $2x$  はなくなる。従つて  $5x-2x=4+8$  となるのである。

是を形の上から觀察すれば、初め左邊にあつた  $-8$  は右邊へ移つて  $+8$  となり、右邊の  $2x$  は左邊へ移つて  $-2x$  となつたのである。



故に等式の項は其の符號を變へて一邊から他の邊へ移すことを得。

斯様に左邊から右邊へ、右邊から左邊へ項を移すことを移項すると云ふ。

### 第一章 一元一次方程式

元とは方程式の中に含まれてゐる未知數の種類の数の意味す。

次とは方程式の中に含まれてゐる各項の中未知數因數の数によつて何次と呼ぶのである。

従つて  $3x-5=2x+17$  の如く一種類の未知數  $x$  のみ含んでゐる。而も  $x$  の次數が一次である様なものを一元一次方程式といふ。

#### 解 法

$$x+2=5$$

これは  $x$  と 2 を加へて 5 となるのであるから  $x$  は 5 よりも 2 小である筈、従つて  $x$  は  $5-2=3$  である。

けれども、之を求めるには  $x=5-2$   $\therefore x=3$  と答へるのである。

(2)  $x-3=1$  に於ては  $-3$  を移項して

$$x=1+3 \quad \therefore x=4。$$

方程式を解くには

(イ) 未知數を左邊に置き、既知數を右邊に置く様にする。

(ロ) 未知數の係數を 1 ならしめる様に未知數の係數で右邊を割ること

従つて

一元一次方程式の解法は未知數を含む項を左邊へ移し、既知數の項を右邊へ移項して各邊を夫々に一まとめとし、未知數の係數で割つて未知數の値を求める。

(例)  $12x-8-8x+6-12+3x=0$  を解くには  $x$  を含まぬ項を右邊へ移項して

$$12x-8x+3x=8-6+12$$

$$\therefore 7x=14 \quad \therefore x=2$$

驗算

$$12x-8-8x+6-12+3x=0$$

$$(12 \times 2) - 8 - (8 \times 2) + 6 - 12 + (3 \times 2) = 0$$

$$24 - 8 - 16 + 6 - 12 + 6 = 0$$

$\therefore$  に  $x=2$  なる時方程式が満足せられるから正しい答へであることが判るのである。

#### ==== 問 題 ====

(1)  $8x+5=4x+4$

(2)  $12-5x=2x-2$

(3)  $5x-6(x-5)=2(x+5)+5(x-4)$

#### ==== 解 答 ====

(1)  $8x+5=4x+4$

$$\therefore 8x-4x+4-5$$

$$\therefore 4x=-1$$

$$\therefore x=-\frac{1}{4}$$

(2)  $12-5x=2x-2$



$$\therefore -5x - 2x = -2 - 12$$

$$\therefore -7x = -14$$

$$\therefore x = \frac{14}{-7} \quad \therefore x = 2$$

$$(3) \quad 5x - 6(x - 5) = 2(x + 5) + 5(x - 4)$$

括弧を解けば  $5x - 6x + 30 = 2x + 10 + 5x - 20$

移項して  $5x - 6x - 2x - 5x = 10 - 20 - 30$

$$\therefore -8x = -40$$

$$x = \frac{-40}{-8} = 5 \quad \text{答 } x = 5$$

— 實力養成問題 —

$$(1) \quad 12 - 5x = 2x - 2$$

$$(2) \quad 3x - 6 - 2x + 6 + 4x - 20 = 0$$

$$(3) \quad 5x + 1 = 8x - 17$$

~~~~~  
(1)  $x = 2$       (2)  $x = 4$       (3)  $x = 6$   
~~~~~

第二章 聯立一次方程式

二つの未知なる元を有する二つの方程式に於て、各未知数が夫々同じ値を取つて同時に各方程式を満足する様な場合に此二つの方程式が聯立するといひ、聯立し得べき方程式を聯立方程式といふ。

解 法

$$3x + 7y = 27 \dots\dots\dots(1)$$

$$5x + 11y = 43 \dots\dots\dots(2)$$

といふ一組から聯立すべき様な  $x, y$  の値即ち根を求めんとする時、第一法として比較法又は等置法がある。

(1)の  $x$  と(2)の  $x$ ; (1)の  $y$  と(2)の  $y$  とが同じ値を有せねばならぬといふ點に着眼すれば、(1)の  $y$  の項を右邊に移して左邊を  $x$  だけ残る様に書き表はし、(2)も之と同様に左邊に  $x$  だけ残す様に書き表はして見たとき此(1)と(2)の  $x$  が等しい譯だから右邊の二つが等しくなければならぬといふ事になるだらう。

$$(1) \text{ より } 3x = 27 - 7y \quad \therefore x = \frac{27 - 7y}{3} \dots\dots\dots(1')$$

$$(2) \text{ より } 5x = 43 - 11y \quad \therefore x = \frac{43 - 11y}{5} \dots\dots\dots(2')$$

そこで(1)'と(2)'の右邊を等しく置いて見れば

$$\frac{27 - 7y}{3} = \frac{43 - 11y}{5}$$

處が此等式は同じ値を有すべき  $y$  についての一次方程式であるから、是を解して見ると、分母を拂つて

$$5(27 - 7y) = 3(43 - 11y)$$

$$\therefore 135 - 35y = 129 - 33y$$

$$\therefore -35y + 33y = 129 - 135$$

$$\therefore -2y = -6 \quad \therefore y = 3$$

となつて  $y$  の値が定まる。此の  $y$  の値は(1)と(2)とに共有さるべき値である。即ち(1)'の中での  $y$  値であり同時に(2)'の  $y$  の値である。故に  $y$  の値を(1)又は(2)'の何れかの  $y$  の代りに置き換へて見ると従